

遺伝詞が見える少年

リボルビングバンカー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

魔法少女リリカルなのはの世界に、都市シリーズの記憶を持つ少年がいて、転生者なるものが紛れ込んでいたら、という話ですの。

ややこしい用語は一度目は必ずルビを降ってるはずですよ。読めなかつたら感想にください。ええ、ルビ関連はできるだけ早く返信します。

J u d . 転生者は合計で四人、内一人は神様による転生ではない。二度は言わない、覚えておけ。

じゃあ、交わった世界をできるだけ楽しんでくれると幸いだけんどのう。

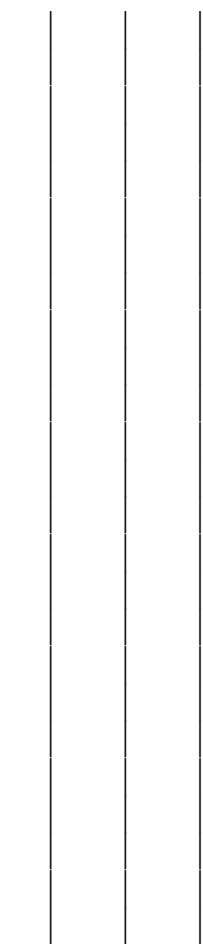
《プロフィール公開（後悔）が欲しいなら言っ頂ければある程度、順番に公開します》

2 2	2 1	A ' s	2 0	1 9	1 8	1 7	1 6	1 5	1 4	1 3	1 2	1 1	1 0	9	8	7	6	5	4	3	2	1
108	105		97	92	88	85	82	76	69	66	62	56	52	43	29	24	21	16	12	7	4	1

目
次

4 5	4 4	4 3	4 2	4 1	4 0	S t r i k e r s	3 9	3 8	3 7	3 6	3 5	3 4	3 3	3 2	閑 話	3 1	3 0	2 9	2 8	2 7	2 6	2 5	2 4	2 3
233	226	223	214	211	209		206	201	193	189	183	171	164	151		148	140	135	131	126	123	120	116	111

4 4 4
8 7 6



246 241 237

「ア」

という一言と共に、手に持つ出来損ないの神形具デヴァイスを振り抜く。音の爆発が起きたかのように大気が爆ぜる。

翠の色をした詞色ネイロが五行バストされた結果だ。

と、同時に手に持つ剣にも罅が入った。

「やっぱ、こんな出来じゃダメかあ」

ガリガリと頭をかく。

旧時代のオリジナルの神形具と異なり、低予算の神形具の出来栄えでは強度が足りない。

つまりは自分の未熟が招いた結果だ。

「本気で一から作ってみますか」

「どこに行くつもりなの、アル」

「あー、わずか。なんでこんな時間に?」

「いつもこの時間はここにいるかなって。」

それで、遺伝ライプ詞なんて飛ばして何してたの?」

「神形具のチェック。昼休みのプールなら誰も来ないから」

「どうりで大きな荷物だと思った。」

じゃ、授業に戻るよ」

ここで「えー」といっても無駄だろう。

おとなしくついていくことにした。居候の身では勝てない。

それはそれとして、

「放課後は工房に潜るから」

「ご飯くらいはまともに食べてよね」

「善処はする」

そういつて何度も食べ損ねてるんだから、と文句を言われる。熱中して忘れるなんてよくあることだ。

「あ、私の神形具もメンテしておいてくれると嬉しいな」

「五行バスター師しかメンテできないわけじゃないだろうに」

それどころか風水チューナー師でも五行師でもない。

彼女は神器リズムと技能テックの使い手だ。

たまたま一緒に発見したMDと適応したらしい。

「初心者じゃ手入れもできないんだよ。機構がわからなくて」

「はいはい、滅多に使わないくせに」

むー、と膨れてポコポコと背中を叩いてくる。

「あ、仲良し二人組が帰ってきたわよ」

「あはは、ほんとに仲良しさんだね」

アリサ・バニングスと高町なのは。

一応級友である。すずかとは一年の頃から友だとだとか。

「外に居たんでしょ、アルはともかくすずかはさっきの突風は大丈夫だったの？」

窓がすごく揺れてたけど」

「うん、あれくらいなら平気。心配してくれてありがとう」

「べ、別に大したことじゃないわよ」

ツンデレ乙、と声に出すとシバかれるので眺めておく。

「なによ、その視線は」

「別に。百合百合しいなど」

三人が首をかしげる。まあ、知ってたら驚きだが。

「と、授業が始まるな。席に着こうぜ」

「ちよつと！」

昼から二時限終え、放課後になったあとすぐにガラクタになりかけてる試作品の神形具を入れた袋を手にしてバスに乗り、月村家に帰る。

両親が海外に行っている間に両親の知り合いということで厄介になっっている。

かれこれ4年目だが、そんなに仕事を楽しんでいるだろうか。

あるいは、おかしな自分を遠ざけたいだけだろうか。まあ、真実は

わからない。

最寄りのバス停から歩き、家に入らず直接庭の土蔵に入って明かりを付け、自分の工房にこもる。

すずかの神形具の確認をして、自分のデヴァイスを解体する。

「作り直しだな」

バラした結果、刀身が歪んでいたため一から作り直したほうが早いという結論に達した。

制作は土曜日になってからのほうがいいかも知れない。

グツと伸びをして、土蔵の整理をする。

すずかの神器と神形具はここに眠っていたものだ。

曰く、前の世界からの遺品らしい。そんなことを示す一文があった。

「さて、頑張りますか」

ひとまずは、倉庫にしまっている素材の回収と、適当に山済みになっている道具の整理か。

結果として、夕飯の時間に呼び出されるまで土蔵にこもっていた。

キイン、キインと土蔵内に音が響く。

神形具を鍛えている音だ。

神形具は、五行師が壊しきらないようにほどほどに五行し、金属の修復力を利用して鍛える。

鍛える詞色を間違えないように慎重に叩いていく。

集中力が続く限り鍛え続けた結果、三時間ほど続けることができた。

「入って大丈夫？」

「ちようど作業が終わったとこだ」

「さすがが入ってきた。」

キリもいいし、本邸に戻ろうかと思っていたところに紅茶と菓子を持ってきてくれたのでそのまま土蔵でいただくことにした。

チラチラと置かれている刀身をみて、気になっているのだと理解したが、とりあえず糖分が欲しかった。

紅茶を飲み終え、クッキーをいただいたあとに疑問に答えることになった。

「どのくらいの詞階オクターブで鍛えたの？」

「軽く六十万くらいだな。」

それ以上は俺の集中力がもたん」

「神形具って何日かかけて作るものじゃなかったっけ？」

「その通りなんだが、余り間を開けすぎても遺伝詞が固まって鍛えるのが難しくなるからな。」

土日の二日だけでできるだけ鍛えるしかないかなあ」

固まった遺伝詞は五行するのチュインも風水するのチュインも難しくなる。

風水五行の基礎だ。

無理やりすることもできるが、その場合はもっと高い詞階をぶつける必要があるし、間違った詞色と詞階をぶつけると鍛えるどころか壊してしまう。かなり慎重な作業だ。

自分じゃ百七十万詞階までしか手繰れない。手記に残された人物

は軽く百七十万詞階以上手繰れたらしいのだが。

「あんまりよくわからないんだけど、そういうものなんだ」

「まあ、風水五行に関わらないとわからないよな。

風水は直し、組み替える。五行は壊し、鍛える。

まあ、すずかにはあまり関係がないかもしれんがな」

「神器は適合率が重要だもんね」

遺伝詞の変換という意味では同じだが、過程が違う。

包丁を作るのに型に入れて作るのと鋸を使って作るくらい違う。

神器は音楽を媒体に事象を起こすのに対し、風水五行は掛詞メッセージを媒体に事象を起こす。

「まあ、俺の五行も正しい五行じゃないからなあ」

自分は雅式首聯オーバードラップや樂府式首聯ワインドアップを用いない。

というか、この二つは馴染まなかった。

拡大定義した風水五行のほうが使いやすいつと感じたから諦めたというのもある。

「で、何のようだ？」

「明日、なのはちゃんとアリサちゃん、恭也さんが遊びに来るから出来れば……」

「了解。できるだけ早く仕上げる」

ああ全く、泣いてる女のこと困ってる女の子には勝てないな。

居候だということを加味しても。

「じゃ、これ持っとけ」

革を鞆にしたナイフを渡しておく。

出来栄えはそこそこといったところだが、無いよりはましだろう。

「これは？」

「春休みに作っておいた分だ。

ナイフだから草薙との相性はイマイチだが、護身用程度にはなるだろう」

軽く刃を叩いて出来栄えを確認している。

というか、草薙を使う前提なら切れ味を確認する意味なんてないはずなのだが。

「うん、いい出来だね。五十万詞階くらい？」

「確かそのくらいだな。制御はまだまだ高くないからこれからどんどん練習しないとな」

ぷうつと顔を膨らませて、

「今のうちにいろいろ遊んでおこうよ！」

ただでさえ引き籠もりがちなんだから！」

まあ、それを否定する要素なんてない。

「はいはい、後三時間くらいしたら飯くいに戻るから」

「遅れないでよね」

「努力はする」

さて、出来るだけ鍛えておくか。

最近の街の様子的に何があってもおかしくはないからな。

「変なことがなければいいんだけどなあ」

自分はともかく、すずかは訳ありだからなあ。

できた。

グツと伸びをして、時計を見る。四時か

「とりあえず組み上げてから寝るか」

なんだかんだで寝たのは五時。

出来自体は悪くないと思うが、大型武器を作るのはまだなれない。

まあ、試してみないとわからない。

風水五行を初めて三年じやイマイチ感覚も掴めない。

あ、本邸はもう閉まつてるな。こっちの仮眠室で寝よう。

パァン！ という破裂音で目が覚めた。八時か。

後、夜食を入れていた紙袋を破るな。

「アル、なのはちゃんたちが来るからちゃんとしてって言ったよね？」

「……ああ、すまん。が、もう少し眠らせてくれ。」

今日作業ができないから徹夜になったんだ」

大あくびをしながら完成した神形具を指す。

「完成してたんだね。どれど……」

「あつ、馬鹿！」

触れた瞬間、刃の向いていた土蔵の柱が断ち切られた。

慌てて遺伝詞を遮断し、お怒りの顔を向けてくる。

「触っていいとは言ってなかっただろうに」

「触れただけで断ち切るとは思わなかったんだよ！

どうしてこんな危ないものポンと置いてあるかな!？」

さつきも言ったが完成したあとすぐに寝たからだ。

とはいえ、土蔵は崩れる様子がなくて何よりだ。

それはそれとして、遺伝詞の制御くらいしておけよ。

「言ったじゃん、徹夜だったって」

「はあ、誰にも触らせちゃダメだからね？」

欠伸を噛み殺しつつ善処する、と答えて。

「今さっきここで青色の爆発がしたけど大丈夫!？」

余計な人物が来た。

「おはよう。後着替えるから見たくないなら出てけ」

「え、すずかは見たいわけ？」

そ、そんな進んでる関係なの?」

とんでもないシーンを見てしまったのかと後ずさりする。

「違う、違うからアリサちゃん！」

私は起こしに來ただけだから！」

「つて、すずかはなんで剣持ってそんな発言してるのよ!？」

「危ないからさっさと元あった場所においておけ」

振り回した結果またどこかを壊したら洒落にならない。

九十万詞階も操れるすずかなら土蔵を一瞬で壊しきることもできるだろう。

とりあえず布団から出て畳み、服を着替える。

「あんた、意外と鍛えてるのね。」

つて違う! 女子の前で堂々と着替えるな!!」

「いや、忠告はさっきしただろうに。」

あと、見られて恥ずかしい体はしていない」

「くく! あーもう! すずか! さっさと出るわよ!!」

「う、うん!」

ドタバタと女性陣が出て行った。

初心だなあ。

そういえば、まずい発言があったな。

あーあ。変なことにならなきゃいいんだが。

「こんにちは、今日はよろしくお願いします」

「いらつしやいなのはちゃん」

「遅いわよ」

「にや？・　ところでなんで二人は顔が赤いの？」

いきなり爆弾を投げ込んできた素晴らしき一撃に乾杯^{プロージット}。

その攻撃は二人によく効く。

「にや、何でもないから気にしない！」

「そうそう、気にしないで！」

「アル君は知ってる？」

話題が飛んできた。

ニタリ、と顔を歪ませて

「知ってる。アリサが夜のプロレスごっこことかんちg」

「アル！　黙ってその口を閉じなさい!!」

「夜のプロレスごっこ？」

場が混沌と化してきた。

「具体的に言うませ」

「アル、その首はいらなのかな？」

耳にイヤホンが付いてる。洒落ではないようだ。

「はいはい、耳年増な二人のために黙っておいてあげよう。

このムッツリどもめ」

「ぐぬぬぬ。こればっかりは言い返せない」

はっはっは。変に知識を貯めるからだ。

首をかしげてるのはよ、どうかそのまま無垢に育て。

こんな耳年増になっちゃダメだぞ？

まあ、そのうち知るんだろうけど。

「家に帰ったらお兄さんにプロレスごっこは楽しかったって聞けばい

いゃ」

はっはっは。

「ダメよ！　アルの甘言に騙されると後でひどい目に遭うんだから

！」

「そうだよ、この間も騙されたばかりなんだから！」

「親に聞くなって忠告はしたはず」

調べて恥ずかしい目にあつたら自己責任だ。

「調べるより聞いたほうが早そうだったじゃない！」

アルのバカ！ 鬼畜！ 変態！」

「ハハハハハハ」

アリサにガクガクと揺さぶられるがもう慣れたものだ。

流石に気分が悪くはなるが吐きはしない。耐性がある程度付いた。

「ところで、なんで集まったわけ？ 宿題なら自分でやれよ」

「いや、流石に勉強くらいついていけるわよ」

では何のために俺まで駆り出されたわけなのだろうか？

「ただのお茶会のはずだったんだけど……」

「アルが茶々入れなかつたらね」

おや、俺のせいらしい。

気をきかせて……なるほど。

「フムフム、俺様主人公！」

みたいな顔してる阿呆が気に入らないと

名前覚えてないけど。

「慎二くん、あれがなければ優しくって親切なんだけど……」

ああ、神無月^{トウカメ}慎二か。

常に遺伝詞が乱れてる事しか覚えてなかった。

「端的に言つてクズだけだな」

「へっ？」

なんだ、なのは知らないのか。

「いじめの常習犯なのよ、あいつ。男女平等なのだけはすごいと思うけど」

「ついでにカツアゲに暴力沙汰と倍プッシュ。

何で捕まっていなんだあいつ？」

「私たちの見えないところならやりたい放題らしいんだよ」

「ふええええええ!!」

ついでに、読める遺伝詞は将に下衆。

「思い出しただけで腹が立ってきた。

ところですか、そのナイフ何？」

「見たことない意匠だけど」

「お守り、かな」

お守りと言えばお守りか、攻撃用だけど。

「見せてもらってもいい？」

「うん、いいよ」

刃引きした刀身にパラシュートコードを巻いてある柄の鏝が多少大きいナイフ。

一応風水五行もできるようにはしてある。

怒ったままの赤い遺伝詞が強くなっている。

「アリサは触るなよ？」

「どうして……えっ？」

机の端が切断された。やっぱり。

「それ、一部の人間なら人を軽々殺せるからな」

「それを先に言いなさいよ!!」

「お守りというか、護身用のナイフだったんだ……」

喉を潤し、

「適正も視れたしアリサにも作ってやろうか？」

先に制御訓練だが」

「私には？」

なのは、残念だが

「触れても問題ないなのには適正がない」

ガツクリと首を折るのであった。

まあ、流体操作自体はできてるから遠隔^{エナジー}神術師や遠隔^{マジック}魔術師とかにはなれるかもしれんが、俺には教えれん。

「さて、練習と行こう。」

残念ながらMDは見つかっていない上に左神器の適性がないために……」

流石に神器なんてポンポン残っていない。

「チューンバストだっけ、それを教えてくれるのよね？」

「ああ。触りだけなら風水もできるからな。」

とりあえず風水とはなにか、だ。

風水は世界を構成する流体の遺伝詞を掛詞メッセージを用いて変換し、整調することだ」

コテンと三人揃って首をかしげてる。

おいっ！　さすがには説明しただろうが！

「まあ、見せたほうが早いかな。基本なんてあまり覚えてないんだけどなあ」

「よろしく頼むわ」

結構苦手なんだが……まあ、是非もないか。

風水用の呪符を神形具に貼って、

ワード・アクセス
「詞 変 一万詞階の遺伝詞よ」

そう言って、風を切ることで風の遺伝詞を変化させる。

「ニャー」

「はっ？」

風の遺伝詞でできた緑色の猫が一匹。

「まあ、想定内だな」

「かわいい」

「すごい、変わった毛並みだね」

いや、そこまで処理できるほど風水は得意じゃないから。

のほほん二人が猫とじゃれあっている。

「ええと、生き物を作るの？」

「他にも風を槍の形にして飛ばしたり、人の傷を治したりする。

壊すほうが得意な俺じゃそんな処理できないけどな」

まあ、竜を生むこともできるらしい。

方法は載ってたが五行師の自分には関係ない。

「じゃあ、次バストね」

「ぶっちゃけ、流体に干渉して遺伝詞を破壊するのが主な役割だ。

または適度に破壊して強度を上げるといいう使い方もある」

今度は神形具で緑の猫の尻尾を叩いて五行する。

猫を作り上げていた遺伝詞を破壊し、流体へと還元した。

「あー！」

「酷いよー！」

いや、どうせ数十分もたちや消えるんだから。

「後で消えるか今消えるかの差なのに気にすんなよ」

「はっ?」

「ふえっ?」

「風水の治療は遺伝詞が安定すると元の物質に戻るんだよ。

今回だと風にな。

そうなる前に参考資料として五行しただけだが」

まあ、初見だといろいろ勘違いするよな。

「五行した物質は元に戻らないが、風水した物質は元に戻ることができる。」

ついでに言えば風水五行は自分の操れる詞階までしか操作できない」

「ふうん。で、すずかはどっち?」

ああ、確かに言ってたなかったな。

「私? 私は近接ストライクフオーサー武術師」

「で、俺が五行バスター師」

「えっと、すずかはどっちでもないので神形具持つてるの?」

「私は左神器を使って戦うから専用の武器が必要なんだ」

まあ、右神器は素手で使うものもあるらしいのだが、如何せん資料がない。

「すずかの神器は切断特化だから見せるのも危ないからな。」

制御失敗したら神形具が破損して欠片で大怪我するし」

「と、いうわけで見せることはできないかな」

神器の作用は刀身にしか働かないが、破損した刀身にも影響は出る。

下手に神形具を破損したら後が怖い。

「さて、練習用に刃引きした神形具を渡しておく」

「……触れたら発動するとかないわよね？」

「そんなもの練習用に渡せるか」

そう言いつつ竹刀袋に入っている神形具を渡す。

「……ふたりが使ってる剣よりシンプルね」

抜き出したのは基礎フレームだけの神形具。

「好みがあるのなら好きな武器を作ってもいいぞ」

「薙刀習ってるからそれにしてもらえる？」

「O・K. 一週間以内に完成させておく」

「そういえば、さつき使ってた御札は何？」

「風水五行の支援札だな。」

風水師以外が風水を行うとき、五行師以外が五行を行うときに使う。

もつとも、ある程度の詞階が操れないと起動もしないんだが」

「ふーん。猫ってどのくらいから作れるの？」

「八千から一万位の詞階があれば作れるぞ」

ポリポリとクツキーを食べながら記憶を手繰ってみる。

「一万詞階の遺伝詞よ。聞こえるかしら、私の声が」

ラ、で始まる茜色の遺伝詞を発して猫を形作る。

「ほう」

「わあ」

「すごいすごいー！」

一瞬惚けていたが、ニヤーという声を聞いて意識をはっきりとさせたらしい。

「出来てるっ？」

「上出来だ。」

風水師でいいのか？」

「ええ。壊して殺すなんて、日本人の感性じゃできないわよ」

三人はしばらく茜色の猫と戯れていた。

それを見つつ、ポケットに入れているメモを手に取り悩むのであった。

朝の4時に目を覚まし、平日のトレーニングをこなす。ストレッチ、ジョギング、筋トレ、ラン、ストレッチ、五行と行っている間に、

離れたところで茜色の遺伝詞が走り、鳳が空を駆け抜けた。

「アリサか。今の感じだと八万詞階くらいか」

徐々に制御可能域を増やしている。

そろそろ初心者用では物足りなくなる頃だろう。

幸いにして今日は金曜日。都合はいいはずだ。

強い遺伝詞が飛び交うことが減多に無いため、多少遠くても感知しやすい。

「おはよー」

「おはよう」

「うっす」

バスに乗ってしばらくすれば眠そうなアリサが乗ってきた。

「アル、朝五行してなかった？」

「ああ、五十万詞階くらいだったかな」

「六倍くらいか。ぐぬぬ」

負けず嫌いは相変わらずのようだ。

生活サイクルが変わって不慣れな風水も練習していれば疲れも出るだろう。

「あ、そろそろ練習用以上の神形具とか欲しいんだけど」

「今作ってるところだ。後はこの三日で刀身を仕上げれば、後は組み上げるだけだな」

パーツは完成しているので刀身と組み上げを待つばかりだ。そのせいで授業中によく夢の中にいるが、授業についていけているので問題はあまりないはず。

「あ、刃はつけないで。管理が面倒になるから」
「ああ、分かってる。」

刃をつけてるのはナイフとかの小物くらいだ」
物騒な話だが、風水五行は人殺しの物騒な兵器だ。仕方ない。

「おはよう。 アリサちゃんは眠そうだね」

「ああ、うん。 睡眠時間を一時間早めて二時間早く起きてるからね」
「全く健康によろしくないがな」

知ってるわよ、とボヤクように呟き。

バスが発車した。

「おはようなのは。 今日もいい天気の上に何時にも増して美しいではないか」

「あ、あははは」

面倒事が起こった、とかなり嫌がってる雰囲気だ。
遺伝詞もだいぶ乱れている。

「入口で止まるな」

「俺のなのはに命令するのか、貴様！」

えっと、水無月ワカメだっけ？

髪の毛モツサリしすぎなんだよ。

「とりあえず邪魔だ」

ワカメを軽く押しつけて教室に入る。

作ったスペースでするか？とアリサも入ってきた。

いやはや、返ってきて苦しむのは自分なのに。

「あ、そうそう。 これプレゼント」

アリサに布で包んだ神形具を放り渡す。

「ん？ ……ああ、ありがとう。 当分の間はこれを使えってことね？」

「そういうことだな。 来週には渡せると思う」

「待ってるわ」

珍しく可愛らしかったが、男より漢らしいからイマイチ魅力が……。

「と、いうわけで。」

いろいろな仕事があることを皆さんに知ってもらったわけですが……」

興味もなく外を見る。

空はどこまでも高く、雲は不純物を含まないかのごとく白い。

ああ、なんだか眠くなってきた。

ゴスツつと手刀を頭に叩き込まれて目を覚ます。

「昼ご飯よ。屋上に行くから準備なさい」

「……うつす」

いや、授業を寝てた自身の問題なのはわかる。

が、手加減位してほしかった。

「ふえ、ふあにふおふあふあふあふあ？」

ムシヤムシヤと弁当を食いつつ尋ねる。

ジトリと白い目で見られるが、まあいい。

「んっ。」

用もなく起こしたのか？」

「えっと、昨日の夜何か変なことなかった？」

ふむ、

「あるにはあった。弱々しい掛詞だったな」

「変な夢なら、見たかな」

「ああ、あれ現実だったんだ。夢だと思ってた」

なのはがふってきたのは昨晚の掛詞の遺伝詞のことだった。というか、旧世界じゃないんだから掛詞で送ってくんよ。

「あの夢、何が起きたんだろう?」

「さてな。ただ、」

「ただ?」

言いかけてやめたことを聞いてくるので仕方なく、

「間違いなく面倒事だ」

そう告げた。

苦笑いが二つとため息がひとつだった。

放課後、トレーニングとばかりに走って月村邸に帰る。最近はずりっぱなしでも平気になった。

本邸の自分の部屋に見つからずに入り、最速で宿題を終える。

その後当時だと希少な、現在だと加工出来ない金属を加工して五行する。八十万詞階ほどで拍詞よく、丁寧には、正確に繰り返す。

メールが届いたようだが、今気をそらすと塵になってしまうので放置。

キインキインと鈍色の遺伝詞と自分の翡翠色の遺伝詞がぶつけ、鈍色の遺伝詞を少しずつ鍛えていく。さながら超回復のように少しずつ強くなっていく刀身は、まるで芸術品のようだ、と言う人間もいるだろう。が、その用途は芸術とは程遠い。嘗ては戦争の道具だったこともあり、そういう認識は持てない。自分の中だと風水五行は暴力だという扱いだ。

しばらくして、強度が上がり、うっすらと形が決まってきた。

ここからはより正確に鍛えるので先に野暮用から終わらせようと携帯を手を取った。

メールは、さすがとアリサが拐われたというものだった。そして、アリサと恭也に多少の傷を残したと書かれているが多少の傷なら風水で治せるはずだ。

忍に専属医と二人をつれて土蔵の奥につれてこいと返した。
恭也は応急治療された痕跡があり、大したこともなかったが、ア
リ
サは右目を失っていた。

術後経過の観察も兼ねて医者とアリサには月村邸に泊まってもらった。見たこともない義眼に戸惑っていたが、腕は確かのように傷の治療は早かった。

なのほも心配そうにしていたが、何やら面倒事に巻き込まれたらしく忙しそうだ。

アリサには睡眠薬と鎮痛剤を処方しているらしい。目を貫かれる瞬間がフラッシュバックして恐怖と幻痛が襲うのだとか。

それよりは、『視覚情報』が増えたことのほうが辛い気もする。

今までよりも、見えるものが多くなったのだから、その制御もしなくてはならない。

だが

「まあ、苦しむのは俺じゃないし」

遺伝詞の感応量も増えるから実力は上がるだろう。

遺伝詞を肌で感じるのではなく、目で見れるということはそれだけでアドバンテージになる。

制御に慣れれば一足飛びに高い詞階の遺伝詞を操れるようになるだろう。

それこそ、数百万の詞階を。

手袋をはめた手で、アリサのために作った神形具を握る。

一応内燃詞クロリスで遺伝詞を抑えて手に取る。素手は怖いので手袋をつけて。

朝早く、4時に庭に立つ。少し深呼吸して、

ア、から始まる翠色の遺伝詞を五行する。

限界値の百七十万詞階の五行も問題なく行使できた。

「完成、か。とはいえ」

肝心の使い手が未だに復帰していない。

倉庫の肥やしだな。

そう思ったし、実際に口にした。

時計を見れば6時だった。朝食にでも向かおうか。

「おはよう」

「おはよう……うつつ」

「おはよ。家主としては朝一で風水五行しないしてくれるとうれしいな」

「Guten Morgen

時間は以後気をつけま、す。

アリサ、起きてきて平気なのか？」

リビングには昨日までベッドで固定されていたアリサの姿もあった。

顔色は悪く、正直まだ復帰というわけではなさそうだ。

「アンタがくれた目、見えるものが多すぎて気分が悪いのよ」

ああ、『名前』も言っていなかったし、そこまでだと想像もしてなかったか。

まずは、だ。

「とりあえず食べよう。冷えるともったいない」

「そうね。運んでちょうだい」

ノエルとファリンが朝食を運んでくる。

女性陣用の軽い食事と自分用の重めの食事。

自分の朝食を見て、アリサが驚愕する。

「そんなにガッツリ朝から食べるわけ？」

「ん？ ああ。流石に健康的にバターは塗らないけどな」

そう言っつて、黒パンにハムと野菜、チーズをのせて周りを気にせず食べていく。

「……チーズ貰っていい？」

「どうぞ」

クワルクだが、いいのだろうか？

プロセスチーズと異なったために変なりアクションをしているが放置で。

パンを食べ切り、黄身だけ半熟のゆで卵を食べ、コーヒーを楽しむ。「さて、色々することがあるから取りあえずは俺とアリサが休みだな。

忍も暇なら残っていてくれると助かる」

プクつと頬を膨らませたすずかにまあまあ、と忍が宥め。

「すずかじゃなくて私ってことは強臓式機械アインゲヴアイデの説明よね」

「そうなるな。」

ただ、忍と違って使ったのが本人の肉体じゃないからオーバーベヴアイセン発動は多分できないだろうが……」

「私抜きで話に納得するのやめてよね」

見せたほうが早いというか、体験してもらったほうがいいと言うべきか。

ひとまず見せることから始めるか。

「じゃあ、すずかを見送ってから訓練を始めるか」

ポコポコと背中を殴られているが放置で。

放置で！

朝食を終え、すすかを見送り、念のためにと恭也まで来た。バカツプルいい加減にしろ。

さて、

「まずは右目の義眼の名前からだな」

「そんな大層な代物なわけ？」

大層な代物ですことよ。

「名前は救世者^{メサイヤ}。」

旧世界において機甲都市^{バンツァーポリス}、当時の伯林を救った人物の遺産だ」

「はあ」

「救世者の仮発動^{ベヴァイゼン}は別の強臓式機械の操作。

仮発動は全ての遺伝詞の視覚化という、ぶっちゃけチートなものだ」

「そもそも強臓式機械つてのがよくわからないんだけど」

「簡単に言えば、人間の素材をベースに機械化したものだな。

素材は形あるものから形のないものまでいろいろだ」

忍は刀身のない剣のようなものを見せて、

「私の運^{ゲレーゲンハイト}命はすすかの吸血鬼の全てと私の吸血衝動を素材にしてるわ」

つまり、すすかは「今」吸血鬼ではないということを告げた。

「ああ、あの時のセリフはそういう」

何やら誘拐時にそんなことがあったらしい。

「私の運命の仮発動は運命を切り裂くこと。

仮発動はすすかに吸血鬼のすべてを返し、私の吸血衝動を解放すること。」

と、まあ——できるだけ仮発動は使いたくないのよ」

それに対し恭也は腰に差した直刀を抜き、

「俺の革^{レヴォルツィオン}命は奥歯を素材にしている。」

仮発動は作用力場を自由に変動させることができる。」

仮発動は刀身に写したものの判断だ」

マルシユの手記を元に現代で再現したものが、オーバースペース
と言っても過言でもない。

あくまで、現代において、と頭につくが。

「へえ。どうやって発動させるの？」

「……言実化エアクレーレンと呼ばれる事象を起こせばいい。

使用者が己の意志を強く持ったとき、機械は反応、周囲空間に対し
て流体を放出すると同時、己と使用者の意志を剥き出しにした
言実詞エアクレーリングを放って遺伝詞変化を起こさせ、周囲空間を書き換えてしま
う。

つまり、”事実”を人の意志と機械が文字的に書き換えてしまう、
という現象だ。

わかったか？ わからんだろうなあ」

「ぐぬぬっ」

鞆に収めた小太刀で頭を叩かれ、勝ち誇った顔を止められた。

「つまり——強く願ひ、意思を発した際に起動するという認識でいい。
こちらのほうが直感で動かす連中にはわかりやすいだろう。恭也
氏もそうだった」

もう一発叩かれた。余計な事を言うな、か。口で言え口で。

「コホン。まあ、運命と革命は手記を元に再現した物のため使いにく
い。

当時の画期的な燃料は現代に残っていないため別のアプローチが
必要だった。

そのため、使用者の余剰生命力——旧世界では排気、賢石と呼ばれ
るものを消費する。

但し、救世者は大気中の流体を回収して起動する」

「ええと？」

「その目は俺が再現したものではない、ということだ」
オリジナルの強臓式機械だと言っているだろうに。

「まあ、かなり便利だぞ。慣れればな」

さて、と言って苦無を取り出す。

「強臓式機械の説明は終わったので、実演と行こうか」

「了解。久々だけど頑張りますか」

ノーモーションで額、心臓、首を狙う。

『運命は死を選ばない』

まっすぐ飛んでいた苦無が突然はじかれたように違う場所を飛んでいった。

「よしよし、腕はなまってないわね」

「と、まあ。運命の切り裂くとはこういうことだ。

死ぬ運命を覆した、と言えるだろう」

呆然としているな。

一般人だと思ってた人物が実は裏社会に浸っていたと知ったらこんなもんか。

「救世者なら『救世者は傷つかない』とか、『救世者を——は阻めない』とかで似たようなことはできる。

これが言実化という機能だ」

「——余計に頭がこんがらがってきた。

つまり、状況に応じて強い意志で何かを望めばいいのね?」

そういうことだ、と言ってコーヒを飲む。ミルク入り砂糖なしで。

ティータイムということで、三人は紅茶を飲む。

「そういえば、駕発動ってどうやるの?」

「知らん」

「え?」

いや、さっきも言っただろうに。

はあ、とため息をついてから

「本来なら自分のパーツを部品にして作るから自分の中の詞をテキスト言えばいいんだが」

「いいんだけど?」

「その義眼はマルシユの右目を材料に作られているため、独逸因子を

読んだものしか知らん」

首をかしげて、何言ってるんだコイツみたいな顔をしている。

もっと分かり易く言ったほうがいいか。

「救世者の駕発動の言葉はヘイゼル・ミリルドルフと製作者のマルシュしか知らない。」

どうしても知りたかったら僅かに刻まれてる俺の魂の遺伝詞を読むしかないな」

「なんであんたの魂の遺伝詞を読むのよ」

なぜって、

「俺はCITY時代の記憶がうっすらと残ってるからな。」

記憶として思い出せなくとも、残ってる情報を読み解けば答えは見つかるだろうさ」

カチャリ、とカップをソーサーに置いて

「但し、ライブセッション遺伝詞交換……いわゆる情事をして互の遺伝詞をぶつける必要がある。」

今は妊娠しないからどうでもいいかもしれないが、あまり推奨しないけどな。

ぶっちゃけ、相手の不要な記憶まで見ることがある。辛いぞ」

俺の過去の記憶は凄惨なもので、前世の記憶は戦争をしていた。

「まあ、見ないほうがいいってのもあるが……自分の方も見られるんだぞ」

「——ああ、それはちよっと」

ようやく危険性に気づいたらしい。

「じゃあ、ちよっと遺伝詞がよく見える目という認識でいいわけ？」

そうだ、と答えてクツキーをつまむ。

「さて、プレゼントというか、必要なものだ。持っつけ」

そう言っつて、ケースを放り渡す。

開けて、

「サングラス？」

「アイパッチでもいいんだが、小学生はそういうの特に気にするからな。」

事故で羞明になった、って教師には言っておけばいいさ。

目の色が写りにくい緑だが、茶色の方が良かったか？」

「どっちでもいいかな。」

って、緑色のレンズのくせに見える色は普通なんだ」

私が考案したのよ！ と忍が胸を張る。

まあ、カラコンかサングラスが必要だとは言ってたが、準備が早すぎるだろ。

「影が見えにくくなってから其の辺は遺伝詞を見て生活しろ。」

後は、うん。慣れろ」

「大雑把ね。取り敢えず、家に帰って親に心配かけたことを謝ってくるわ」

「じゃ、玄関で待ってろ。神形具を持ってくる」

「急ぎなさいよ。私も車呼ばないと」

今朝はついていない。運命の女神に見放されたのだろう。

「なぜ貴様がここにいる、モブ野郎」

何故なら、そこにいるのは朝一から見たくないやつだった。

「アリサの体調監視と暇つぶしだよ。」

後は、居候の身では家主の妹には勝てなかったと言っておこう」

「フン、情けない男だ。」

まあいい。彼女らの面倒は俺が見ているから帰っていいぞ」

なんだろうこのワカメ。干してやろうか？

「アル、さっさと来なさい。試合が始まるわよ」

「んなつ!？」

「じゃ、呼ばれてるんでさっさと行くわ。気に入らないならお前が帰れよ」

コイツと出くわすなら家から一步も出る気はなかったというのに。

グダグダとサッカーの試合を眺め、途中なのはとフェレットの意思疎通を感じたり、何か知ってますと言わんばかりのワカメのしたり顔を女性陣全員がドン引きしたりと、まあ色々あった。取り敢えず、情報過多でグロッキーになってたアリサはかわいそうだった。

しかも原因が横柄に心配していたから救いようがない。

あーあ、酷い一日だった。そんな遺伝詞がアリサから飛んできた。

いやまあ、酷い一日なのは間違いないが。

眠たいから、と言ってたのはがフェレットを連れて席を立ち、その後ワカメも席を立った。

ワカメはなのは好きすぎるだろ。一周回ってキモいわ。

三人で気ままにお茶会を楽しんでいたところで、

「アリサ、あのナイフ持ってるか？」

「え？」一応持つてるけど?」

あれ以降護身用として肌身離さず持っているんだとか。

まあ、固まった遺伝詞をこじ開けることはまだできないだろうけど。

風水用に音壊爆弾デイスコードでも開発したほうがいいのだろうか？

それはともかく、神形具を持たせたのは理由がある。大雑把に言っ
て戦闘ないし、事後処理だ。

「すずか、なのはを呼び出せ。なんなら今からおしかけて
ブライダルエクスプレス
214+Kのブーケ体当たりしてもいい」

「よくわからないけど起こせばいいんだよね？」

流石に前衛二人、中衛一人で事件に突入したくない。

事後処理のために忍にメールを送る。

持ってきていた縦長の袋から神形具を取り出す。

恭也は大学図書館で今日はレポートとボヤいてたから放置。とい
うか、これ以上前衛はいらない。

「取り敢えず、嫌な遺伝詞を感じたからそのビルの屋上に行くぞ」

——すずか・体術技能ジムナテック・発動テイク・壁走り・成功ヒット

技能を発動して壁走りをするすずかに対し、中の階段を登って屋上
へ向かう自分たちは少し遅い。

やっぱり技能ってずるい。補助効果高すぎるだろ。

屋上にたどり着いたとき、街は既に樹林で破壊されていた。

「あちゃー、手遅れだったか」

「なんとかできないの？」

手段はある。

「手はあるが、原因を取り除かないと無理だ。

だから関わってそうなフェレットもどきとなのはに連絡させたん
だが……」

さて、どうしたものか。

「何をしている。危険だからとく去るがいい」

空を飛ぶ金髪ワカメ。うん、キシヨイ。

「自衛はできるからお構いなく。」

後、街を修理する人員がいるだろ？」

舐るような視線をぶつけてこられた。ウザイ。

自分の利益しか考えてないクズの目だ。

「貴様が？　はっ、冗談もほどほどにしておけよ？」

そっちの二人もだ。危険だと分かかって何故態々関わる」

「一応、血腥い事は慣れてるし……」

「今更って話よね〜」

あ、ワカメが意味がわからなくて固まった。

そうこういつてる間に原因の位置を特定できた。

遺伝詞が大量に発生しているからほぼ間違いないだろう。

「アリサ、11時の距離20kmで高さ+10mに高さ-1mでマーキング」

「了解。すずか、アンポンタンへ近くにマーキングするって伝えなさい。」

詞変、十万詞階の遺伝詞よ！」

ラ、から始まる茜色の遺伝詞が拍詞を刻み、駆け抜ける石英の槍となる。

「なっ!?　こんな力、原作にはなかったぞ!」

そんな事を言っている間に電話していたなのはがピンク色のごんぶとビームを放って街を破壊して拡大を続けていた木を取り除いた。

「じゃあ、アリサ。俺が仮発動するからその後風水しろ」

「……あんたも強臓式機械を持ってたわけ?」

「まあ、一応な。俺のは仮発動しかできない半端なものだが」

ふう、と息を吐き。詞を発生させ、仮発動を利用して救世者の駕発動を促す。

『新世界は、救世者の真実を求める』

『救世者は真実を映す』

「ああ、駕発動ってこういうものなんだ。確かに全部見えてるわ」

彼女の目には、壊れた街の遺伝詞、壊れる前の街の遺伝詞その両方

が写っているはずだ。

「じゃ、直しますか」

ラ、から始まる、賑やかなアップテンポのリズムを取り、街を風水する。

街から様々な色の大量の鳥が羽ばたいた。風水治療はなにか別のものを経由して治す。

今回は鳥だった、というだけだ。

軽く二百万詞階以上の遺伝詞を操っていることに気がついているのだろうか？

鳥が羽ばたき、幻想的な風景を見ていて、やがて鳥たちが元の場所へと帰っていくだろう。

街は壊れる前の状態に、水色の結晶は四つ隣の高層ビルのなのは手に収まる。

「おつかれさん。じゃあ、翠屋で一服しようぜ」

「おっさんか！」

「なのはちゃんにお説教もしないといけないしね」

「DSか!？」

「待て、そのモブ」

モ^Mービル^O地域^B空港？

「貴様だ、クソ男！」

「貴様も転生者だったのか!!」

「は？ 転生者ってなんだよ？」

「んなっ」

驚愕してるし。知ってて当然とか思ってるとか頭悪いんじゃない……

「アルに比べれば殆どの人間は頭悪いんだからそんなリアクションはひどいと思うよ」

あれ？ テキスト 詞漏れてた？

おつかしいな、内燃詞にしてたつもりだったんだが……。

「さておき、俺は旧世界の記憶と旧世界の手記をたまたま手に入れた元一般人だ。」

前世では……そうだな、国に対するレジスタンスだった」

「神族だったくせに」

「重要なところで茶々を入れるな」

（神様転生じゃないだと、ふぎけるなよ、ただのモブのくせに……ここ
で殺すか？）

物騒な遺伝詞だ。五行して風水してやろうか？

「……ふう、駕発動も終了したわね。お茶会の続きでもしましょうか」
私出番がなかったとか、見えすぎると辛いだとか、久々に他の強臓
式機械に干渉したなとか、どうでもいいようなことを話しつつ、階段
を降りようとする。

「アルフレート！ これ以上彼女たちに関わるな！

お前の存在はこの世界に対する冒涇だ！ 故に今すぐ関わりを断
て！」

「……はあ」

「君たちもだ、そんな危険な力早く捨てるんだ！」

「何あいつ、何様のつもり？」

「クズだクズだとは思ってたけど、ここまでクズだとは思わなかった
かな」

この場にいる全員から白い目を向けられ、さらに苛立ちが加速す
る。

大体、望むものに力を与え、制御法を教えただけだというのに。

「どうせニコポナデポとか貰ったんだろ、このクズ野郎！」

いや、なんだよそれ。

「俺は転生者とやらではない。二度は言わない、忘れるな」

「——死ぬ、王の財宝！」
ゲイトオブパピロン

数頼りの攻撃か。密度も薄いし、何より飛んでくる物が弱い。

とはいえ、全てを五行するには時間が足りない。

「ア」

怒りを示す緋い激しい遺伝詞を放ち、全ての飛来物を大気を五行し
て吹き飛ばす。

「そんな、英雄王の力だぞ！ 神様からもらったんだぞ!？」

こんなクソモブごときに負けるわけないだろ!!」

「へえ、誰かのコピーかよ。 使えねえな」

『新世界は偽物を認めない』

「自分の力で戦えよ男の子、それでも玉ア付いてんのか!」

「天の鎖……なっ!? 英雄王の力が!」

言実化だけでこのざまか。対処することもできず、力も奪われる。他人の模倣なんてニセモノ、対策すればあつという間だ。

「アアアアアア!!」

刀身が体を捉え、不規則に揺らいだ遺伝詞を五行する。

手に持っていた剣は、砕いた。

メツキが剥がれ、鎧も失い、剣は断たれた。

「う、ああ、死に、——死にたくない! 血が、血がア、俺の血が」

「……心底クズだったな。見る影もない、とは言いすぎか。

まあ、見れるものがあるかどうかはこのあと判明するわけだが……
アリサ」

ハア、と溜息を互いにつき、背骨が衝撃で折れたロクデナシを見る。

「治せばいいんでしょ、治せば。どこまで治すの?」

「た、助けてくれるのか!」

ああ、頼む! 痛いんだ、血が出てるんだ……速くハヤク!」

「全部の遺伝詞を風水したらいいさ。

それでこいつを見るたびに感じていた遺伝詞の異常も治る」

それもそうか、と呟き神形具を構える。

落ち着いて、落ち着いてつと口に出し、自分の体からオレンジ色の怯えの遺伝詞を小鳥として取り除いてから

「百九十万の詞階の遺伝詞よ、生命を示す脈動の遺伝詞よ、聞こえるかしら、私の声が!」

ラ、から始まる遺伝詞を掛詞としてぶつけ、脈動のリズムに合わせて音を取り、掬い上げたワカメのライブを風水してそのまま刃を背中に刺す。

手応えを感じてか、よし、と声に出し、遺伝詞の同調が始まると刃

を抜き、少し離れる。

自慢げに襲いかかってきた金髪灼眼の少年は、遺伝詞が安定すると見る影もない恰幅の良すぎる三十路過ぎの顔をして、運動不足だと暗に告げる体型の、黒髪の男に変わっていた。

「うわっ、こんなのに言い寄られてたんだ……なのはには同情する」
「そうだね、流石にちよつと……。とはいえ、黙っていたことは怒るけど」

「いや、ナイワー。」

電詞都市DTで違法機械化したのかと思ってたが、これは酷いな」
警察に不審者に襲われて気絶させた、念の為に病院に向かうと連絡をしてその場を離れる。

「なのは」

「なのはちゃん」

「高町？」

「にゃ？」

「正座」

「えっと、せめて店内で……」

仕方がないので店内に入る。

「ダージリンとシュークリーム」

「アールグレイとシュークリーム」

「ブルーマウンテンとザツハトルテ」

「はい、少々お待ちください」

なのはの姉の美由希さんが注文を取り、なのはが正座させられていることに困惑しているが、それはそれこれはこれ。隠していて余計に面倒事が起こったのだからキレてもいいはずだ。

「えっと、本日はお世話になりました」

「大丈夫、許さないから」

えっ、と言ったのはとフェレットが驚愕した。

「まあ、まずはそのフェレットは情報量が明らかに人間だよな。獣人かな？」

それはそれとして、何があつたか説明してもらおうか。取り敢えず、注文が届いてから」

「それまでは、なのはちゃんにお説教ね」

俺の後にすずかがなのはにもジャブを振っていく。

二人？はお手柔らかに、と言うが、それはアリサとすずかの機嫌次第だ。

「うう、すずかちゃん——そろそろ」

「ダメ」

すずかの笑顔が眩しい。昏く輝いてる。

今すぐ麻婆豆腐を食いそうな神父の気配を漂わせている。

「ボクからも」

「面白くないからダメだろ」

フェレット——ユーノというらしい——の願いを却下する。

悪い笑みを浮かべた二人がヒーヒー言ってるのはとユーノで遊んでいる。

楽しいわ楽しいわ楽しいわ、という幻聴まで聞こえてきた。

「ただいま。美由希、代わるから家事頼む」

「はい。ついでにあのサバトもどうにかしておいてね？」

「で、あんな白のフリフリなドレス着て魔法少女やってると。端的かつ簡潔について頭沸いてるんじゃないかね？」

「ひ、酷い……っあ、あ、アリサちゃんそこはあつ」

ニマニマと悪い笑みを浮かべながらアリサとすずかが正座で痺れの切れた足をつついていっている。

俺はユーノを片手で押さえつけている。

「そこがどうしたの、なのは？」

ただ太ももをつついてるだけじゃない」

「そうだよ、なのはちゃん。」

ちよーつと魔法を使った反動が出てないか触診してるだけだから」
「なんで足ばっかりなのー?!？」

ひゃあああああああああ

ビクンビクンと震えている。膝の上には作った石を載せてるしガチだ。

「で、あんなことも起こせる問題のある物体を探して封印してると。

こんな石がねえ……。まるで精霊石結晶だな」

「精霊石？」

ふむ、そういえばカップルにしか説明してなかったな。

「この世のあらゆるモノに関わる流体、と呼ばれる物質が結晶化したものだ。

高純度の超エネルギーを持つ石で、大気中の流体と反応するととてもいい動力源として使われていた。

それを起動源にし、三つ積んで最適化し終えればスペースシャトルの代用品になるそうだし」

「スペースシャトル？」

「宇宙に行くための機体だよ」

次元航空艦みたいなものか、と言われてもよくわからん。

わざわざ別の次元に行く理由なんてあるのだろうか？

世界を管理する、という連中も気に入らない。

「恭也、コーヒーおかわり」

「目上の人間には敬意を払え」

とかいいつつ準備を始める。働き者だな。

「しかし、事故、ねえ。こんな危険物を運ぶというのに事故はねえだろ事故は」

「それって……」

「ぶっちゃけ故意だろ。願いを叶える、ってんなら狙ってくる連中もいるだろうさ。」

世界を統治して管理するって言いながらやることは雑すぎるしな。

それに、犯罪者の扱的に多分裏もあるぜ」

裏もある、という一言に食いついた。

「裏つてことは、——ああ、そういう」

「あくどいね」

二人はまだ分かっていないようだ。

「どういう、ことですか？」

「やれやれ、と思いつつ政治や情報管理に携わってないとこんなものかとも思う。」

「まず、なにか犯罪を意図的に起こしやすくする。」

で、そこそこ高位の人間が関わったところで事件を解決して、改心する気のある人間を更生プログラムをこなさせたあと局員や関係者として働かせるんだろ？

つまり、人員を確保するためにある程度事件を起こしやすい環境にしてるわけだ。

はつきり言ってくソだろ。嫌いだぞ、そういうの」

「そ、そんなことはないはずです」

「まあ、一部の人間はやってるだろ。」

楽に人員を確保できるし(管理局にいいところだつて思わせるマツチポンプになるし)」

なのはは驚いた顔をしているが、すずかとアリサはまあそんなもんよねとか呟いてる。

「まあ、街の被害が出る前には処理してやるよ。迷惑になると面倒だ

しな」

「そうだね。私はともかくアルかアリサちゃんなら純エネルギー結晶でも大丈夫だろうし」

「え、三人とも魔法が使えるんですか？」

「「ちがうけど？」」

「へっ？」

「はい？」

「私は近接武術師」

「俺五行師」

「私風水師」

「どうぞ、おかわりです。」

ああ、俺は全方位武術師だ。ストライクマスター ついでに、そろそろ正座は勘弁してやれ」

石が消えたら、とだけ言われてハア、とため息をつく。

「ええと、ここにいる全員真つ当な一般人じゃなかったの？」

「そうだな。因みに忍は近接義体師だ。スチールフォース」

左腕が義体なんだよ。とはいえ、素材が素材だからかなり相手し辛いけど」

自分の分のコーヒーを飲みつつ会話に加わる。

「お兄ちゃん、お仕事は？」

「手空きだから休憩だ。で、何がどうなってるんだ？」

ふむ、

「簡潔にわかり易くいこう。脳筋だものね？」

「余計なお世話だ。大学生だから理解力もある方だぞ」

では、という一言で初めて

「数日前、こっちの三人がフェレットを見つけた日を覚えているか？」

「ああ、ちょうどその日はなのはが夜遅くにこっそりと家を出ていたな」

ならば話が早い。

ニヤリ、と笑いつつ

「その日、このフェレットを助けたついでになのはが魔法少女になっ

た」

「……テレビの見過ぎか？」

ありがたい、ほぼ一般人ならそういうと思った。

「まあ、大して強くもないがな。」

マギノガンナー
遠隔魔術師にしては機動力もないし、連射性もない。

ぶつちやけ、空を飛べなかつたらすすかにも負けるくらいの雑魚だ」

「ひ、酷い……ひああつ！ アリサちゃんつかないで！」

アリサが楽しそうだなによりだ。

あと、優しめに言ったからあれだが、今ならアリサよりなのはの方が弱い。

攻撃が全部カウンターとして飛んでくるから洒落になつてない。

「それでまあ、ジュエルシードなるこんなエネルギー結晶を集めてるらしいんだ。」

こいつは思念に反応し、歪んだ願いを叶える粗悪品でだな、今日の街を破壊した原因もこれだ」

封印されたそれを手に取り、観察している。

「ナンバーが見えるな。いくつあるんだ？」

「二十一個です」

「……フェレットにはおかしいと思つてたが、喋れたのか」

「ええ、一応」

ふむふむ、と言いながら裏返したり、硬さを確かめたりしている。

「一個のエネルギーは運命を全力起動するのと同じくらいか。」

大した量だな。言い換えれば忍の保有排気量がおかしいんだが」

「お姉ちゃん、万全なら全力の運命の仮発動5回はいけるつて言つてたし……」

恭弥がここにいる誰もが忍に勝てないからなあと呟いた。

なのはとユーノが驚愕した。

「えっ」

「ああ。恭也と模擬戦して八勝二敗というチートだからな」

「仮発動する前に間合いを詰められるから身体スペックでの勝負にな

るんだよなあ」

「いや、あのチートに二勝もぎ取ってる時点でやばいだろ」

「俺、一応忍の護衛の仕事も請け負ってるんだぞ?」

「ゲリラ有りなら恭也の方が強いから大丈夫」

お兄ちゃんと忍さんのイメージが言いつつ石が辛くて涙してる
なののがいた。

そうだよな、剣術の基礎を教えたらあつという間に強くなったもんな。

「まあ、うん。そのうち黒幕の手下が拾いに来るだろ。」

「ある程度戦いの基礎を叩き込むか、恭也が」

「俺かよ」

いや、だつてなあ。

俺やすずかは五行や神器、技能ありでの体捌きだし、アリサに至っては薙刀術と古武道だ。

「棒術は流石に知らん。剣や銃、強臓式機械ならともかく、ほかの武器は専門外だ」

「薙刀なら習ってるけど、なのはのは杖だし……」

「……はあ、引退した父さんに頼むとする。流石に棒術は詳しくない」

ああ、そういえば結構すごいよな。シックスパックとか、二の腕とか。

「え? お父さん?」

「気づいてなかったのか?」

体幹が一切ぶれてないし頭の位置がずれないからかなり鍛えてるぞ

「怪我が原因で師範を俺に譲っただけだからな」

ほへえって顔をしている。

「死んだな」

「死んだわね」

「苦しいだろうなあ」

首をかしげているが、知ったことではない。

「じゃあ、フェレットに魔法を習って親父さんに棒術を習っておけ」

「はい」

まさかあんなことになるとは、この時のなのはは想像もしていなかった」

「物騒なセリフは禁止なの!!」

「さて、忍が得意とする一番やばい技術を見せてやろう。

デウフェイス
薙刀デウフェイスを使うなり風水を使うなり好きにするがいい」

「舐めてない？ これでも武術は5歳からやってるのよっ」

「ここにはなのはもすずかも恭也もいる。

まあ、できるだけ手を抜いてやろう。

「なのは、よく見ておけよ。俺が忍に負け続けてる理由がわかるから」

「はい」

始め、という合図とともに、相手の呼吸を読み、歩法を使う。

吸って、吐いた。そこを突く。

ゆらり、と近づいて、構えた薙刀を持つ左腕を掴んで足を払い、丁

寧に投げて受身まで面倒を見てから拳を寸止めする。

「そこまで。予想通り過ぎて何も言えん」

「はっ？」

「えっ、なんでアリサちゃん攻撃しなかったの？」

「まあ、そうなるよね」

呆然としているアリサが起き上がるのを手助けし、

「まっ、是非もないよネー！」

と軽く告げる。

はつきり言って極めたらチート級だからな。

「わたし、どうなったの？」

「構えたまま近づかれて投げられてたんだけど……」

困惑するアリサに、なのはが答えた。

「じゃあ、アルは？」

「えっと、歩いて近づいてそのまま投げたあと拳を顔の前で止めてた」

はっはっは、忍の方がもっとうまいけどな。

皆が集まっているところ悪いが、四歩後ろに下がる。一瞬だけだが

気配が漏れた。死んだな。

「というか、アリサちゃんの視点ではどうなったの？」

「えっと、始まったと思ったら姿がぼやけてほぼ動いてないまま投げ

られてたつて感じだけど」

「どうなつてたか？」

そんな事を言っていたら恭也が吹き飛んだ。

「グッフ」

「ダーリン！　せつかくウチに来たのに私に会いにこないってどういうこと!？」

「また吹っ飛んだな」

「どっから湧いたの？」

俺以外の全員が不意打ちに気付かなかつた。

直進ルートを譲つて大正解である。不意打ちもあつて恭也は大ダメージだ。

0 ; of 85z2@ 85i タノシイタノシイ、クルシムスガ
タハタノシイ！

おっと、電波が。

「ぶっちゃけ、忍が本気出せば恭也は首が飛んでた」

まあ、恋人の首を飛ばすことはないと思われるが。

「強すぎでしょ。これで強臓式機械もあるとかチートじゃない」

「旧世界だともっと強い人とかいたからな」

特に大障壁時代以前はもっとやばかつたとか。

特に歴史は残つてないが、色々はつちやけてたとかなんとか。

「まあ、うん。体術を極めるとあんなことになるっていう証明だから」

「アルとお姉ちゃんしか習得できてないけどね」

恭也は脳震盪で動きが取れていない。

あ、気絶したまま持ち帰られた。

「あーあ。」

えっと、寝室から遠いところでお茶することって出来ますか？」

「あ、はい。——お庭の方が良かったりしますか？」

「是非」

顔を赤くしたはずかとアリサがやれやれと言わんばかりの顔をして、なのはが首をかしげた。

「いやあ、勝利の味は素晴らしいなあ！

恭也も死んだし！ テクノブレイクすればいい！」

「で、あの時なにしたのよ」

ふざけた発言を無視してアリサが尋ねてきた。

何って、

「歩法、と呼ばれる技術だ。

相手の意識を読み、意識の死角に入る、という技術だが？」

「……意識の死角って」

「にや？」

分かっているとおバカさんはさておき

「そう難しいものでもない。

慣れれば、とはつくが……例えばだ」

フルーツナイフを取り、上空に投げた。

全員の視線がそこに集まる。

落下する前に左手で角砂糖をなのはに投げた。

フルーツナイフを人差し指と中指で取る。

「ふにや!？」

額に当たった角砂糖がなのはの紅茶に入って見本は終わる。

「と、いうように意識を誘導すればいい。

今のだと全員がナイフに気を取られて何をしたのかわからなかっただろ？」

意識を読むのが難しいのなら誘導してしまえばいい、ということだ。

「忍と同じ技を使う、なんでも使っている、と言ったから警戒したな？」

「ああ、そういうこと。ミスディレクションってやつね」

意識誘導、視線誘導とも言う。

マジックなどで用いられる簡単な手品だ。何度も同じことをすればバレるが、一度ならバレないということだ。

「でも、忍さんは何度も成功させてるんでしょ？」

「ああ、彼女はミスデイレクションなんてしないからな」

一発でキレイに決めればいい、というわけだ。

自分では六割程度しか成功しない。まだまだだ。

「取り敢えず一息つこうぜ」

ふう、と一息。全員が気を抜いて茶を飲み、クツキーを頬張った。

「さて、一息ついたところで仕事と行こう」

「「ゴホツゴホツ」」

最近お気に入りのセリフだ。ちよつと言ってみたかった。

アンゼ ■ ット様は優しくて仕事熱心な上司です。但し下がる男相手は除く。

「速っ!?!」

「ふえっ!?! ジュエルシード!?!」

相変わらず感知が下手だなあ。

アリサなんてリアクションしながらしまったた神形具をもう抜いてるのに。

「さつきから神形具を仕舞わないと思つたら……」

いや、なんか怪しい人の気配がしてるし。

「神形具は?」

「大丈夫。予備の神形具も持つてる」

ジュエルシードがあるという場所に近づいたらフレットが結界なるものを展開した。

「うわっ、気色悪っ」

「そういうものだど認識してください……来ます!」

無駄にでかい——えつと化け猫?

「巨大な子猫?」

「すずか、それ矛盾してるから」

尻尾は一本か。ここで飼ってる猫の一匹だろうか?

なんだろう、アマガミ(瀕死)とかじゃれつく(威力90)とかそんな言葉が脳内によぎる。

「猫パーンチ! 相手は死ぬ!」

「少しは真面目にしなさいよ！」

尻尾が木に当たり、倒れてきて避ける方向を潰される。

それをすずかが草薙で輪切りにし、道を作る。

当たれば圧死確定の二発目となる猫パンチを避けて前足を神形具で叩く。

足を叩いた軽い音を増幅し、遺伝詞をかき乱す。

「詞変、二十万の遺伝詞よ！」

ラ、から始まる遺伝詞を刻み猫に突き刺して、猫とエネルギーの結合を除き、元通りにする。

そのショックで猫は気絶した。

「よしよし、ぎつとこんなもんよ」

「はいはい、油断しない」

そう言つて襟首をつかみ、二メートルほど下がる。

立っていた場所には電気が飛んできた。

「ん〜？ ニコラさん？」

「ドマイナーな呼び方すんな。テスラでいいでしょうに」

金髪で前衛的な衣装を着た——ええと、どちら様？

「えっと、誰かあのフェチズムの塊と知り合いの人」

「つて、こつちに攻撃してくるわよ!!」

電撃かあ。

「砕くんで、反撃ヨロシク。なのはは封印な」

地面を叩き、空間を五行して雷撃を遺伝詞に分解する。

それを拾い上げてアリサが風の槍を撃ち返すとともに、すずかが草薙をソニックブームとして打ち出す。

「バルディッシュユ」

「Sonic move」

攻撃を無効化する俺でもなく、逃げ道を断つすずかでもなく、攻撃の疾いアリサを潰しに来たか。

だが、

「ハアッ！」

それは悪手だぞ？

アリサは既に、言実化を習得しているのだから。

『救世者は傷つかない』

紙一重で見切り、高速の鎌を躲して

「なっ」

驚愕しているところに、ラから始まる遺伝詞をぶつけ、向こうの鎌をガラスに変える。

握り締めた結果、逆に手が傷ついた。

「さて、なのはの方も終わったみたいだし——ここで退くなら見逃すけど?」

武器も失い、仕方がないからといったふうに渋々飛んでいった。

アリサナイス。

「あー、危ね。もうちよつとで殺すところだった」

手袋をしたまま担いだ神形具を下ろし、溜息をつく。

判断が遅かったら、碎いた雷撃ごと片腕を五行するところだった。

「あの、彼女は高位の魔導師だと思われるんですが……」

「は? 恭也の方がまだ強いぞ?」

「えっ」

だって神速使いながら強臓式機械使ってくるし。

「ごめんね、私が手間取ったから」

「全くだ。反省して」

そこは大したことはない、って言ってくれるところじゃないのって顔してる。

周りからもそんな気配が漂ってる。

「これで手を貸したの二度目だぞ?」

「うっ、はい」

なのははシユンとした。

ふむ、まあいい。

頭を下げてるのを見て、無音でシャッターを切り気づかれないようにそのまま立ち去る。

(うわっ、えげつない)

(ど、どうしようか)

「えっ、ええー！ 放置するのぉー!?」

何やら超能力的なサムシングで以心伝心な感じらしい。

「いや、放置はしてないぞ」

「へっ?」

ピロリロリーン

「ああ、メール送ってたんだ」

「電波のいいところに移動したと」

「ちよっと、なんで写真なんて送ってるの!?!」

ふむ、と言いつつ。

「安心して欲しい」

「な、何についてかな?」

優しい声で告げたのに恐怖している声で帰ってくる。解せぬ。

「送ったのはこの屋敷にいるメンバーだけだ」

「お兄ちゃんにも送ってるじゃんかー!!」

ピロリロリーンと、また携帯が鳴った。

「えっと、なのはちゃんを確保しておいて、写真撮影するから……」

「ハッ!? れ、レイジングハート！ 最速、最速で元に戻して!」

このあと忍に大変残念がられた。

ただ、まあ

『い、嫌っ！ 誰か、誰か助けて!』

少女の声に誰も手を差し伸べない。

いたいけな小学生を助けられないなんて、周りの人はとても怖がりなのだろう。

ドタバタドタバタと物音が響く。助けられないなんて、残酷だ。

「そうは思わないか？」

「着せ替え人形にされてるなのはを止めてやりたいところだが、下着姿を見ると後で怖いからな」

男二人は部屋の外でやれやれと言わんばかりに紅茶を飲んでいる。

先程までいた三人は忍の玩具かお手伝いだ。

「巻き込まれたくないからって幼馴染を売ってのも酷い話だ」

「いや、明らかに餌を放り投げたお前が言うのかよ」

怖いものを見る目で見られる。心外だなあ。

唯単に、

「俺は楽しいものの味方だ」

「ああ、そう」

どうしようもない、と紅茶を飲む。

「お、お兄ちゃんたすく」

バタン。

「お兄さん、助けないのか？」

「流石に忍が怖い」

是非もなし。

ところで、写真と違って着せたのはゴスロリなんだな。

ユーノは猫とじやれてる。必死にじやれてる。

「男って、こういう時女性に勝てないよな」

「そうだな」

そういうものなんですか、と紅茶を注ぎながらノエルが尋ねてきた。

「まあ、勝てたらすごいな。」

「勝つ負けるの前に巻き込まれて玩具にされるのがオチなんで」

「着せ替え人形って、そこそこ精神にクるからなあ」

無論、お兄さんはなのはにたいへん怒られた。

元凶の自分は忘れられていたようだ。善哉善哉。

「は？ 温泉？」

「そう、温泉。行こうよ、楽しいよ」

ええ、本当にござるかあ？

なんて口にしたら運命の刃が飛んでくるので死んでも言えない。おい、殺気しまえよその家主。

まあ、従者も温泉に行くらしいしどうしようもないか。

勝手に調理場とか使ったら怒られるしな。

「まあ、暇だしネ？」

個人的な理由で外出する必要もなくなったし、最近では神形具を作る必要もなくなった。

色々仕込むのも終わったし、自分の神形具は既にある。

というか、エムプレム・ストーン神 鉄なんてもう見つからないだろうからな。

とはいえ、だ。サブウエポンを作るくらいは何度もやっている。

主に恭也が壊すから。

「で、温泉はいつ行くんだ？」

「明日！」

……。

「馬鹿か貴様、今から準備しろと？」

「大丈夫、夏休みや冬休みに備えて宿泊荷物を作ってるのは知ってるから」

原因は今ニマニマと笑っているあいつか。許さねえ。

宿泊荷物にはテントや寝袋なんかも入っているのに。

「……数時間よこせ、荷物を詰めなおす」

「わかった。お茶会にも顔を出してくれると嬉しいな」

軽くチョップを入れたけど、悪くないと思う。

段々とこちらを振り回すのが上手くなっていくすずかに、ため息をついた。

こう、なんだろう。家主たちには勝てないのだと実感してきた。荷物を詰め直し、ポストンバッグ一つまで減らす。

「サバイバル用品を抜いて、日数分以上の着替えも省いただけだが。」

f c k

予定を決めるなら数日前に言えと何度も言っているだろうに。何でもできる、何て思われていやしないだろうか？

困ったな、『一番なんて畏れ多い』のに。

「何だお前ら、暇人か？」

「待ってた人への一言とは思えないわね」

「待っててくれとは言っていないからな」

狂犬のようにアリサが食いついてきた。

ベル・フロントアーバンネーム

野犬の字 名を譲り渡す必要があるかも知れないとさえ思う。

「さて、急な予定が入ったせいで荷造りをする羽目になってたわけだが、一体何の話だ？」

「急な予定って……ほとんど毎年行ってるじゃない」

「二年前から去年までは授業をサボって旅に出ていたし、それ以前はそもそもこの屋敷にいなかった」

あー、と三人が口を揃えた。

デステックソ

喪失技術を探し回っていた頃は長期休暇に屋敷にはいなかった。

それどころか学校自体最低限しか登校していなかった。

「そういえばまともに学校で見たのって去年からよね……」

「ああ、そういえばそうだったかも」

「いつの間にか旅立ってたからね」

どこへ旅立っていようと自分の勝手だろうに。

まあ、授業期間であったところがまずいのだろうが。

「まあ、中途半端に残ってた記憶と現在に残ってる資料を探りに世界を旅していたな。」

金だけは両親がアホのように振り込んで好きなように生きろと言

わんばかりだったし」

「両親はどんな仕事してるのよ」

「貿易商だ。売れるものなら売るし、買えるものなら買う。

宝石の原石を現地で買い取って、ブランド店に売りに行ったりもしているな」

「ああ、確かに儲かるわね」

なのははよくわかっていないようだ。

「しかも、今は書き入れ時だからな。紛争が多いおかげでかなり儲かっているそうだな」

「ふえ？」

「アルフレート、そこまでしておいて」

「……わかっていても。ついでに本ファイルドネーム名で呼ぶな」

なのははの質問をのらりくらりと躲しつつ、

「で、こんな三連休に温泉旅行とか暇人か？」

「いや、三連休を七連休にして外国に言っただやつのセリフ？」

という、カウンターが飛んできたので笑って済ませる。

彼女の残した世界を見たかったというのもある。

「それはそれとして、ジュエルシードの方はどうなってるんだ？」

「えっと、あの日の猫以来発動は起こってないです」

「結構。問題がないならいい」

何様よ、と突っ込まれたので人様だ、と返す。

神格は相変わらず切り離れたままだが、それでいいだろう。

両親に施した封印もそのままにしておきたい。

あんな事件、忘れてしまえばいいんだ。

「さて、そっちの会議は終わったのか、忍」

「あら、気配を絶ってたはずなんだけど」

「気配を絶ちすぎて、ほかの気配まで消してたら意味がないだろうに」

「ふむ、気を付けないとね」

苦笑している恭也が、

「アル、稽古に付き合ってくれ」と続けた。

「ああ、問題ない」

そう言つて鉄芯入りの木の直刀を投げってくる。

「じゃあ、ちよつとじゃれてくる」

指先で峰を弾いて、回転しながら降ってきた柄を掴む。

「暇だし、観戦するわよ」

「そうね、恭也が負けたらどんないたずらしてあげようかしら？」

「お、お手柔らかに」

あ、死んだなと男ふたりが悟った。

どっちが勝つてもどっちかが玩具にされる流れだこれ。

カシヤカシヤカシヤカシヤ、カシユカシユ、カシヤカシヤカシヤ。

「ルービツクキューブ回すの早すぎ。回しすぎとかないの?」

「指で一回弾いたら丁度1/4回転だ」

お菓子とお茶でワイワイやってるであろう高町車とは異なり、カッブル+αの乗ってる月村車。

自分は高町車だ。

「よし出来た」

「早いなあ」

「戦闘中に角度計算とかで頭使わないのか?」

「いや、そんな状況早々ないから」

ないらしい。読み合いになると振り抜く角度でさえ気を使うのに。

「そういえば、そんな高速戦闘を経験させたことがなかったな」

「アルを貸すから高速戦闘の練習でもする?」

「あ、あははは。遠慮しておきます」

(逃げたね)

(逃げたわね)

(あとで特訓だろうな)

運転手の士郎氏もアララと言わんばかりの表情をしているのがバックミラーに写って見える。

基礎稽古しかしてなかったというのがよくわかる。

「しかし、よくもまあそんな短時間に四×四ルービツクキューブなんてクリアできるな。

正しい手順で解いてないだろ」

「あ、わかります?」

男二人で盛り上がりかけているところでアリサと桃子が肘打ちを入れて止める。

最近ではよくある光景だ。

「温泉かあ。」

前世では戦争で忙しかったからそんな機会はなかったし、今世でもそれほど機会がなかったな。

で、なんで昼間から酒なんて飲んでるんだ？」

「大人の特権というやつさ」

「左用で」

未成年のお前には飲ませられない、と言いたいのだろう。
だがな、

「まあ、怪しげな気配がしてるのに酒なんて飲めるかよ」

「ブツ」

気づいてなかったか。

「お土産売り場あたりかな、真つ当な生物とは違う遺伝詞が見えてたぞ」

ゲホゲホ、と噎せて

「そういうの、先に言えよ」

「遺伝詞が見えない人間に言ったところでああ」

「ご尤もで」

さて、

「どうしたものか」

「女性陣は長風呂だろうしなあ」

「まあ、忍もいるし大丈夫だろ」

「ユーノ、なのは経由で伝えておけ」

「あ、はい。」

で、お二人は？」

「そろそろ上がるのかな」

「俺は露天かね。」

しかし、失敗したなあ」

実に失敗した。ミスが大きすぎて泣けてくる。

「ん？ 父さんたちに言えないからどうしようも」

「そうですね、家族旅行に水を差すわけにも」

違う、そうじゃない。

「いや、ユーノを女湯に沈めてくればよかつたなあ」と

「お前、フェレットとは言え男になんてことを」

「流石に、その、勘弁してください」

思春期なのか。ああ、若いつていいねえ。

「思春期のフェレットを女湯に沈めたらそれはそれは楽しいだろうに」

「忍もいるし、させないけどな」

「恭也さん……助かります」

まあ、裸を見たら締めるって言ってるんだが、どうでもいいか。

それはそれとして、

「ユーノ、先部屋に戻ってる。

恭也に運んでもらえ」

「え、はい。露天に行くんじゃない」

「ん、哨戒、かな。神形具持ってきておいて正解だな」

何かあつたら連絡しろ、とだけ告げられて二人と分かれる。

さて、

「何が出るのやら」

世界で二番目に正解率を誇る直感に悲しみを背負いつつ、

「さて、と」

浴衣を着て、スラックスを下に履いて公園へと向かう。

さつき感じた気配はこの辺だったんだが……。

「アル、どうしたんだ？」

「いや、変な気配を感じてね。一応見に来たんだが……ここじゃないのか」

士郎氏と合流してしまった。

できるだけかち合わない方が良かったんだが、仕方ない。

「ふむ、俺にどうにかできる話か？」

「あなた」

「いや、封印、崩壊、遡行の何れかができないと対処できないから無理だな」

「そうか。無理はするなよ、なんなら恭也を使え」

「カップルの間に割って入れと」

「必要ならな、とだけ言って夫婦で去って行ってしまった。」

「勝てないなあ」

「ハア。強い人だ、色々。」

「で、出てきたら？」

「おや、気づいてたんだ。意外だね」

「……違うな。まあいい、何のようだ？」

オレンジの髪、額に宝石のようなもの、そして——てきに人外のにおいの気配——。
人のことは言えないが、もう少し世間に馴染もうとか、思わないんだらうなあ。

「あんた、フェイトの敵だね？」

「知らんよ、そんな人物。俺は、俺の平穩を乱すものの敵だ。」

なにせ、俺は世界で二番目に平穩が好きな男だからな」

「世界で一番じゃないのかい？」

「世界で一番だなんて、そんな自信過剰な」

「プツ、フフアハハハ。」

あーなるほど、馬鹿なんだ。はあく。

じゃあ、死にな」

人外の膂力で首を折りに来た。ちよつと想定より早い、が捉えられないわけでもない。

というか、銃弾より遅い。見て、考えて対処できる。

「ふむ、この程度か」

半歩下がり、振り下ろされる手を掴んで、力をそのまま流用し「なっ！」

片手で投げて地面に押し付けて、首を神形具で押さえつける。

「動くな、半秒あれば首を切断できる」

「くっ、油断した！」

襲いかかっておいて油断するなんて、バカなのか？

「さて、目的は？」

「……」

「黙り、か。となると、以前に対立しただれかの手先だな。

フエイト、だけじゃ男か女の判別はできないな。

が、美人局の動きがないってことは子供だな。しかも状況判断が甘い」と

甘いというか、ゲロ甘だな。

「っ！」

「で、ふむ……女か。

目的もわかれば苦労しないんだが……。

この条件となると父親を牢獄に入れられた恨みか最近の事件のどちらかだな。

ふむ、……なるほど、ジュエルシード、ね」

「あんた！」

「ア」

「っ!？」

「次は首だ」

動こうとしたところを、首の隣を五行して動きを改めて封じる。

とはいえ、巻き込まれて首に傷ができたが、動くほうが悪い。

「考えてることがある程度読めるんだよ。

顔の表情とか、遺伝詞の変化でさ。

集めてるんだ、ジュエルシードとやらを。ババアの命令で、ねえ」

「クッ」

「ふむ、こんな街に元からあるわけないから、落としたのもそのババアの仕業か。

ははあ、つまり、元凶は鬼ババアなる、女か。なるほど。

後は、ババアの情報があれば用はないな……。プレシア・テスタロッツサ、か」

「っ、ゴメンネ、フエイトー！」

背後か。内燃詞^{クロウズ}を覚えてから出直せ。

「グッ！」

背骨に体重を乗せた膝をいれ、その反動で距離を取って射撃を避ける。

折れなかったか。随分と強靱な肉体だ。

「アルフ」

「大丈夫、治療魔法でなんとかなるレベルだよ」

ふむ、コイツがフェイト、か。

「ん？ ああ、あの前衛的なファツションのニコラさんか。

名前はフェイト・テスタロッサっていうのか。

で、襲いかかってきたのはそっちだし、頭下げて逃げるんなら見逃すけど？」

「アンタ、数の差がわかってないのかい？」

「ああ、見せたことなかったな」

徐に石を五行する。

「は？ 消し飛ばしただけじゃ……」違う、結果は「イレイザー」「イレイザー」って、消滅!」

「命が惜しくないのならかかってこい。

生憎だが、こっちは非殺傷とかできないんでな。

運命が使えれば多少手加減ができるんだが……まあ、前世の話だしな」

運命は壊れたままだし、直す手立てもない。

さて、どうくるか。最悪殺すことも視野に入れるか。

相手の行動も決まったらしく、構えてきた。

こちらにも、ヴァイルト・ケーニッヒ 豪 皇を構え、

「ハアツ」

足元に大量に射撃してきた。煙幕が目的か。

「……逃げられたか。まあいい、今の余波で揺れたところを叩きに行きますか」

損害、登山道の風景、ジュエルシード・1。

折角の登山道脇の木々が……まあ、仕方ないか。

「ジュエルシードを破壊したって……」

「簡単だったぞ、二度五行する必要があったのが面倒だが」

「それで一瞬次元震が……」

次元震とやらが何かはわからないが、広範囲の軍事用音壊爆弾を使ったような事象は起きた。

二度目の五行は事象自体を狙ったものだ。

彼女の無茶に比べれば大したことはない。

君は今、何をしているのだろうか？

「さて、一度大事を起こしたことだし調査部隊でも待ちながら探索してくれ」

「分かりました、気をつけます」

なのはが部屋に帰ってきたらしいので通話を切り、こちらも土蔵に籠る。

「Please allow me to introduce myself

I, m a m a n o f w e a l t h a n d t a s t e

I, v e b e e n a r o u n d f o r l o n g, l o n g y e a r s

S t o l e m a n y m a n ' s s o u l a n d f a i

t h ———」

「S y m p a t h y F o r T h e D e v i l ね、英語の復習かしらっ。」

土蔵を開けて入ってきたのは忍だった。

「ああ、いらっしやい。

丁度哀れな子羊を思い出しからね」

「今、なのはちゃんと敵対してるっていう?」

「彼女は悪魔の所業によって生まれた可哀想な子羊。元凶はその親や。」

何があつてそこまでの業に手を染めたのか、ってね。憐れむしかな

「い悪魔だな」

ふと、気がついてしまったのか、顔色が変わる。

工学に詳しい彼女だからだろう。

「自動人形？」

「いや、クローンか、あるいは感情関連の手術だ」

「そう——、確かに悪魔を憐れむしかないわね」

土蔵のワイナリーからそこそこのいいワインを取り出して、飲まない？、と聞かれた。

未成年だが、飲んだことがないわけでもない。

ロシアに旅行に行ったときは必須だった。

「頂こうか、さすがには内緒で」

「そうね、内緒で」

習い事に行っているはずかには見せれない光景だ。

「それで、フェイトちゃんだったっけ。」

なんで普通じゃないと思ったの？」

「機械なら部品を変えるだけでいいのに五行や風水をかなり気にしてた。」

そして、精神面において、何かに依存しすぎている。手を加えられた証だろう」

「長生きしてる人間の観察眼って怖いわね」

笑いながら忍がおちよくってきた。

まあ、確かに精神は長生きだろう。

「精神はとつくに百歳を超えているからな。長生きだと言われても異論はない」

体は未熟だがな、と返す。

「まあ、いいじゃない。折角人間になったんだもの、楽しまないと損よ」

「ご尤もだ。今世では彼女に引つ掻き回されなくてすみそうので安心している」

ふ、と顔色が変わった。

あれはおもちやを見つけた時の顔だ、と思ったときには既に遅い。

「彼女、ねえ。誰かしら？」

なかなか感慨深いため息をついたあたり結構縁があつた人物っぽいけど」

「……異族グラゾリアンの女だ」

「グラゾリアン……ああ、純粋な人間じゃない人たちね」

「ここまで来たら逃げられはしないだろう。」

「酒が入っているためか口は軽く、諦めるのも早かった。懐かしかった、というのもある。」

「猫人の少女でな。」

よく猫になつて裸で現れたり、自分の運命に振り回されて嘆いたりと忙しいやつだった」

「その割には楽しそうね」

「そうだろうか？ いや、他人の目から見ればそうなのだろう。」

「そうだな、楽しかったのかもしれない。」

「アメリカに逃がしてやったのにドイツに戻ってくるわ、お子様体型のくせに裸を見られて恥ずかしがるわでなかなか退屈はしなかつたな」

「それ、すずかたちに言ったら洒落じゃすまなくなるわよ？」

「知っている、とだけ言つて笑われるのに対して肩をすくめる。」

「もう誰かに怒られたとか？」

「反独隊というレジスタンスの一人にな。」

「仮にも女の子なんだから女として扱え、だそうだ」

「さらに笑わせることになつたが、仕方ないだろう。」

「で、その女の子の名前は？」

「ハイゼル、ハイゼル・ミルドグリフ。救世者の持ち主で、世界を救つた少女だ」

「ああ、それで大事にしてたのか、なんて呟いてワインを回している。」

「まあ、いろいろあつたが悪くない記憶だよ。」

「約千年前から手紙を出してくるくらい気に入られてたしな」

「そのシステム面白いわね。郵送会社もやってくれないかしら？」

「紛失するのがオチだ」

まあ、そうよね。と笑い合う。

むっ？

「あら」

やはり、何かが起きたらしい。

「遠すぎてわからんな」

「だねえ、後で大学の友達にでも聞いてみるわ」

「アル、神形具の手入れを……あー！ お酒飲んでるー!!」

「あつ、やべっ」

「お姉ちゃんも！ 鍵はお姉ちゃんかノエルさんしか持ってないんだからー！」

「バレたか」

「このあとお説教を食らった。解せぬ。」

あー、二の三『微睡む爆弾』チクタクゴム

そして連鎖する爆発音。

「うるせええええええええええ！」

久々に館内の自室で寝ていたら不意な目覚ましによって起こされた。解せぬ。

発生源はメツフィー人形。

絶対忍の仕業だ。この部屋と忍の部屋だけ防音だし。

「くそう、まだ三時間しか寝てねえのに……」

壁に耳あり障子に？ あの子者絶対に許さねえ！

仕方がないから土蔵に行って風水紋章チューン・エンブレムの情報でもまとめるか。

着替えてパタン、とドアを開けると。

「おはようございます。お嬢様からこの時間に、とのことでしたので」

ああ、そういう。

「晩酌なら断るぞ」

「いえ、情報交換、とのことですよ」

なるほど、バイト上がりの同級生たちから情報が来たのか。

え、じゃああの人形遠隔操作？ うそだろ!?

しかもデフォルメだからさすがが気に入っている始末。つまり捨

てれない。うそだろ!?

「あのワカメの固有能力をぶつけてやりたい」

「あの、日本語かドイツ語、あるいは英語でお願いします」

「ああいや、お構いなく。忍は瞑想中？」

「ええ、できるだけ排気プレスを貯めておきたいとのことですから」

案内されたのは地下室。またはトレーニングルームともいう。

実はさすがはこの部屋のことを知らない。

無論アリサとなのはも。恭也とはここでこっそり模擬戦をしている。

ピチヨン、と雫が落ちる。瞑想の前に洗礼術式込の風呂で禊いだ後

のようだ。

そつと扉を開け、音も立てずに椅子に座り、忍の瞑想が終わるのを待つ。

明日、忍は授業がほとんどないらしく、授業に出たあと寝て、夜から恭也とデートだとか。

朝帰りだろう。テクノブレイクすればいいのに。

「ふう、待たせた？」

「いや、ちょうどいいところだ。運命のメンテもしておいた」

「助かるわ。遺失機械工学が専門なのに全然理解できないんだもの」

「その割にはノエルを修理してオミット版のフェアリンも作ってるよな」

「超頑張ったんだから、アルの論文データも参考にしたけど」

へえ、それで繋がってたんだ。視聴に一回五米ドルで見れるようにしてた時期がある。

収入管理は親に任せてたし、一二時間で一回の視聴可能時間が終わるようにもしておいた。

殆どの人間が冗談だと思って途中までしか読んでなかったという履歴もある。

「それで、どんな事件だったんだ？」

「空間歪曲崩壊、が一番近いと思われるわね」

「……となるとジュエルシードか」

情報を出せ、と言われてる気がしたので

「では、ジュエルシードは高密度のエネルギー結晶体であり、次元歪曲系の固有波動を持っているようだ」

「それで？」

「高エネルギーの衝撃、意志の発露と同時の発動、あるいは破壊などによってエネルギーが暴走する」

「つまり、誰かと誰かが奪い合いをして」

「そういうことだろうな。」

あと、危険すぎるから探しに行くとアリサから連絡があったから壊

しに行く」

「ふむ、封印して燃料にできない？」

「……そういう使い方があったか。純エネルギーとして取り出したあとに充填できればあるいは」

「了解。喪失技術の精霊石あったよね、あれに入れてみて」

「試しておこう、と告げる。」

しかし、だ。

「相変わらずだな。ラバーの下の左腕の調子はどうだ」

「ぼつちりよ。というか、鬼の腕なんてどこで拾ってきたの？」

「恭也のついで南大門にある神社の倉庫からもらってきた。」

美由希が使っている神器の副産物だな。嚴重封印してるから現代では漏れることはないはずだが」

へえ、なんて笑っている。

「ダージリン……いや、オレンジペコで」

「同じものを」

「かしこまりました」

「しかし、炎神の対抗手段が忍だけというのも怖いものだ」

「わたしの十束だけなんだっけ、止めれるの」

「どうぞ」

怖いものだ、と呟き、忍がそれを笑った。

「まあ、音源はアルカアリスちゃんしか取りに行けないし、大丈夫でしょ」

「だといいがな」

転移系の術式を持つ人間が出てきたら、取られちゃうし暴走させてしまう。美由希も使いこなせる訳でもないからここで時々練習させているが上達の兆しはない。永遠に死蔵することになりそうだ。

「この辺、かな?」

「駆発動でも完全に把握しきれないってのは厄介だな」

アリサと俺だけでジュエルシードを確保しに来ていた。

正確にはエネルギーのみだが。

「っていうか、ポンポン他人の強臓式機械を駆発動させれるあんたの方がやばいでしょ」

そうだろうか? 暇なときは鍛錬か瞑想してるから結構排気はある方だけど。

さて、と。

「海浜公園、ねえ」

「どうしたの?」

「なあ、海の方はどうなってる?」

「……えっと、かなり乱れてる」

海にもいくつかあるな。

「じゃ、探しますか」

「どのへんが怪しいとか」

ふむ、海浜公園ともなれば公的領域。

目につく場所なら見つかっているはず……

「防風林」

「了解」

五十分くらいしてからだろうか、アリサの方も休憩に入っていた。

『アルさん、ちよつといいですか?』

『何用?』

『ジュエルシードのことなんですけど、情報をまとめたので会えませんか?』

あー、今は出くわしたくないな。

『作業中。ジュエルシードのいくつかは海の中』

黙った。情報と考えをまとめているのだろう。

『ライブ、という情報の流れを見れるんですたっけ?』

ほう、ということとはなのはが傍にいるな。

『ああ。視覚情報として世界をある程度観測できる』

『ジュエルシードの波長がわかったんですか?』

『逆だ。正しくない波長の場所を見つけたに過ぎん』

『ありがとうございます、目処が立ちました』

さて、

「急ぎますか」

バレたら面倒だし。

それから十分、無事ジュエルシードを発見。

「よしよし、治療の紋章を刻んだ精霊石の欠片で覆って、と」

「風水すればいいわけね。なのはにバレる前に仕上げましょうか」

ラ、から始まる強い掛詞を感じ、膨大な遺伝詞を操作している。

邪魔できないし、警戒をしつつ眺める。

「ジュエルシード、見つけ……えっ」

「遅かったな、ジュエルシードは破壊つぶしたよ」

風水が終わったとともにフェイト・テスタロッサ+2がやってきた。

「お前が転生者か?」

相も変わらず転生者とかなんとか。

「知らん。そんな発言をしていたやつなら仕留めて警察に送り届けたがな」

「……どうだか。転生者は三人と聞いているからな、お前を倒せばちようどだ」

はあ、面倒くさい。

「そっちの。アリサだっけ、下がっておくといい。」

世界を乱す連中を仕留めるのが俺の仕事だ」

「……乱すような事してたか、俺?」

「さあ、あいつにとつては乱してるんじゃない?」

あー、ああ。なるほど。益々面倒だな。

「仕方ない、時間稼ぎも兼ねてちよつと本気出すか。」

アリサ、精霊石の風水が終わったら合図宜しく」

「はいはい、ついでなんだから風水紋章も試しておいてよね」
「げっ、なんで知ってるんですかねえ？」

「情報網を甘くみないでよね」

フフン、なんて笑ってるあたり忍かすずかが原因だ。

アリサは口がうまいからなあ。

「さて、依頼通りに風水紋章の起動をしますか」

ア、という遺伝詞を放ち、この区画に仕込んでいた風水紋章を発動させる。

そのためにいくつもの神形具を作っていたというのものもある。

「なっ、その剣とこれの二つが転生特典か!!」

いや、転生特典ってなんだよ。

「アースバリン地竜か。5m四方の紋章だったから……」

「千二十四万だ」

「……早いし」

風水の遺伝詞操作は治療だから、最終的には元に戻る。

但し、あの精霊石のかけらのように、自己進化の紋章を刻んでいない限りは、とつくが。

「……行け！」

「くっ！ こんな無茶苦茶な特典を選ぶなんて！」

虚空から取り出したのは両手に鏢までしかない取手。

一瞬で振り抜き、剣を生み出した。

「……珍しいな」

ガチガチに固まって風水五行できそうにない。

色合的には氷だが、あんなモノ存在するののか？

「このっ！」

本人のスペックも高い。が、時間稼ぎだけなら何とかなるだろう。しかし、こいつは遺伝詞の乱れが殆ど無い。機械化してるわけでもなさそうだし、あれ自体が本体か。殺したくは無いんだが……。

「加勢する。サンダースマッシュャー！」

それは、

「悪手だな」

地竜が巨大化し、さらに手が負えなくなる。

「なら、本体を叩くべきだね！」

あたしとフエイトがこの竜を抑えるから！」

「承知！」

ふむ、独軍の中級くらいの実力かな？

試せばわかるか。

「ア」

という敵意の赤の掛詞でを大気を五行し、爆風を起こす、それに突っ込み、さらに大気の爆発を五行して駆け抜ける。

「くっ」

「ふむ、そんなものか」

「ふざけるな！ 魔法を使うくせに非殺傷設定も管理法も知らないのか！」

管理とかなんとか言ってるけど、そもそもとして、だ。

「残念ながら、俺は魔法は使えないぞ」

魔法のように見えるが、魔法技術^{マジック・テクニク}ではない。

「はあっ!? 特典以外の攻撃で魔法が使えないだど!？」

特典以外の魔法ってなんだよ、と数時間問い続けたいところだが

「アル、風水終わった」

「了解。地竜はもうちょっと動き続けると思う。

遺伝詞を乱しておいて逃亡しますか」

「了解、詞変！ 三百万の詞階よ！」

「アアアアア!!」

弱すぎる遺伝詞をぶつけ、乱れを大きくする。

その結果、地竜は巨大化し、行動時間も多くなる。

「じゃ、精霊石だけ回収して残骸は廃棄で」

「あくどいわね」

精霊石をナイフでアボガドのように切り分け、中身のジュエルシードだったものを取り出し捨てる。

さて、結果をあとで確認しなくちゃいけないし、そろそろなのはも

来る頃だ。

「逃げるぞ、すぐかが来る前に!!」

「言ってるの!?!」

「忍からの極秘ミッションだといっただろうに!」

藪を抜け、時間を切り取った結界から抜け出る。出口は五行で無理やり作った。

「ハアハアハア……。そろそろ来るはずだが……」

「何がよ……フー」

「電話を受けてきてみれば、何やってるんだ?」

「忍のお使い」

「忍さんの密命」

「……頭が痛くなってきたが状況はわかった。月村邸でいいな?」

「頼んだ。バイクの後ろとサイドカーと好きな方を」

「サイドカーで」

「……アリサちゃんもアルに染まって自由人になってきたな。安全面から見ればサイドカー推奨だが」

悪かったな。

「おかえりー。よくやった、褒美をやろう」

「あんな割に合わない仕事二度とやらないわよ!!」

結構楽しかったけどな。

「で、精霊石の方は……ふむ、d pを作るのにはまだまだ足りないわね。」

とはいえお疲れ様、アリサちゃんはお風呂入っていきなさい。海風でベタベタでしょ」

「ええ、着替えも持ってきておいたし遠慮なく」

アリサが出ていくのを見計らって、

「ミツシヨン達成よ！ 精霊石の感応性を復活させることができたわ！！」

「結局、何をさせてたんだ？」

「風化した精霊石を元に戻してもらったのよ。」

d pシリーズの、カイザーブルグの心臓部といってもいい遺産のね」

「カイザーブルグは旧世界のドイツのとある研究者と技術者が千年前の技術と最新の技術を組み合わせて完成させた当時最新を誇る画期的なシステムを組み込んだ戦闘機だ。」

まあ、目的が月に行くためだから宇宙船というべきなんだが、どうでもいいな」

「特徴は燃料の補給がいらないということ、自分で成長進化することが挙げられるの。」

資料を見たときは頭を抱えたわよ、滅んだ文明進みすぎてるだろうて」

「つまり、これがあれば再現できるのか？」

「後九倍の精霊石と紋章師が存在してればな」

「……まだいるのか？」

「精製し直した目的には十分足りてるわよ。再現したいかと聞かれたら頷くけど」

頷くんだ、と恭也が呆れた。遺失技術を探求するのが好きな忍からしてみれば聖遺物に見えるのだろう。槍か杯か釘か十字架か知らないが。

「まあ、後は紋章技術さえ発掘できたらノエルの動力をこっちに変えようと思っただけ」

「ああ、そういうことか」

ノエルは充電式の動力で動く自動人形だ。充電の必要のない動力に変えたかった、というのが忍の夢だったとか。俺の知ってる自動人形は存在定義を失うか大破するまで動き続けてたからそういうのを知らなかった。

「幸いにも、疾風シルフィードというd pシリーズの後期型の情報は半分入手しているからどこが必要な情報なのか忍が頑張って解析するのを待つだけだ。と、いうわけで恭也も手伝ってやるといい。」

俺は紋章を彫り込む練習をする必要があるからな」

「彫り込むって、精霊石に？」

「その外側の箱に。カバーに彫り込むんだ。ふざけてるだろ？」

「……すまん、頑張ってくれ」

はあ、彼女には甘いやつだ。

「じゃあ、俺も男湯に行くから資料整理を二人でやってくれ」

土蔵から出たとき、すずかにショートアツパーをかまされて意識を失った。

バレてたらしい。

「で、何事だ?」

「何事って……のんきだな」

記憶が正しければさつきまで土蔵にいて、呼び出されて外に出ただけのはずなんだが。

どういう訳か、謎の和室らしき変な部屋にいる。鹿威しは室内に設置するものではないはずだし抹茶は砂糖を入れるようなものでもないはずだが……

「のんきも何も、おかしい空間にぶち込まれて変な夢でも見てる気分だ」

「あ、あはははは……」

笑ってないでどうにかしろよ、誘拐犯と原因ども――

「んんっ。さて、説明してもらおうか、色々」と

「色々、ねえ……」

どこから話したもののか、あるいはどこまで話したもののか、

「まあ、知ってる範囲を教えていい範囲でなら話していいか」

そこで反応するのか、そっちの訳知り顔で笑ってる女を見習えよ。

「どこまで話を聞いている?」

「とりあえず、話していい範囲の内容を全部話してもらってからでいいかしら?」

「結構、あんたの方が話し相手としては面白そうだ。

じゃあ、知りたくなかったら途中で止めてくれ」

では、

「ある程度編集して話す。元の情報が知りたかったら俺以外に聞くことだ」

それは、フェレットもどきが弱々しいメッセージを送ってきた日からの出来事だ。

堕ちてゆく螺旋

「そうだな、まずは何があったか、からだろう。」

先月頃、そのフェレットもどきが弱々しい遺伝詞のメッセージを送ってきた日からだ。

大したことはない、力ある人に助けを求めるといっただけのものだった」

「それで？」

「俺は面倒事には関わらないつもりだった。」

そういうのは生前に味わい尽くしたからな」

「生前？」

「気にするな、滅びた世界の話だ。」

で、その日から暫くはツレが怪我をしてその治療の手伝いと看病をしていたな」

「……そうか」

「で、治療が終わった二日後、街で巨大な樹木が急成長するという事件が起きた。」

それが初めに関わったジュエルシード事件だ」

「……危険だとは思わなかったのか？」

「特には。もっと危険な目にあっただけもあるしな」

主に忍関連で、だが。」

「その日のジュエルシード事件の方は恙無く終焉を迎えたんだが、変に絡んできた奴がいてな。」

そいつが背骨を叩きおって皮膚を貫通するという大怪我になったために治療してもらったわけだ」

「……初耳だな」

だろうな、まあ、わざわざいう理由もないしな。」

「で、強制的にすべての治療を行ったから歪めていた自身の元の姿を取り戻す羽目になって、警察に突き出すことにした」

「ああ、そんなこともあったね」

忘れてたのか。いや、そのほうが建設的だが。」

「そいつから聞き出したキーワードは、魔法と特典、というものだ」
「心当たりは？」

「ないな。遠隔魔法師ならともかく」

聞き覚えがないらしい。当然だろう。千年以上昔の話だ。

「その後、目を怪我した少女となのはにある程度手ほどきをして言っていたわけだ。」

最低限自分の命くらいは守れるようにな」

「関わらせなければ良かったんじゃないのか？」

「関わるかどうかは個人の自由だ。そこまで否定するのは親の仕事だろう。」

で、ある日の午後、俺が関わった二つ目のジュエルシード事件が起きる」

とはいえ、特筆することはない。

「金髪でフェチズムな少女が襲いかかってきたただけだ。」

多少強かったが、そこまでだ。そっち二人の姉と兄に比べればただの雑魚だった」

Aランクはあったんだが……と言われてもよくわからん。

あれでAなら英雄デア・ヘルトは何処まで行くというのか。

「で、適当にあしらって追い返した。大したことなかったしな」

「数日後、急に温泉に行くという話になって慌てて荷物を作る羽目になった。」

で、そこでもまたジュエルシードが関与していた」

「えっ、初耳なんだけど」

「知らなかった」

二人には言っていないからな。

「そこで、オレンジの毛をした異族以外の人外と金髪とまた遭遇した。で、そこで尋問してある程度の情報を入手した。」

名前と、目的辺りを入手することに成功した」

「後でそれも聞かせてもらおう」

「その際、情報を吐かせたあと撤退させてジュエルシードを破壊した」

「はっ、破壊!？」

「……その後音沙汰もなく、もう関わる必要がないと思っていたら依頼が来てジュエルシードで実験をすることになった。それが今回連

れ出された元凶だと思われる。——以上だ」

まずは黙ったか。情報をまとめるのだろうか。

「異族以外と言ったか。どんな奴だった？」

「狼に変身したな」

「ああ、あの使い魔か」

へえ、あれが使い魔か。戦闘向けか？

「じゃあジュエルシールドが使い物にならなくなるような実験とは？」

「機密事項だ。知りたかったら依頼主に問え」

またピクリ、と反応した。まだまだ若いな。

「では、尋問で入手した情報を噛み砕いてもらえるかしら」

「了解した。まずは……金髪の少女からか——名前は」

「あ、アル君。あの子のは私が聞き出したんだ」

「ふむ、じゃあ他の情報でいいか？」

「ええ、少しでも情報を集めたいから」

「後大きな項目はひとつだ。」

使い魔らしき方が鬼婆と認識している金髪の母親の命でジュエルシールドを集めているらしい。

で、母親の名前はプレシア・テストロッサ、だったか」

「……かなり大きな情報だな」

そうなのか。

「かなり前進するわね……それで、非殺傷設定で魔法を使っていたことに関しては何？」

「何度も言わせるな。魔法なんて使えないし、非殺傷設定というものも知らん」

また黙り、か。

飽きてきたな。

「記録が正しければ竜を召喚していなかったか？」

「違うな。あれは風水という世界法則に則った遺伝詞の変化による結果だ」

「……そこが噛み合っていないのか。」

わかった、君たちが使う風水、というものを説明してくれ」

ああ、そこも聞いてなかったのか。

「風水は遺伝詞を変化させる手段の一つだ。

遺伝詞とは世界を構成する流体を特定の形にしている情報だ」

「えっと、見せたほうが早いんじゃないかな？」

「……神形具も呪符も持つてないぞ」

「あー。アリサちゃんも捕まえるべきだったね」

そこまでバレているか。

「まあいい。風水とは風水五行と呼ばれる技術の側面でしかない。

俺が使うのは五行寄りだし、説明も上手くないだろうから適当に聞き流せ」

俺の知るもう一つの20世紀の話を語る。それは神秘がまだあり、世界が今よりもはっちゃけていた頃だ。

「……頭が痛くなってきた。つまり、大昔に魔法以外にもそういった技術があったわけか」

「その認識がわかりやすいならそれでいい」

人間はわかり易い解釈がないと理解できないものだから、すべて丸のみ、というには年をとりすぎている。

すべて丸のみできるのは幼子くらいのものだ。

「で、どうやってそんな技術を知ったんだ？」

「前世の記憶がある程度あってな。」

後はそれを頼りに各国をブラブラと旅していただけだ」

暇人め、と言われてもなあ。

「でまあ、ある程度集め終わったから復元とか試しているところだ」

「ふむ、それで……その技術はなんで廃れたんだ？」

「世界が滅んだからだ」

「ほろっ、いや、滅んでいたらこの世界は残っていないはずだろう」

「ほかの次元世界がどうかは知らないが、少なくともこの星は六度は滅んでいる」

FORTH, AHEAD, EAGE, GENESIS, OBSTACLE, CITYと時代を変遷してきている。

現代はFORTHに一番近いらしいが、詳しい情報は残っていない。

「貴方は、どんな時代に生きた人ですか？」

「都市理力、という都市毎に違う効果を持つ、現代だとCITYと呼ばれる時代に生きた逃がし屋だ」

「そんな高度な文明が滅んだのは、やはり科学の発展で？」

「いや、地殻変動らしい。」

それ以前だと世界合一で滅んだこともあるらしいが、記録は残っていない」

「そう、中々変わった世界ね」

真つ黒な坊やの方は納得してないようだがな。

「僅かに残った人類が何度も立て直してきた世界だ。」

多少の出来事なら笑って手の空いてる連中が騒動を潰すような世界だよ、ここは」

「そう。では、改めて。」

危険だから今後関わるのは遠慮してもらおうかしら。よく考えて行動して頂戴。

そういう風にもうひとりの女の子にも伝えてもらえるかしら？」

「はいはい、どうせ厄介事が降ってこない限り関わる気はないからな。仕事も無事に終わったし問題なしだ」

そういつて、袖に隠してあったナイフで縛っていたロープを切り裂く。

「驚いた、そんなギミックもあったんだな」

「武器がなかったら戦えないとは言わんが、戦略が減るからな」

用心は当然だろう？

と、そう告げた。

「さて、帰って寝るわ」

やっと事情聴取という名の監禁から解放されてそう告げた。

深夜0時。生活リズムをなんだと考えているのやら

「アル君は、これで満足？」

「俺は世界で二番目に平穩が好きな男だ。わざわざ厄介事に首を突っ込む気はない」

放っておいていいなんて言われたんだから放っておくに決まっている。

「世界で一番じゃないの？」

「世界で一番だなんて、そんな自信過剰な」

「なるほど、お大事に……」

前にも言われたが、どうということだろうか？

「とはいえ、腹黒に頭を下げる気はない」

「腹黒？」

「腹黒だったね」

どうやら心当たりが無い様子。世界は美しく見えるのだろう。

「えっと、すずかさんはどうするんですか？」

「私？ んくアルが参加しないなら私も遠慮しようかな。

技能がまだまだ使いこなせてないし」

下手な神器使いより十分強いんだが、総長連中と比べるとやはり劣る。

草薙は最強のリズムの一つだ。発動はほぼ最速に近く、威力も殆どの右神器に比べれば高い。

それで負けるのなら、腕が悪いということになる。

「すずかは暫く士郎氏に剣術を学んで来い。

MDなしに神器を発動できるのに弱いつてことは熟練度が足りてない証左だ」

「そうだね、技能は身体スペックがモノを言うから鍛えるしかない、かな」

「俺も仕込んでおいた風水紋章を作り直さないとなあ」

「あつ！ あの時の竜って!？」

「ん？ 俺の仕業だが、何か?」

とぼけた風に答えるとゴスツゴスツと鈍い蹴りが飛んできた。

「仕方ないだろう。」

逃げたいのに逃げ道を塞がれるわ、相手は話を聞かないと踏んだり蹴ったりだったし」

「おかげで私たちも竜に襲われたんだけど」

「馬鹿どもが散々遺伝詞を乱しまわってたからな。」

術者が消えても発動し続けるなんて考えもしなかったんだろう」

「あー、金髪の子砲撃しかしてなかったもんね」

「えっ、放置が正解だったの!？」

知らなかったようだ。すずかは逃げに徹していたようだしある程度悟っていたのだろう。

「さて、どう動く、腹黒女」

——アースラ艦内——

「んー、敏い子達は気づいて手も貸してくれないでしょうね」

「それが一番なんじゃないですか?」

「金髪の子と使い魔、さらにもう一人となると一人じゃどうしようもないでしょう?」

「そう、ですね。双剣の少年は魔導師の能力はともかく、肉弾戦は得意のようですし」

「そうになると、ちよつと厳しいのよね。転生者っていうのがほかにもいる可能性があることだし」

どうしようかしら?」

「少なくとも、敵対はしないと思いますよ」

「……そうね、二人は手伝ってくれるかもしれないけど、高望みはしな

いほうが賢明ね」

さて、テスタロッツサというのは多分彼女のことだろうし……

「あの子、もしかすると」

「可能性はありますね」

そんな悲しいことはないと思うのだけれど……。

念のため、エイミィに本局に調査依頼を出してもらっている。

「それにしても、魔力反応があったのに魔法が使えないってのはレアケースですね」

「そうね、多少訓練でもすれば使えるようになるかもしれないけど、わざわざ引き込むのもおかしな話よね」

チャポチャポと砂糖を入れ、ミルクを加えてお茶を飲む。

「まあ、今後何かあったら手を借りるにはちよっどいいでしょう」

「余り好きじゃないですけどね、飄々として裏表がありそうで」

「あんなの可愛いものよ。身内に手を出すな、って言ってるだけだもの」

まあ、これも経験かしらね。

「多少ああいいう人間にも揉まれなさい。

どんなことを考えて、どんなことをしているのか。

サンプルケースとしては珍しい分経験は増えると思うわよ」

「そうしてみます」

二日後、なのはは学校に来なかった。

すずかとアリサには電話で手伝うって言ったらしい。

そういえば、電話番号教えてなかったな、とか思いつつ。

「失いたくない、か」

かつての薄ら残った記憶。その中の一場面。

彼女と決着を付けに行つた時のことだ。

あの子の慟哭だったのだろう。それは悲しくも、続いて欲しいと願っていたことだから。

「アルフレートくん、ぼうつとしてるしこの問題といってくれるかな？」

だがまあ、同じことを繰り返す必要はないだろう。

伯林の人たちは前を向いた。幸いを探すのだと。なら、俺は……

「なんで積分なんて使ってるの！ そんな難しい問題じゃないでしよう!？」

「合ってるなら問題ないだろう」

「あーもう！ この問題の正しい解き方は……」

あの日のバカども、この空は今も青いよ。

算数の授業が終わるとともにメールが届いた。警察からだ。

「……は？」

「どうしたのよ」

「どれどれ……え？」

どうやら、警察に放り込んだ身元不明の男は自殺したらしい。

「転生とかなんとか言ってたし、死んだらまた次があると思ってるわけか」

「なんか、人生を舐めてるわね」

「一度しかないから必死に生きるのに、次があるからと安易に死を選ぶのは、最悪だな」

一度しかないから足掻くように生きるのだ。一度しかないものだから大切にするのだ。それを知らないというのなら、何度生まれ変わろうとその一生に価値は無いだろう。

「気分が悪くなった。購買で飲み物でも買って来る」

「オレンジジュース」

「午後ティーレモン」

「……俺をパシリだと勘違いしてないか？」

「駄賃も払ってあげるからさっさと行ってきなさい」

そう言つて五百円玉を投げ渡してきた。

こうなつたら逆転の目はない。

「よつと」

階段を飛び降り、手すりで体を捌いて一気に二階まで降りる。

そこから窓を飛び降りて渡り廊下の屋根を伝い、となり校舎の窓から入り購買にたどり着く。

「さて、オレンジと午後ティーのレモンだったな」

「コラー！ 階段を飛ぶなあ!! なんて聞こえたが無視だ。」

飛べるようにする方が悪い。

「午後ティーレモン、オレンジジュース、コーヒーを一つずつ」

「350円ですので、お釣りが150円です」

「D a n k e」

「ほら、要望の品だ」

「いや、助かったわ。昼休みくらいじゃないと走らないと間に合わないのよね」

「その点アルは人が通らないショートカットを使うから助かってるよ」

要はていのいいパシリだろうに。

「さて、態々面倒事に首を突っ込んだバカは……どうせ楽しくやってるか」

きつと恐怖さえも知らずに。

その魔法によって、何か死に何かを救うこともあるだろう。
だが、それを背負えるだけの覚悟は彼女の中にあるのだろうか？

ダンダンダンダンダンッ!

カチャ、カランカランカランカラン、

カチカチカチカチカチカチ、

「時間だよ。腕がいいのはわかったけど、そこまでだ。」

「若いから腕の負担も大きいだろう?」

今日は土曜日。暇だから陸自の射撃場に来ていた。

銃なんて持つの久々だったから自信はなかったが、悪くない出来ではあった。

「三十発中外れが六つてのは凄すぎるだろ。ハンターか自衛隊員にもなる気か?」

「ハンターか。それもまた悪くなさそうだな」

そんな軽口をぶつけ合い、銃をバラして各パーツの歪みを確認し、油をさして、銃身のススを落として組み立てなおす。その手つきを見て、ポカンと自衛隊員は呆けていた。

「こんなものか」

「あんた、アメリカ人か?」

「いや、ドイツ人だ。父親が趣味でハンティングをしていたからメンテナンスを盗み見ていた」

ドイツも銃を所持するのに法律があり、そこそこ厳しい。

「にしては手際がいいな。何度かバラしたこともあるだろ」

「あ、分かる?」

違法だがな、と言って笑い合う。

「行くところないなら自衛隊に来いよ。その腕前なら体力さえつけければ狙撃兵として一人前だな」

「考えておく。前線に出ないのに銃撃訓練とかわけわかんないけどな」

「伏兵に襲われたり、国家防衛には必要だからな」

なるほど、理にかなっている。

「まあ、何になるかは追々だな。まだ小学生だし」

「そうだな。なりたい職業を探すことだ」

なりたい職業か。自分で見つけられないとな。

「そうする。楽しかったよ、午前中の体力訓練はかなり辛かったけど」
「嘘つけ、平然とランニングは走ってたじゃねえか」

ゲラゲラと予備役の自衛隊員と笑う。

「また来るよ。今度はもっと体力をつけて」

「おう、匍匐前進までできるようになってまたこい。もっと絞ってやるから」

この日、小学生が平然とランニングカデンスに着いてきていたせいでペースが遅れた連中は酷いことになったらしい。

受付で体験を終了して、アンケートを記入し、提出して帰る。

バスに乗ろうとしたところで二人に捕捉された。

どうでもいいからバスに乗ることにした。

バスの移動中、全員が無言だった。

バスが海鳴市のバスターミナルに到着し、

「来て欲しい。母さんが呼んでる」

「俺を連れて行ったところで、何もならんぞ」

「それでも」

ふと、男の方を見る。

「まあ、来てくれると助かる。一宿一飯の恩があるからな」

どうやら、選択肢は端かららしい。抗うなら、殺して行くしかないようだ。

しかし、

「目的は？」

「……言えない」

……

「壊すことしか能のない俺に用があるのか？」

「召喚もしていたじゃないか」

「……アレをするのに二ヶ月かかったのに？」

「……」

互いに情報が足りていない、と言ったところか。

「何を期待しているのかしらんが、俺は五行師だ。余程じゃなければ無機物しか作れない」

「……そうか。」

ところで、お前はジュエルシードを集めるのはやめたのか?」

「俺は壊して回っていたただけだ。手を出す必要が無くなったらそれでいいだろう?」

「あー、もしかして、本当に何も知らないのか?」

「だから、何の話をしているんだ。」

危険だから壊すな、としか言われてないぞ」

「ああ、いい。忘れてくれ」

「はあ」

「とりあえず、話を聞くだけでもいいから着いてきてくれないか?」

「まあ、聞くだけならな。ジュエルシードをどうこうするのに手は貸さない」

「それでもいい。母さんが、待ってる」

(母さん、ね)

—— side

転生者と思わしき人物と対話する機会ができた。

彼はこの世界に移る際のルールを知らないらしい。

『あるべきをねじ曲げ、なかったことを有ることに変えてしまえば身を滅ぼす』

この基本ルールさえ知らないということは、どうやら転生者じゃないらしい。

話によるとアルフを殺そうとしたそうだ。脅しではなく、本気で。

前回の邂逅も、下手をするとフェイトを殺していた。

「外れ、かあ。ニュースに上がっていた男が転生者確定だからとりあえずは安心だな」

自分がこの世界に送り込まれた理由は、輪を乱す転生者を消すこと。所謂抑止力になれというものだった。最後の一人ははやてのもとか、あるいは次元世界でのんびりしているのだろう。

「全てはあるべきように」

それが自分の願いだ。

転移魔法、とか言うもので怪しげな場所へと連れてこられる。駕発動しかできない壊れ切った”運命”と豪皇だけを持って。

一体、何をさせようというのやら。

壁は古く、老朽化の兆しはないが二十年は経っているだろう。気になったので、男の方に聞いてみることにした。

「あの狼はどうした？」

「ちよっと、ボスと喧嘩して」

「(プレシア・テスタロッサと?)」

「(ああ、ワケアリってことで)」

ワケアリ、か。この場合のワケアリってのは大抵録でもない。

来て損をした気分だ。

「少し待ってて、母さんに話を通してくるから」

「遅くなってもいいぞ」

袋からガムを取り出し、暇つぶしに噛み、ついでに紙の束を取り出して読み始めた。

「随分と準備がいいね」

「あ? バスの時間に間に合わなかった時の暇つぶし用だよ。」

本来ならあと一時間は訓練するつもりだったからな」

予想より体力が足りなかった。まだまだ子供か。

「自衛隊で訓練って……一応聞くけど何歳?」

「九だ。前世は世界で二番目に健康的だったから九十は超えていたはずだ」

「……その時はどこで何をしていたのさ」

ふむ、

「1943年までは反独隊の援護をしつつ、逃がし屋の仕事をしていた。」

当時は異族、半分以上が人間じゃない種族を独軍が大手を上げて

狩っていたからな」

「えつと、年代と年齢が釣り合っていないんだけど？」

「ああ、そこからか。」

この世界は何度も壊れ、作り直されてきた。

少なくとも六度は文明が廃れ、その度に新しい時代を開拓している」

「六度？ そんなにも世界は壊れたのか？」

「一部、地球で生活できなくなっただけの時代もあるがな。」

ともあれ、大きな時代の変遷は六度だ」

「……ええと、それで、君はそれのうちのどこの出身だ？」

「都市と呼ばれる区分の、伯林CITYに生まれたただの愚者だ」

嘲るように、かつての過ちを晒うようにそう言った。

自分の身の程を知らず、愛した女を殺しかけた馬鹿には丁度良いだろう。

「ふうん。それで、どういう時代だったのさ」

「そう、だな。数年前に皇カイザーブルグ城と呼ばれる新型機が月に行つて、その後

G機関と呼ばれるものが発足し、未来を見据えて動いていた。とはいえ、異族を排斥し、燃料にしていたあたり録でもなかったがな」

「ええと、現代のユダヤ排斥運動みたいなものかな？」

「その認識でいい。」

そういうわけで、伯林から異族を外国に逃がすのが俺の仕事だった」

困ったように笑っているが、当時は当たり前のことだった。

戦争は普通に起こるし、都市は様々な個性を持つていた。

この時代にはなく、当時にはあったものが多い。とはいえ、逆もしかりだが。

「……来て、母さんが呼んでる」

「……はあ。碌でもないことになったな」

ガムを口から出し、傷の増えたフェイトという少女についていき、扉を潜る。

「よく来たわね。取り敢えず話を聞かせてもらおうかしら」
配点マイナス。

「用があるのはそちらであってこちらではない」

「生意気な小僧ね。フェイト、もうひとりの少女からジュエルシードを奪ってらっしゃい」

はい、とだけ言って出て行った。

「さて、有意義な話を聞けると期待しているわ」

「有意義かどうかは知らんよ。勝手にそっちが期待しているだけだ」
袖に仕込んだナイフのギミックを操作し、準備をしておく。

「チツ、私を知りたいのは、人間の蘇生、及びクローンの生成だけよ」
全く興味のない分野だった。

「知らんよ。そんな技術」

「っ！ 馬鹿にして！」

手足を拘束し、杖を鞭に変えた。拷問しよう、って腹か。

「ア」

右手のナイフを使い、拘束を五行する。

「俺は基本的には穏便で平和主義なんだがな」

「よく吠えるわね、そんな仕込みまでしておいて」

さて、

「何もかも勘違いしているようだから言っておこう。

今の俺は壊すことしかできんよ。作れるとしても自動人形だけだ」

「減らず口を」

それだけの技術があるのなら、アリシアを蘇生させることだって出来るでしょうに!!」

なんだ、やっぱりただの哀れな女か。

「完全な死者蘇生はない。

条件付きで、尚且つ条件を満たすと死体に戻る。その程度だ」

「嘘よ、嘘よ嘘よ嘘よ!!」

有るはずなのよ、死者を完全に蘇らせる方法が!!」

「そんなものがあるのなら、この世に墓なんて存在しないんだよ。
それすらもわからないのか、哀れだな」

遺伝詞を読むまでもない。固まりきってこじらせてる。

もう、永くはないだろう。あと二、三年と言ったところか。

「っ！ 死になさい！」

「ア」

飛んできたムチを粉碎し、更にムチの背後に隠れていた雷撃も砕く。

そのまま通り過ぎて壁の向こうに攻撃が流れる――

「アリシアー！」

――のを身を張って止めていた。

右腕は砕けただろう。それでも立ち上がるのは、腹を痛めて産んだ子のためか。

「クローンで満足していればよかったんだ。

あんたは、諦めるべきところを間違え、求めるべき場所を間違えた。

そんな単純な事実になぜ気づけない、プレシア・テストロッサ」

「黙れ」

「死者は蘇らない。人生は一度きりだ。

一度しかないから価値があり、それを尊ぶ。そんな当たり前さえわからないのか」

「黙れ、黙れ！」

死者だって蘇るのよ、アルハザードにはあるはず！」

ああ、ダメだ。コイツはもう手遅れだ。なら――

「一応、そこまでにしておいてくれるかな。

死なれると困るし……何より、人殺しを見たくない」

止めたのは俺を連れてきたもうひとりの男だった。

「フェイ、何の真似？」

「一応、恩くらはいは返しておこうかと。

この先に僕らは不要でしょう？」

「……そうね、どこへなりとも好きになさい」

「……ありがとう。ジュエルシードと座標を入れ替えてくれると助かるかな」

「……フン」

二人だけの、密やかな何かがあったのだろう。
それは、秘密を隠し持っていた同士の華で、

「じゃあね、プレシア」

そして、今後交わることはない、別離だった。

「で、案の定空中に投げ出されると」

「あははは、そんな気はしてた」

ジュエルシードと置換魔術で入れ替えられ、空から落ちていく。ついでに雷撃も降ってきた。

「やっぱあのババア録でもねえ。つたく、アー！」

五行で降ってきた雷撃を砕き、体制を整えて両足から着地して三回転して衝撃を殺す。

「あー死ぬかと思った」

「どこが死にそうなんだ。」

それで、なんで今空から降ってきたんだ
なんでって、

「プレシア・テスタロツサとかいう紫ババアに拉致られてたからだよ。まったくもって碌でもないぞあいつ。死すら安息にならないだろうしどうしようもない」

「そっちの君は？」

「投降しようかと。一宿一飯の恩は果たしたし、この先は邪魔になるから。」

ああ、とはいえ仮にも元宿主ですから捕縛とかは手伝いませんので」

やれやれ、といった顔をしている。クロスケも大変だな。

「で、ただ捕まっただけじゃないんだろ？」

「……ああ、知りたくもない情報なら手に入った」

「この場で言えることか？」

「Neinだ。金髪の嬢ちゃんがいなければ話してもいいんだがな」
態々、自分の正体を知る必要もないだろう。

「私、になにか、あるの？」

「……ある。知りたくないであろう真実と知ってもどうしようもない現実が、だ」

「取り敢えず、場所の捕捉をし終わっているアースラに向かおうか」

艦橋、か。前はここまで案内されなかったな。自体が自体、ということか。

「エイミー、状況は？」

「バッチリ捕捉完了したよ。いま先遣部隊を送ったところ」

「……クロススケレベルの実力者じゃないと捕縛できんぞ」

「え？」

「プレシア・テストアロッサ発見……なに、これ」

『見て分らないかしら、クローンよ。全て出来損ないだけだね。』

フェイト、あなたもこの中の一つだったのよ。力があつたから記憶を写してあげたというのに……。

とんだ期待はずれだったわ」

「だろいな。」

卵子のミトコンドリアDNA配列が違うのか、あるいは別人の卵子を使ったのかしらんが、同じ人間は全く同じ状況でない限り存在しない。簡単な答えだ」

『フェイト、貴女はもう不要よ。好きに野垂れ死になさい。』

私はこれからアルハザードに向かうの。ジュエルシードの数は足りないけど、魔力炉で増幅すれば足りるでしょう』

フェイトが呆然と崩れ、シヨックで意識を失った。

「……これが、君の知った真実か？」

「ああ、後はフェイトのオリジナルはアリシア、というらしいことだけだ」

「そっちの君も知っていたのか？」

「ああ、飛^{フェイラン}青です。ジュエルシードを集めていること、フェイトがクローンだということしか知りませんでした。それ以上はこちらの知識も足りない上に邪魔されなくなかったようですね」

なるほどな、と呟き状況を把握している。

「アル、だったか。手を貸してもらえるか？」

「壊すことしか能がないぞ」

「構わない。防衛の機神兵の対処を手伝って欲しい」

「報酬は今後便宜を図ってくれればいい」

「了解しました。その報酬でお願いします」

ナイフと運命の柄をカバンの中に入れて、ふう、と息を吐く。

「これを頼む。解析は自由だが、壊さないでくれ」

「中身を聞いても？」

「神形具のナイフと壊れた運命のパーツだ」

「デバイスを持っていたのか？」

「風水五行に使う増幅器のことを神形具と呼称する。」

それに入っているのは俺が作ったものだ。見るなり分析にかける
なりは好きにしろ」

さて、

「手を貸すのは機神兵団の破壊までだ。話によると殺すのは御法度な
んだらう？」

「そうだ。ついでに言えば無闇に他人を傷つけるのものな」

「じゃあ、道だけ作る。後はそっちに任せる」

相変わらず、転移の感覚は気持ちわるいな。

「さて、じゃあ道を作りますか」

「手伝うよ」

「下がってろ」

え、と言ってる間に機神兵が襲ってきた。

「ア」

赤色の遺伝詞を増幅して五十万詞階ほどで飛ばす。
触れた端から機神が斬り捨てられていく。

「ほら、行くぞ」

「一度に何十体も、か。化物じみてるな」

「これでも壊しすぎないように手を抜いてるんだぞ」

伏兵が出てきたら神形具で叩いて起動系を五行していく。
分岐路まで来た。

「じゃあ、帰り道を作っておくからさっさと働いてこい」
「言われなくとも」

「よろしくね！」

「さて、来た道を五行していきますか」

五米ずつに神形具で地面を五行して道を鍛えていく。

多少の損壊に負けないように、何度も。

「よ、覚悟は決まったのか？」

「うん、行ってくる」

拳を軽くぶつけ合い、幸運を祈る。

「とはいえ、空間歪曲は強まってきたな」

「そのために、私が来ました」

リンディ艦長だった。

「分岐路のどこまでなら多少壊れにくくしてあるから目指すならそこ
だな」

「いろいろ助かるわ。将来管理局に入らない？」

「気が向いたらな」

「そう、まあ好きな職を探すのも若者の楽しみだものね」

温存してあったすべての兵力をリンディにぶつけてディストー
ションフィールドを止めようってわけか。

「機械相手なら気にしなくていいからな」

軽く振りぬきながら、

「ア」

五行して機神兵を手前から順番に壊していく。

「面倒になってきた。リンディ、巻き込まれるなよ」

「へ？」

『新世界は勝利の先にあるものなり』

「アアアアア!!」

百七十万詞階の全力を振り抜く。

塵一つ残さず、動いている個体を全て破壊した。

「ふむ、こんなものか」

「これは、手加減とか難しそうねえ」

「さて、ちよつと話題に上げるか。」

「ところで、さ」

「何かしら」

「過去を変える方法があるって知ってるか？」

「え？」

「だよな。」

「風水五行の秘奥、失われた三法つてのがあつてな。」

陰陽の遺伝詞、竜の作成、時虚の遺伝詞の三つだ。

このうち、時虚の遺伝詞を操れると過去を変えることが出来るんだ

「そうだ」

「それは……」

「まあ、もう誰も知らない技術だけどな」

「そう、なの。それで貴方を？」

「知ってか知らずかは捨て置いて、少なくとも俺じゃできん」

「空気が悪くなったので、吸っていいか、と尋ねてみたが」

「バカおっしやい、子供がすることじゃないでしょうに」

「そう言っ取り上げられた。」

「……はあ、ガムは遺伝詞を発生させるのに邪魔になるからあまり好きじゃねえんだけどな」

「もうすぐ終わるわよ。ディスプレイションフィールドの効果も薄くなってきたし」

「そうかい、なら適当に待ちますか」

「先に帰ってていいのに」

「阿呆、なのはを放って帰ったら後で面倒なんだよ」

「ガシガシと頭を搔きつつ、」

「ほら、終わった奴らから連れ戻せ。」

このブロックはともかく、ほかの区画はそう長くもたんどぞ」
リンデイのフレームから見える映像では、プレシア・テスタロッサ
が落下していく姿が見えた。

「エイミィー！ 転送して」

私は失いたくない

何も失いたくない

ふと、新世界の少女の駕発動の詞を思い出した。

数日間、次元震の余波の影響を避けるためにアースラで待機するこ
とになった。

フェイト、アルフ、フェイの三名は重要参考人として、

なのはとユーノは功績を讃えられる側として、

「で、いい加減返してくれないか」

「えー、もうちよつと、先っぽだけ！」

「何の話だ。いい加減神形具と運命を返せ」

「ブーブー！ 作れるならくれたっていいじゃない！」

「神形具は一つ三十万円、運命に至っては値段すら付けられんぞ」

「え？」

「だから言っているだろう、返せと。壊す前にな」

「で、神形具は買い取っても？」

「即金ならな」

「ちよつとここで待っててね？」

面倒なことに、CITYの品は貴重品としてサンプルが欲しいのだ
とか。

変に触って運命が壊れるようなことがあったら自分に力が返って
きてしまう。

それは避けたかった。

結局、給料の前借りで即金で払ってきたので神形具のナイフはくれ

てやった。

「会話を盗み聞きしたようで悪いんだが、魔法では過去改変ができないのに、そちらでは出来るんだって?」

「正しくないぞ、クロノ・ハラウオン。」

「正確にはできた、だ。今となっては方法も理論も残っていない」

「あー。それで、証拠でもあるのか?」

「過去を変える方法は二つある。」

数千年分の遺伝詞を風水か五行すること、この場合特殊な条件が必要になるが割愛する。

もう一つは時虚の遺伝詞を風水して過去に遡ること、こちらは香港で実際にあったらしい」

「それで、どんなふうの世界を変えたんだ?」

「歌を一つ残し、都市の寿命と自分たちの寿命とを入れ替えたそうだ」

まあ、伝聞だがな、と付け加える。

頭を悩ませていたクロノが気がついて、

「要するに、失われていてどうしようもないと」

「その通りだ。軽く二千年以上前の技術だぞ?」

「残っている方が不思議か」

それで、納得したらしい。

「それと、ごめんなさいね。無理を言って武器を売ってもらったらしくて」

今度はクロノが「は?」といい、固まった。

「構わん。どうせ予備の武器だ」

「予備とは言え、随分と価値があるんでしよう?」

「使える人間から見れば、だがな。」

「使えない人間にしてみればよく切れる不思議な形をしたナイフだ」
「でも、強度は並みの金属を超えているんだとか。サンプルには丁度良いでしょうね」

作れる側からしてみれば、集中力さえ途切れなかったら作れるので大したことないのだが。

豪皇とか無銘とかに比べれば安いものだ。

「えつと、フェイトちゃんたちはどうなるんですか？」

「今回の事件の重要参考人だ。手荒な真似はしないが、自由な行動を取ってもらおうわけにも行かない」

「そう、ですか」

なのはは目に見えて落ち込む。

「自分のことを自分で決めなかった罪の結果の罰だ」

「優しいのね」

「どうだかね」

「そうだ、なんなら遊びに来たらいいよ。しばらくはこの宙域に留まってるし」

「エイミィ」

「そうね、巡航中は暇なもの」

「館長まで……」

「じゃあ、時々遊びに来ます」

こうして、自分のPT事件は幕を閉じた。

八月、夏も終盤に入り宿題もとうに終えることがなくなって歴史書を読みに関書館に来ていた。

目的は、自分の板世界との整合性について。

「んつと……」

そこに、茶髪で髪留めをし、車椅子に乗った少女がいた。

少女は本を取ろうとして体を伸ばすも座っているために届かないようだ。

「どれだ」

「ふえ？」

「どの本だ、と聞いている。二度は言わない忘れるな」

「えつと、その茶色いハードカバーの」

中段の、左から三番目の本か。

「これだな」

「そう、それです。おおきに、助かりました」

「無理して転けられる方が困る。自分の領分を間違えるな」

「優しいんですね」

「さてな。世界で二番目に面倒くさがりだぞ、俺は」

「一番じゃないです？」

「世界で一番だなんて、そんな自信過剰な」

「ふふつ、面白い人なんやね」

笑われるようなことはないつもりだったが、泣かれるよりましか。

「アル、論文見つけた……ナンパ？」

「どうしてそうなった、月村すずか」

頭を抑えつつ、そんな事を聞いてきた本人に尋ねる。

「いや、普段と違う場所で普段と違うような女の子とだったし」

「ああ、随分と脳が傷んでいたんだったな。すまない」

「酷っ、原因が放り投げるなんて酷すぎるよ!？」

「えつと、お名前教えてもろてもいいでしょか？」

「アル、アルフレート・M・陽阪」

「私は月村すずか。よろしくね」

「うちは八神はやていいます。よろしゅうお願いします」

あれ、なにか両足がおかしいような……遺伝詞が侵食されてる？

そんなことを気にしていると、ゴスつと肘打ちが入った。

「何をする」

「いやらしい、変態」

「おかしな遺伝詞の流れを観察してただけだ。

両足とも、何かに侵食されている」

「えっ」

「へっ？」

「……ホントだ、何かおかしいね、これ」

「多分、病気のせいやと思いますよ。何を見てそないなこと言ってるかわかりませんけど」

多分、逆だな。

「悪魔契約術、ではなさそうだし……何かしらの代償として生命力を奪われているな。そのうち字我崩壊するぞ」

「代償で、そんな大げさな」

大げさな話じゃなきやいいんだがな。

「まあ、気をつけることだ。これ、電話番号だ。

病状が悪化して来たら連絡をくれ。多少の延命と対策をしよう」

「は、はあ。……宗教ですか？」

「バカめ、何もしない神なんぞに祈ってどうする」

「うわっ、各教徒に喧嘩を売ってるよそれ」

「ゴホン、ともかく、ある程度は手を貸そう。

主に手を貸すのは忍だがな」

「ああ、なるほど」

はやては首をかしげているが、なにか感づいてもいそうだ。

「はやて、本は見つかった？」

「あ、俊くん。ちゃんと見つかったよ」

「君たちは？」

「月村すずかです」

「アルフレート……アルでいい」

「そうか、俊介だよろしく」

握手をして、

「じゃあ、俺たちも行く所があるからな。くれぐれも事故には気をつけろ」

「わかつとるって」

初の邂逅は、こんなものだった。

夏がすぎれば秋となり、あつという間に時は過ぎた。
まもなく師走、師も走るほど忙しいと言われるほどだが、実際は語
源が違うらしい。

全く、日本語はややこしいな。

「むっ」

結界、か。近場で感知できるのはすずかと忍だけ。
遠いところに二人いるな。

「さて、お迎えしますか」

神形具を手に、土蔵を出て庭に向かう。

「やつほー、何事？」

「お姉ちゃん、ちよつとは緊張感とか……」

「敵襲だ。できるだけ生かして早く寝たい」

「了解、殺さないようには気を配る」

「忍」

「何？」

「フロギストンタンク精燃 槽だ。大切に使い」

「単二型だっけ、で一二本か。貴重だなあ」

運命の下取り付け部に差し込み、刀身を出す。

排気を使わせないのは長期戦を見越してのもの。

『新世界に、映らぬものはない』

「一発来たわよ！」

「砕く、警戒頼む」

「了解」

「うん」

あ

という鈍い詞色が響き、飛んできた球体を打ち砕く。
と、ほぼ同時に背後から奇襲。

「アアアアア！」

——すずか・草薙／ソードテック剣術技能・対抗重複発動・右袈裟・成功。

ハンマーの振り抜きに合わせて草薙を発動草薙の刃にぶつかり、襲ってきた赤い少女が吹き飛ぶ。

「あれ、私必要？」

「因果干渉できるとあつちの後衛に対処できるからな」

「なるほど、二人共遠距離攻撃あつても近接メインだしね」

ア

という鈍色の遺伝詞を五行して宙に佇むピンクの方を追撃する。

「ハアアアアアア」

——すずか・草薙／剣術技能・重複発動・草薙射撃・成功。

——すずか・草薙／剣術／腕力技能・重複発動・草薙射撃・

成功。

続いて赤色の逃げた先にすずかが草薙を追撃として放つ。

ハンマーから障壁を発生させたような不可解な甲高い音がして、碎け散る。

「なっ!？」

少女の悲鳴と、驚愕の音が聞こえ、

そして、二発目の草薙がハンマーに罅を入れる。

「アイゼン!？」

その瞬間、直感に従い前に走る。

虚空から腕が伸びてきて、何かを掴みそこねていた。

「よつと」

忍が伸びた刀身で生えた腕を斬りつける。音的に骨まで逝ったか。

一人は戦闘不能、もう一人は武器が壊れた。もう一人は近づかせていない。

「ナイス忍」

「たまには働かないとね。相手も干渉系とは思わなかったけど」

取り敢えず、数の優位はとった。

さて、次はどんな手で攻めて来る？

「遅いぞ、様子を見に来たが……撤退すべきだな」

「ザフィーラ、だけどまだページを——」

「この状況では無理だろう。ほとんど魔力を持ってない二人と大量の魔力を持つてる一人。」

その三人にこの状況を作られた時点で我らの負けだ。全員で挑んでチャンスがあつたかどうかだ」

「逃げるんなら追わないぞ、さっさと寝たいしな」

「え、追撃しないの？」

「掃討しないの？」

「お前ら、俺をなんだと思ってるんだ。基本的には温厚で平和主義な人物だぞ？」

「でも応用的には過激で容赦ない性格だよな？」

言い返せなかった。やるときは結構本気な気がする。

「ともあれ、ここで退くなら止めはしない」

「覚えてろよ」

「覚えてる間はな」

悔しそうに、赤とピンク、獣耳、そして遠くの人物が逃げていった。

さして、寝るか。

「は？ お前らも狙われた？」

「うん、リンカーコアも取られちゃって……」

「戦い方が雑なんだよ、力任せとか魔力任せとか有り得ないだろ」

二人揃ってうなだれている。なのはだ。

「私のところは来なかったわよ。風水紋章仕込んでるから来ても平気だけど」

「うちは起動する前に倒したからね」

「あの戦力の三人を三人で相手取るとか冗談じゃないの？」

「あ？ 全方位把握とか重騎士バンツァーカヴァリエの常識だから」

それで不意打ちを避けられたら苦労しないのだと、そういう顔をしている。

「で、恭也の方は？」

「お兄ちゃんは魔力がないから結界に入ることもなく無事でした」

「つまり役立たずと」

「ひ、酷っ。容赦ない口撃なの、この人!？」

なのはも容赦がなくなってきたな。まあ、戦うのが得意なくせに肝心なところで役に立たないなら役立たずの汚名は真遁れまい。

「まあ、デバイス？ の修理まで呑気にしてればいいんじゃないかね？」

「なんでそうのんきななの？」

「いや、数日前にうち、で昨日にそっちってことはしばらくこの辺避けるだろ」

わからないらしい。結構簡単なロジックなんだが。

「要するに、居場所を特定されないために違う場所を狙うってことよ」

アリサの一言に分かってなかったふたりが納得する。

「まあ、俺らは空も飛べないし転移もできないから関係ないけどな」

「あー、テストス。聞こえるく？」

「ところで、宿題とか終わったのか？」

「え、あの」

「昨日襲撃にあったってことは下手すると宿題終わってないんだろ

？」

「返事が欲しいんだけど、聞こえてないのかな？　おい」

「アル君、流石にちよつと」

「まあ、宿題は最悪写せばいいだろうし？」

「そろそろ泣いていい？」

「どうぞご自由に」

「ウガァー！　聞こえてるんじゃないの！」

「虚空に話しかけるとか痛い人じゃないか。見えもしない人に返事するほど暇じゃない」

「すみません、こういう人なんで」

「うー、はい。んんっ。全員、放課後ちよつとなのはちゃんについて支部に来てね」

「何用で？」

「今後の対策と、本部からデヴァイスだけ、その情報が欲しいって」

「はあ、行けばいいんだろ行けば。多少時間を空けての移動になるが問題ないか？」

「何か用事があるの？」

「本を返しに行く必要があつてな」

本を返しに図書館に寄り、習い事のあるアリサはそのまま車で帰る。

そして、フェイトの家の前にたどり着いた。

「ここがああの子のハウスね！」

「アル、それ女性のセリフだから」

「いや、取り敢えず言っておくべきかと思つてな」

ネットは結構面白い。DTの電詞板に行つてみたかったなあと思いつつ、開けられた扉をくぐる。

「ちはー、お邪魔するぞ」

「邪魔するなら帰ってねー」

「はいよー」

「つて、マジで帰らないで。冗談、冗談だから！」
「ややこしいやつだなあ。」

「で、何のようだ。魔法も使えない俺たちまで呼び出して」
「ペットボトルの紅茶を飲む。」

「ノンシュガーなのに甘い。人工甘味料か……。」

「ちよつとね。今後に備えて魔法を使えるようになってもらっておい
うかと」

「風水五行や神器じゃダメなんですか？」

「あー、味方を巻き込んだ時にそれだと致命傷になっちゃうかも知れ
ないから」

「要するに、首輪をつけておきたいんだらう？」

「まあ、そういうことですね。」

「土日に練習しに来てください。もう一人も連れて」

「もう一人？」

「ええと、二人じゃなくて？」

「え？」

「あー、なるほど。気づいてないのか。」

「なのはちゃんちで魔力反応もう一つあったんだけど」

「ふえ？」

「あー、そういうえば説明してなかったな。」

「美由希も神器リズム使いだよ。凶悪すぎて封印してるけど」

「凶悪？」

「なんて言ったらいいのかな。まあ、わかりやすく結果だけ言えばい
いか。」

「触れたものを焼き尽くす神器。最高の右神器、その片割れ」

「触れたものをつて、どの程度を？」

「全て。エネルギーでも非実態のものでも、氷であろうとも灰にする。」

「彼女を戦場に出すとは、敵をすべて焼き殺す、ということだ」

「流石に、それは……」

「管理局としては許可できないな。」

幸いにして魔力量は微量だし監視に留めるとしよう」

「で、忍は……うん」

「どうしたんだ、言い淀んで」

多分、

「何でもアリならこの中で一番強い」

「は？」

「へ？」

「え？」

「強いぞ、即死系の攻撃を無効化するし初手は必ず取られるし」

「おまけに身体能力も一級だしね」

「……映像を見る限り普通の人間に見えたんだがな」

「ああ、意図的に人間と同じスペックで動いてるからな」

本気を出したことはない、とかなんとか言ってたが、多分7秒代でも出せるだろう。

実際にそのくらい出せる恭也と正面からやりあってもなんとかなるくらいだからもうちよつと上に見積もってもいいかもしれないが、知らぬからどう答えたものか。

「彼女を呼び出すことはできるか？」

「多分。なのは經由でなら」

「お兄ちゃん、今日は忍さんとデートだけど」

「はい解散」

「……ああ、そういう」

仕方ないだろ、他に興味を持つような分野なんて喪失技術くらいだぞ？

「まあ、帰ったら伝えておく。とはいえ、魔力制御なんてできないだろうけどな」

「どうしてだ？」

「魔力に変換せずに直接流体を操作してるから、としか言えんな。」

詳しくはドイツの実家にある俺の論文でも読め」

適当にストレージデバイスとやらで練習したが、此方三人はちつと
もうまくいかなかった。

魔力に変換する、という無駄な手間を挟む分効率が落ちすぎてどう
しようもない、ということだ。

「はあ、今日も今日とて魔法の練習か。正直飽きてきた」

「私も……あ、はやてちゃん」

隣にいるピンクの紙の女性……いや、断定するには早いか。

「こんにちは、二人共よく一緒にいるけどカップルなん？」

「残念ながら居候兼荷物持ちだ」

「なんやおもろない……んくほほう？」

「な、なにかな？」

急にすずかがうろたえる。質の悪い酔い方をしたおっさんのような絡みっぷりだ。今度からこいつのことを豆狸と呼称することになろう。

「いやいや、ええんよ？ 女の子の華やし？」

「はあ、何やってるんだか。その辺にしておけ、騒音で追い出されたくないだろう？」

……ふむ、やはり侵食が進んでるな。放置すると臓器まで停止することになるだろう」

「前も言よったけど、なんでそんなに詳しいん？」

「ちよつと、人と違う目を持つててね。世界を情報として見れるんだ。

流石にあの目を持った先生やヘイゼル、アリサたちほど精密ではないがね。」

「はい？」

「まあ、多少便利な目を持つてるって認識でいい。

なあ、そこのお姉さん。あんた、何年ものだ？」

「へ？」

「え？」

気づかないほうがおかしいだろう。人間ではなく、感情も擦り切れているし記憶容量の方もおかしい。

そのくせ改造手術のあとはないから間違いなく人外。

「よく気がついたな。二千は超えていたと思うが……あまり昔のことはな」

「そつちもか。最近昔のことを思い出すのが難しくてな。

おかげで喪失技術を探して回る旅をするのが大分長引いてしまっ
た」

「二人共、知り合い？」

「いえ、初めてだと思えます」

「ああ、話すのは初めてだな。どつかですれ違つてた可能性はあるが」
「の割に仲ええね」

まあ、似た者同士ってことか。

「多分、似た者同士ですから。」

過去に何かを抱えてるのも、今を必死に楽しもうとしてるのも、自
分より誰かのために生きれるところも」

「其の辺、本当に似た者同士だと思うぞ。多分得意レンジも一緒だし
な。」

体鍛えてるだろ、骨格の出来方でわかる」

「そちらも、年齢の割に体が仕上がってますね。身長はあるから問題
ないのでしようけど」

「おかげでランドセルを背負えなくてな」

ピシリと、なにか固まった音がした。

「嘘、小学生なん？」

「身長が160超えていようが小学生だ。座席は常に一番後ろにされ
るし扱いはひどいものだがな」

「いや、席前にしたら後ろの子可哀想やろ」

「知らんよ。身長が足りないほうが悪い」

無いものを持つて人は生まれる、とのことだしな。

天は二物を与えず、というんだったか？

俺には平穩がなかったが故にこの今がある。

「因みに、ご両親の身長は？」

「母親が160後半の父親が190だな。大したことはない」

「はー、お父さんに似たんやねえ」

さて、な。肌は母に似て黄色系だけだな。

まあ、

「将来の夢は学者だがな。体を動かすのも嫌いじゃないが、競い合うのはあまりな」

命の価値を競い合った身としては、そういうのはもう要らない。せつかく平穩になったんだから、そつとしておいて欲しいものだ。

「あー、小学生のいぎこぎでもあつたんか。そんなん気にしたらあかんで?」

「まあ、そんな感じのことはあつたな。だがまあ、大したことはない」「そうなん?」

「ああ。自分の価値は自分の中にだけあればいいのでな」
「ストイックなんやね」

どうか、

「諦めた、だけかもしれないがな。」

とはいえ、一番を追い求めることはもうやめたんだ。故に、だ」
周りに聞こえぬよう、だがはつきりと意思は伝わるように、

「世界で二番目に君のことを心配しよう。人が減ってしまうと世界が寂しくなる」

「そこくらい一番でもええやんか」

「一番心配しているのは君自身の運命だ」

へ? なんて言つて呆けている彼女に

「知らないのか。ならばここで覚えていくといい、八神はやて。」

いきなり現れて、君の手を取り離さず、常に君の傍らで君を信じているもの、それが運命だ。

それに従えないというならそんなものは放り出して自分で切り開くといい。二度は言わない、忘れるな」

「……はあ、ええ人やね。なら、うちも頑張るか」

「結構。足掻きもせず諦観しただけの人生なんてつまらないだけだ」

「そな、私はこれから診察やからこれで。」

あ、すずかちゃん?」

「なに?」

「負けへんで?」

そう力強く言つて、彼女は図書館から出て行つた。

「負けないって、何の話だ？」
「し、知らない！」
その後ビンタを食らった。

「……はあ。君たち、一向に成長しないな」

「魔法の行使というものに余分なプロセスが多すぎるだけだ」

何でもアリで戦うと一人でなのはとフェイトとアルフを一人で倒せるのに、魔法を使って、となると全敗している。全廃と言ってもいい。実に無駄な作業だ。

とはいえ、気質に似たところは比較的ましであり、というか上回っている分野すらある。

「なんでそんなに両極端なんだ」

ガシガシと頭を掻きながら文句を言ってきているが仕方ない。

向いてないものはどうしようもないのだから。

「ずずかはステインガー系、アルフレートはブレイク系、アリサは治療と結界。」

そこまでその分野が得意なのになんでほかは平均を大きく下回れるんだ」

「二「無理なものは無理。人は飛べない」」

「あー、もうー！」

なんてこともあった。

ちなみに、俺たち三人はストレージデバイスとやらを支給されているが、専用のデバイスが必要とのことでナイフ型の神形具を急速で解析しているのだとか。

あとちよつと、ちよつとだけ、先っぽだけだから！

とのこと。頭がイカれているのか、作業のせいでおかしくなってきたのかは定かではない。後、構造が不明だから分解してみてください、なんて言われたので解して組み立て直した。

飛行魔法は搭載せず、魔力平面を禊いで作ってそこに立つ、という非効率らしい方法でしか空中移動できない。飛ぶ、というものが想像できないのだ。自分の体の使い方を極めきっているため、足場がないと不安になる、と言つてもいい。魔力を放出し続けるのも効率が悪いためこうなった。

「後は、意外だったがさすがとアリサに魔力変換資質が存在することもわかった。

アリサは炎、すずかは氷だ。とはいえ、使いこなすにはまだまだ訓練が必要だろう」

二人に言っていないのはまだその領域じゃないため。俺にだけ言っている理由は俺にそんな資質がないから。

「適材適所だろう。三人一ユニットとして組んだほうが早いと言ったらどうだ？」

「無駄に戦力を裂けるほど余裕はない。敵は四人、しかも一流だ。

何より君たち、いざとなったら生死を問わないつもりだろう？」

「死ぬくらいなら殺すだろうな。そういう教育は受けている」
武道も武術も生き残ることが前提の技術だ。特にアリサとすずかはお嬢様だから教育のレベルも高い。俺は前世からの記憶で容赦ができないだけだが、結局は同じだ。

後はピンをつけて起爆したら発動すればいいんだが……。

「ちよつと試すか」

「今日の訓練は終わったはずだが……」

「アリサの予備兵装だ。音壊爆弾という、遺伝詞を乱すための道具だ」
「なんでわざわざ乱すんだ。整っている方が安定するんだろう？」

「壊れたまま安定することもあるからな。そういう状況に対する回答だ」

「なるほど。見せてもらっていいか？」

「……見ても面白くないぞ」

「構わない」

そういうわけで、アリサを連れ出して音壊爆弾の実験と洒落込んだ。
だ。

アリサの力量で直せなくもない、というレベルの中古のバイクを乱して風水した。

結果は成功。ただ、無機物しか使えない上に無機物なら俺でも乱せ

るというオチがある。

一人の時用で、注意点を多く並べたが、さすがの記憶力かすぐに覚えていた。

「随分と平然と使うんだな。レクチャーでも受けたのか？」

「使い方なんて見てたらわかるじゃない」

「魔法は？」

「見えないところで作用してるから困惑してるんだけど」

なるほど、と眩き、メモに取っていた。

あれは確か、俺たちの特訓の状況報告のものだったか。

「さて、本局に問い合わせるか」

何やらいろいろ画策するらしい。

「……ふむ、何用かな」

「相変わらず気配に敏感ね。お仕事よ。クロノを手伝ってください」
「俺だけか？」

「アリサさんは特別補講中です。魔力変換資質のね。」

「さすがさんはお友達が遊びに来るとかで帰りました」

なるほど、そう口だけを動かして、やれやれと頭をかきむしり、
「出よう。そういえばフェイはどうした？」

「彼は研修期間兼無限図書館で調べ物中よ」

そこはいつからあるのか、いつの書庫があるのかさえ説明されていないという。
「瑣末なことだったな。」

「転送と撤退の転移を頼む。流石にその術式は記憶していない」

ついにクロノがはっちゃけて俺たちは術式そのものを記憶することになった。

何が起きてるかわからないから上手く発動できないのなら、何が起きているのかを全部把握させればいいんだろう!?!、などと妄言を抜き、事実それが現実には効果があったので採用されることとなった。

「では、行ってくる。期待はするな」

「向こうも百戦錬磨の騎士だもの、情報を手に入れるくらいしか期待していないから」

「それを過剰な期待というんだ。全く。オーダーは？」

「結界の外にいる主もしくは闇の書の所持者の確保。それから命を奪わないこと」

「拝命した。行ってくる」

足元に展開された転移陣に従い、結界の外、上空に放り出される。
「なるほど、安全地帯とは恐れ入る」

魔力平面を構築し、足場として着地する。

「アール、心当たりはあるか？」

〈遮蔽物があり見渡しやすい場所、高層ビルの影だ。〉

さらに絞り込むなら、そうだな下も見渡しやすい正面に高いビルがない場所でもあるだろう」

「なるほど、経験は伊達ではないらしいな」

結界を軸に互いに時計回りで怪しい地点を探る。

クロノが見つけたと連絡を短く入れた。

「ふむ、そこそこいいポジションじゃないか。狙撃……いや空間干渉か」

上空で待機し、伏兵を叩く準備をする。

アホタレ、空間転移の攻撃を予見していなかったな？

ア

という短い遺伝詞を神形具で増幅し、衝撃波として放つ。

続いて背後にも。

「あつてるだろう？」

「なっ」

気配が違う。伏兵は二人だったわけか。

「あーあ、こりや逃げられるな。まあいい、取り敢えず、だ。ア」

砲撃を五行して、

「依頼通り死なないように手加減はしてやるから本気で来い。

仮にも熟練の重騎士だ舐めるなよ」

「ほぎげ」

射撃を五行の波で飲み込みながら反撃し、生半可な攻撃は五行を強めるだけとなり、最終的に防戦に追い込んでいく。バリアを張って防いだらそれを壊す五行を叩き込む。

取った、と確信したときに大出力の砲撃を出されて結界を壊された。が、俺の任務は結界の維持じゃない。

クロスレンジで、神形具を相手に叩き込み、右腕と変装を破壊したが、それは囮で顔は右腕で隠され、カウンターでゼロ距離砲撃を食らった。

「チツ」

こちらも左腕を砕かれ、転移で逃げられた。

「すまん、逃げられた。アリサを呼んでおいてくれ至急だ」

へそれは問題ないけど、大怪我でもしたの？

へ左腕を砕かれた。遺伝詞は固まってるから今のうちに治したい

慌ててきた打撲のクロノと共に転送され、風水治療で神形具を刺され、二人揃って気絶した。

「ただいまー……すずかの友人が来てるんだって？」

そうノエルに質問する。

「ええ、車椅子の八神はやて様が」

「あー、朝にでも挨拶するか。取り敢えずなにか食うもんあるか？」

「皆様食事が終わってらっしゃいますから、簡単なものになりますか？」

……」

「頼む」

そう言つて、クラフト生地のパザを作ってくれた。感謝しかない。

「いい匂いだね、アル」

「すずかか。アリサ共々さつきまで働かされてたからな。ハラが減つて仕方がない」

フーン、と行って冷蔵庫から牛乳を取り出し飲んでいた。

「はやてが来ているそうだな」

「あ、後で挨拶でもする？」

「そうさせてもらおう。風呂から出た後に向かう……一時間後くらいか」

寝ちやうかもよ、なんて言つてから出て行った。

両手にジュースを持つて。

「……急ぐか」

ピザを急いで食べ、治療後の違和感がないかを確認したあとシャワーを浴び、髪を乾かしてすずかの部屋へと向かった。まだ話し声が出ている。どうやら間に合ったらしい。

ノックをして待つ……少し待たされた。あの声は電話の声だったらしい。

「どうぞ、遅帰りさん」

「好きで遅くなつたわけじゃない」

「こんばんわ、おじやましてます」

「気にするな、俺の家じゃない」

それ何か違う、と言われた。確かに何か違うが、他に言うセリフが

ない。

「珍しいな、家の人はどうした」

「なんか、帰ってくるんが遅くなるゆうてたからお邪魔させてもらうことにしたんや。」

あ、みんなの分の晩御飯は作っておいたから安心してええで」

なるほど、と言いつつ壁に背を預ける。

「……やはり字我崩壊がゆっくりとだが進行している」

「バランスフォール？」

「わかりやすく言うと、自分の状態が保てなくなつて、流体にも還元されず消滅することだ」

「どこが簡単やねん」

「……急性死する、と言い換えてもいい」

「あー、それならわかるけど、そこまで重い症状やないで？」

「どうかな、結構深刻だと見ているんだがね」

軽く見ただけでも流体の供給が腰から下にかけて止まっている。

どこかに奪われてでもいるように。

「まあ、原因を特定しないと治すのも困難だから何か判つたら言おうといい。」

少なくとも、君の敵になるつもりはない」

えへへ、と顔をほころばせ、逆にすずかが冷徹な顔になる。

「ところで、俊介はどうした？」

「あ、彼は自分の家に帰ってるらしいねん。」

余り家が好きじゃないらしいからよくウチに泊まりに来るんや〜」
所帯染みてるな。声には出さない。出したら怖いことになる。

「羨ましい限りだ。ウチの家は……随分と荒れに荒れたからな」

血が濃すぎた。脈々と受け継がれてきた僅かな因子が、自分の代で覚醒してしまった。

「隔世遺伝というんだったか、そのせいで随分と夫婦が揉めたからな。」

茶髪と黒髪からどうして銀色の髪の子供が生まれるんだ、とな」

「あー、DNA検査したんや……」

「よく知っているな。その通りだ。そのせいでちよつといろいろトラブったがな」

些細な不幸だった、よくある話だ。それがたまたま生まれた時に巡ってきただけだ。

「まあ、はやての話を聞かせてくれよ。」

さっきの話題の後だ、できるだけ楽しい話題がいい」

ほな、ウチらの話をしよか。という一言から話が始まった。

翌朝、ノエルが車ではやてを送り、それを見送ってから工房に入る。相変わらずの臭いだ。鉄の匂い、鉛の匂い、錫の匂い、それらが合わさって慣れないものが拒むような臭いがしている。毎日換気しているが、臭いが取れる日はない。

「さて、^{ラインケーニツヒ}純皇 クラスの神形具を作りたいものだな、つと」

今日から作るのはデバイスの刃の部分。

ストレージデバイスでは演算が追いつかず、インテリジェントデバイスではラグが生まれる。

そこで目をつけられたのがアームデバイス。武器の形をしたデバイスらしい。

剣と薙刀の刃を人数分作り上げるのが暫くの課題だ。

^{オートリビート}指輪を右腕の中指にはめ、形を打ってあるフレームを五行して、自動修復させて鍛えていく。

ドイツにある実家には倉庫があり、その奥底には五行師の記録と宗主の手記が残っていた。

子供の頃の趣味はその手記を読みあさることだった。懐かしかった、といえばいいのだろうか。ともかく、読んでないページなどないくらいに読みふけた。

しかし、デバイスのフレームに使われる素材は意外と軽いな。

神形具は重要な部分がほとんど金属で作られるから結構重くなる。

明日は月曜だし、出来るだけ仕上げたい。取り敢えず、アリサの得

物優先で。

俺とすずかは直接攻撃の手段があるからいいものの、アリサは風水で二秒ほどロスしている。

魔法で時間稼ぎしている間に風水できたほうがいいという判断からだ。

まあ、すずかは最終的に神形具でも成立するんだけどな。草薙は発動までが短いし。

心地の良いリズムで五行の音が鳴っている。

フレームには、刃をつけることにした。戦う、ということに覚悟を持って欲しいから。

空腹を覚えたので屋敷に戻ることにした。

取りあえずで、ソーセージ、チーズ、葉物、コメでリゾットを作つて適当に済ませようとする。

「あ、それ私の分も」

異常な嗅覚で状況を察知した忍に捕まえられた。

滅多に料理しないから俺の料理はレアなものらしい。不味くはないが旨くもないと思うのだが……。

「私より美味しい時点で嫌味よね、それ」

とのことらしい。すずかは習い事の前に翠屋に遊びに行つてるとか。

人参の葉、大根の葉を細かく切り、ソーセージを薄切りに、オリブオイルを引いた片手鍋にニンニクを入れて香りを付ける。後は適当に米、ソーセージ、葉物、ブイヨンの順に加えて仕上げにチーズを入れるだけだ。

多少時間がかかるが、手軽で簡単なメニューでもある。

「で、忍と恭也は協力しないことにしたんだっただか」

「そうね、態々首を突っ込むこともないかなって。平穩が一番だもの」
「そう、だな」

「お互い脛に傷を持つ者同士、そういうの嫌なのに——どうして手を貸すことにしたの？」

「この道に引き込んでしまったアリサが協力する、と言い出したからな。」

せめて道を造るくらいはしてやらないと、ってところだ」

「そっか。」

まあ、私は精霊石駆動炉を作るので忙しいし、そんなこととしてられないってね。

面倒事は大人と興味本位な若者にやってもらおうということですよ」

「で、見つかったのか？」

「古代ドイツ語ってね、かなり読むの疲れるの……」

「らしいな。読めるから気にしたことないが」

オノレ、と呪詛を吐いているが、古代ドイツ語を読む機会があった人間だぞ、と。

「ああ、倉庫の奥の手記って古代ドイツ語だったんだ。そりゃ読めるわよねー。」

ねえ、アルフレート」

「断る。自分で読め」

「デスヨネー、知ってた。じゃあ、私も作業に戻るわ。頑張つてね」

「おう、お互いにな」

ありふれた日常、こんなものさえ過ごせない人達がいる。

故にこそ、これを望むのだ。

「へえ、ユーノは図書館に引き籠ったんだ」

「いや、その言い方は悪意あるでしょ」

「なにか情報が見つかるといいんだけど……」

ああ、と話に割り込んで

「俺はしばらく手を貸せん。アームドデバイスの部品製作で忙しいからな」

「よろしく、グリフレットのほうが使いやすそうだけど」

「よろしくね、純皇の方が便利そうだけど」

「だよな、明らかに豪皇のほうが便利だよな」

使い慣れてる武器は最高だと思う。

「ま、まあ、魔法の補助とか、バリアジャケットとかのメリットもあるから」

「物理で殴ったほうが強いっておかしいと思うの」

おいなのは、兄貴に謝れよ。

「ともあれ、同じ仮面の二人組には注意することだ」

義務教育とは面倒だ。飛び級したのにまた小学校とかどういこうとかと。

まあ、単位とかを気にする必要がないのはメリットか。

「同じ仮面の二人組？」

「まあ、出てくるとは限らんがな」

そして、帰ってフレームを鍛える。

アリサとすずかはバイオリンの習い事へ向かい。

なのはとフェイトは日本支部に顔を出しに行っているとか。

軽く、正確に、確かな拍詞で鍛えていく。

普段使っている金属よりも強度が低い分五行の力も変化する。

その繊細な作業が面倒くさい。

限界まで鍛え終わって、やっと一本目かと煙草を探す……が、そんなものは置いてなかったと諦め、ハツカトローチを口に放り込んで外に出る。

天体観測機でも揃えておけばよかったんと後悔するが、そこまでしなくても楽しめるほどいい空だ。

さて、飯食って寝るか。

といったところで携帯が鳴る。マナーモードにし忘れていたようだ。作業中に鳴らなくてよかったと胸を下ろす。メールだった。仮面の男にフエイトがやられたらしい。

警告してやったのにやられるとかどうということだ、と呆れそうになったが、それだけではなかった。

管理局の使用しているレベルの防壁を抜いてシステムをダウンさせられたそうだ。

電子戦は得意じゃないからアレだが、そこそこの腕じゃこのシステムは突破できないとか言っていた気がする。それをハッキングしたってことは、身内かあるいは情報戦に長けた人間が相手にいるということになる。

どんどんと面倒事になってきた。神様、あんた実はサイコロの女神様だろ。

自分も神だったと思いついて深い息を吐いた。もう十二月も中旬、吐く息は白くなる。

雪はまだだろうか？ ヨーロッパはクリスマスにはつちやけるからその時期だけでもどるのも良さそうだ。

こんな事件がなければ、学校なんて休んでクリスマスイベントに参加してるところなんだが、ままならんものだ。

アリスの分のフレームと増幅器を提出して取り敢えず仮組みしてもらってみる。

その間昼間は、はやての見舞いだ。

「よし」

「あつ、いらつしやい。毎日悪いね」

「気にするな。……臓器まで進行してるな。発作も数回起きたらう」

「な、なんのことやろ?」

「やれやれ、ここまでとぼけるかこの豆狸。」

「見ればわかる、と言っても信じていないあたりバレてないと思ってるのだろうか?」

「……体温は低め、痙攣の跡がある。さつき発作が起きたばかりだろう?」

「その様子だとナースコールはしなかったようだな。シュークリームでも食つてろ、担当医を呼んでくる」

「あ、でも……皆に心配かけるかもしれへんし」

「ガラスと扉を開けて、」

「既にコイツが心配している。無駄なことはするな」

「俊くん」

「まあ、知ってたけどな。無駄に体張って外に自分の苦しみを出さないというところは」

「お前の分のシュークリームもある。食べておけ。」

「医者を読んだら取り敢えず帰る。出来ることもなさそうだし……ゆつくりと話し合え。話はそれからだ」

「病室から出て、シグナムと鉢合わせた。」

「よつ、丁度良いからついてきてくれ。担当医の場所知らないから」

「ええ、わかりました」

「そう言つて案内してくれる。」

「お友達と一緒にじゃなかったんですか?」

「最近武器製作の仕事が入つてな。切りのいいところで会いに来てるんだ。」

「まあ、後はあの性格だから不意打ちで来ないと意味がないところもあつてな」

「不意打ちのほうがいい?」と疑問を返される。

「今日もだが、希に発作を我慢してナースコールも出さずに凌ぐみた」

いでな。

不意打ちで来て確認しないと隠されるからな」

「心配してくれているのですね」

「世界で二番目に親切な男だからな」

「そこは一番、というのが礼儀なのでは？」

「……昔、一番にこだわって失敗したからな」

「ああ、すみません。悪いことを。っと、ここです」

「気にするな。案内助かった。」

……たまには叱ってやれ。あれは一人で何とかするのに慣れすぎ
ていて頼るといふ言葉を認識しても理解していない。病気が治った
としてもやがて身を滅ぼすだろう」

「肝に銘じておきます。騎士の名にかけて」

ヒラヒラと手を振って、受付に頼んで担当医を呼び出す。

「はい、何かごようですか？」

「はやての知り合いだ。発作が起きたがナースコールを押せなかった
ようなので呼び出しに来た。」

「が、このあと仕事でね。任せて大丈夫か？」

「あ、ありがとうございます！ 医者ですから、任せてください」

「いい返事だ。彼女を頼む」

パタパタと早足で歩いていく女医を見送り、

「さて、道場にでも顔を出すか」

一汗流していくことにした。

「じゃあ、はやてちゃんのお見舞いとクリスマスプレゼントを渡しに行ってくるね」

そう言つて、放課後の帰り際に声をかけてきた。

「おう、ならついでにコレ渡しておいてくれ。クリスマスプレゼントだ」

「水晶？」

「合成ダイヤだ。」

企業が作つてみたいというから材料と資金を提供した。これはその成功例だ」

「ふーん。なんでダイヤ？」

「石言葉でな、不屈という意味がある。病気に負けるなつてことだ」

「……貸一だからね」

「はいはい、よろしく頼む。終わつたらリンデイがデバイスのテストをしたいと言つていたとアリサにも伝えてくれ。俺は直接そちらに向かう」

「一緒に来ないの？」

「阿呆、女ばかりの部屋に男一人は居辛いんだ察しろ。俺は恨みを買う気にはならない」

見送り、多少の荷物を手にリンデイの借りている部屋へと向かう。

そこから局員の手によつて転送してもらう。

そのために一先ず局員に会いに来た。話は通つているのだろうか？

「……よう、邪魔するぞ。アームドデバイスのチェックで来た」

「ああ、伺つてます。アースラ行で宜しいですね？」

「頼む」

アースラに転送され、渡されたメモの通りに部屋へと向かう。

「こんにちは、えつと、迷子ですか？」

「実験担当だ。そのアームドデバイスとやらの刀身を作ったのは俺

だ

「し、失礼しました。では、よろしくお願ひします」
「的が用意され、薙刀を渡される。軽く取り回し、重さや重量比を確認する。」

ふむ、多少刃の方が軽いな。

「では、試してみますか」

「観測します」

ア

取り敢えずで百万詞階の遺伝詞で五行してみた。

「ふむ、強度は良し、干渉力は弱めだな。今後の課題だ」

「はい、有難うございました。……リンディ提督からメッセージが届いています」

「読み上げてくれ」

そうやってデバイスを待機状態というものにしてみる。一五センチほどの棒になった。

へえ、便利だな。

「通信障害発生、至急現場に向かわれたし。デバイスは持ち出し可能とする。」

「だそうです。これらを持って行ってください」

「了解した。場所は？」

「海鳴病院だそうです。結界もあつて周囲までしか飛ばせません。急いでください」

「出来るだけ壊さずに持ち帰る」

「はやてが闇の書の所持者だったか。」

と、なると守護騎士の必死さははやてが死ぬかも知れないから、か。
「酷い話だ。救われたい……」

緊急用にあそこには地竜を仕込んである。起動させれば時間稼ぎにはなるだろう。

そして、すずかはともかくアリサは闇の書の守護騎士を知らない。

都合が悪いな。急ごう。

現場付近に飛んで来てみれば結界を張ってあって通信妨害もある。目を凝らせば地竜も飛んでいるし笑えない状況だ。

そして目の前を犬耳はやした男が通り過ぎていった。

「笑えばいいのか、コレ？」

とりあえず急ごう。

結界の中に入り込み、歩法を使ったまま接近する。

上空になのはとフェイトが、アリサとすずかが偽装した二人と戦っている。

赤いのと犬が屋上に倒れており、状況がややこしい。

背後から近づき、二人の出来損ないを五行する。

「なっ」

「ちっ」

「えっ、二人やない？」

「アリサ、デバイス。MAX二百万」

「了解、助かった」

その一言でアリサがナイフをしまつてペンを薙刀に戻し、風水を始めめる。

「させない！」

「邪魔するな！」

猫の二人が此方を止めようとしてくる。

「ア」

「アアア！」

——すずか・草薙／剣術技能・重複発動・草薙・成功！

そこにすずかの草薙と五行の空間攻撃で進路を阻む。

物理事象を起こしたただだから非殺傷設定なんてものは発動しない。

「くっ！ 防いでいる間に蒐集を」

「仕方ない！」

「詞変！ 百五十万の詞階よ！」

ラ、から始まる短い遺伝詞で鵬を生み出し襲いかからせる。

「チッ」

と、バインドだったか。それで鵬を拘束して止める。

右腕が完全に消し飛んでいる。遺伝詞は固まってないが、治してやる必要はないだろう。

「ヴィーター！ ザファイラー！」

ああ……アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

確認するやいなややり遂げた顔をして転移して逃げようとしている。

一人が突っ込んできたということは、最悪一人でも何かするつもりなのだろう。

———すずか・草薙／剣術／腕力技能・重複対抗発動・草薙射撃・成功！

「ア！」

斬撃が奔る。距離があるからこちらの警戒をしているのだろうが、「ガフツ」

肩から袈裟に入り、完全切断とまではいかないが致命傷を与えた。

「アリサ、傷だけ塞げ。人工生命だ、そうそう死なない」

「はいはい。まだまだ続きそうだしその方が良さげね。」

詞変！ 百万の詞階よ！」

本当に傷を塞いだけ。ダメージは抜けていないし、意識も戻らない。

「さて、ほつといたら勝手に持つてくたろう。」

取り敢えずはあっちメインかな。すずか、悪いがお前の分はない」

「あー、草薙に耐えられる刀身ができなかったんだね。頑張る」

「どうしたものか……」

「一先ず距離を取りましょ」

未成熟な体が大人の体になるのを傍目で見つつ、距離を取って二人に合流する。

「何がどうなってこうなった？」

「わたしとアリサちゃんは病室にいたからわからないんだけど」
取り敢えず、急に襲われ、急に囚われ、急に助かったという情けな
い三コンビ。

お前ら、経験値が足りてないぞ。ライダーさん崇めろ

「おい、はやてはどうした」

「俊介か。そのネコの仕業でそっちの女に変わってしまったよ」

「そうか。お前らは、はやての敵か？」

「味方でいたい、とは思っている。」

ついでに言えばそのネコは罰が待っているから殺すわけには行
かない」

意見は平行線。交わることはない。このままなら

「なら、敵だな。月衣^{カグヤ}、月匣^{ゲツコウ}展開」

「結界!」

「より質悪そうだな」

感覚としては空間が閉じた。透析膜のように入れても出れないと
言ったところか。

「で、このまま終わるわけないんだよなあ」

豪皇を肩に担いで、

「俺が俊介の相手するから他のみんなでアツチ頼むわ。」

中身はやてだろ、壊せねえよ」

「わかった、死なないでね」

「努力はする」

はあ、今日は厄日だ。せつかくのイブなのに。

ターキー取り寄せてたのに……。焼ける人間俺だけなのに……。

「もういいのか？」

「待たせたようだな、感謝する」

「女子供を殺すのは趣味じゃないだけだ」

あー、気持ちはわかる。

「野犬、ベルリン大学卒業生、兼小学三年生。アルフレート・M・陽阪」

「ナイトウィザード。中学生、葉山俊介」

「参る」

堅い。武器を破壊することも機動力を削ぐこともできない。

正しくは、^{かた}難いというべきか。

やりにくい、鍛えてはいても生身の肉体とバリアジャケットごときじゃこの攻撃は凌ぎきれない。

既に左腕は骨が砕けている。が、明らかにこちらを狙っていない。

そのせいで、無駄な被弾が増えている。ままならない。

「ソレを守らなかつたら随分とましな戦いになっただろうに」

「馬鹿か貴様、そんなことさせたらはやてに合わす顔がない」

「それもそうか、そういう人間だったな、おまえ」

全く、

「そら、憂さ晴らしには付き合つてやるから今後を考えろ」

ガチリ、と刀と神形具が噛み合う。アームドデバイスはとつくに壊れた。

「今後だど？」

「はやてがああなつて終わり、というわけじゃないだろう。

少なくともそう聞いている。地球が滅びるか、彼女を殺すか、あるいは彼女を救うか、だ。

ウチの上層部のネコの飼い主は殺そうとしていた。それを力尽くで止めてあの様だがな」

「地球が滅びる、と言うのは？」

「文字通りだ。最終的に手段がなくなった場合、この惑星ごと夜天の魔道書を破壊するらしい。

無論、俺たちも巻き添えだがな」

「それで、」

軽く弾かれ、振り抜いたのに合わせて体を一回転させて鏢を合わせる。

「救う、と言うのは？」

「二通りある」

そうやって、腹を蹴って間合いを取る。

「俺の運命と引き換えに彼女を元に戻す。もしくは彼女自身に制御を取らせる。あるいは両方。」

「この三択だ」

「勝率は？」

「一割から七割。結局は彼女が前を向くかどうかだ。それでも」

「それでも、

「それでもなお、彼女を信じ、彼女のことを案じるのなら俺は力を貸そう。葉山俊介」

「……結構、その案に乗ろう。彼女が生きているのならそれに越したことはない」

「一先ずの戦線共闘」

「二人共、逃げて！　なのはの大技が飛んでくる！」

大規模砲撃か。多少相性が悪いな。エネルギー量からして持続型だろうし。

「処理しきれるか？」

「相殺はしきれない」

「残りはこちらで受け持とう」

「全員、こちらの後ろに回れ。叩き落とす」

「庇う、からの『受け太刀』」

「……アアアアアアアアアアアアアアアア!!」

砲撃の初段を五行し、砕く。

「詞変！　百九十万の詞階よ！　ラ」

砕いた遺伝詞をアリサが風水し、レッサーサーペントとして砲撃に突っ込ませて減衰させる。

残りのふざけたエネルギーを俊介が前に出て防ぐ。

「っ！『現象改変』！」

砲撃に飲まれ、容赦なくダメージが襲いかかる。

とはいえ、大分減衰している。予想より被害は少なかった。

「動けるか？」

「ライフが三割も削れた……」

「上出来だ」

あれだけの攻撃でプロテクション無しで耐え切れるとか、流石だ。
「やあ、手伝いに来たよ」

「飛か、助かる。悪いが、治療中のフロントを任せていいか？」

「ああ、男ふたり大怪我だし仕方ないか。了解した。」

『聖銀を核に固定、外鋼に氷結鏡界の蒼氷をコーティング、破壊限界を十倍に設定』

抑揚のない読み上げと共に手に剣が齎される。

「アル、左腕治すわよ」

「犬にでも変えておいてくれ」

「はいはい、詞変！ 百五十万の詞階よ！」

砕けた感覚は治った。この結界の中でしばらくおとなしくしますか。

眺めていても状況は変わらない。暴走が始まるまでに手を打つ必要がある。

胸元をあさり、砕けた剣の柄を取り出す。

思えば、随分と遠回りをしたものだ。

彼女を救えなかった自分に嫌気がさして、力を封じた。

今度こそ、救うのだと。

改めて胸ポケットにしまい、ふうと息を吐く。

行こう、あの日を超えるために。

斬りかかったフェイトが取り込まれた。

「フェイトちゃん！」

「いい加減、目を覚ませバカ娘！」

「お前も、夢の中で眠るといい」

「すずか、悪いな。世話になった」

「アル！ ちょっと！ 嫌だよ！ ねえ！」

意識は微睡んでいく。それでも、今度こそはと……誓ったのだから。

「ねえ、ベルガー。天気もいいしお出かけしましょう?」

確か俺は――

「聴いてるの、ベルガー!」

「元氣そうだな、エリンギウム」

待て、おかしいだろう。彼女は――

「せっかくの晴天だもの、楽しまないと損だわ」

そう言っ手て手を引く彼女に連れられて、伯林の街を歩く。

公園で子供たちを見て、異族が楽しそうに笑っていることに違和感を感じる。

まるで、何か欠けているようで、

「なんだか、つまらなさそうね」

「どうだかな。何かを忘れてる気がしてな」

そう言っ手て、何に戸惑っているのかさえ忘れた。

――アル、遊びに行こう――

その一言が、唯一の気がかりだった。

喫茶店に入って、コーヒーとケーキを食べて、カイザーブルグが壊した伯林大学を見に行っ手て、決心がついた。

「ありがとう、エリンギウム。少しの間だったけど、楽しかったよ」

「行っ手ちゃうの? 外は辛いことだらけよ?」

それでも、

「それでも、前に進むと決めたから」

「そっか、バイバイ。好きだったわ、ベルガー」

風景は一変し、ベルリンの郊外へと変わった。ハイゼルからの手紙が届いた場所だ。

ああ、もう大丈夫だ。だから、

では覚えておいてくれ、

馬鹿な神にも救いはあるということを。

だから武器は“運命”とでも名付けよう

いきなりドアを叩いて現れるものであり、

貴方の手を取り離さぬものであり、

そしていつも貴方の傍らで貴方を信じるものことだ

ゲレーゲンハイト
運 命の駕発動。ただ一度だけ可能な行使。

だが、それでもいい。自分にこの先がなくとも、道を作ることはできるのだから。

切り離していた神としての力を得て苦笑し、強制的に外にはじき出される。

だが、その前に

「悲劇のヒロインは終わりだ。陽気に笑え、八神はやて。

周りのことを気にするのが君の趣味だっただろう。たまには周りに迷惑もかけるといい」

その掛詞だけを夢に残して。

そして、現実に回帰する。

「よっ、どのくらい取り込まれてた?」

「二十分くらいだ」

「そうか。夢は晴らしてきた。あとは彼女次第だ」

「アル! 今からでも遅くないから、それを切り離して! じやないと……」

「いいんだ、すずか。月村すずか。これが俺の選択だ」

「そんな、そんなことって……」

消費流体量が増えているのが実感できる。

この大気量では足りないというのがよくわかる。

この騒動が終わったら——いや、どうでもいいか。

「今はあれの処理が先決だ。それが終わってからでも遅くはないさ」
多分、間に合わないけど。

はやてとフェイトが遅れて分離する。

「リインフォース、セエツトアップ!」

さて、これから始まりで、ここから終わる。

再会を祝しているところ悪いが、生憎と時間がない。

「水を差して悪いが時間がない。」

時空管理局執務官、クロノ・ハラウオンだ。

時間がないので簡潔に説明する。あそこの黒い淀み、闇の書の防衛

プログラムがあと数分で暴走する。僕らはそれを何らかの方法で止めないといけない。

停止のプランは現在二つある。一つ、極めて強力な氷結魔法で凍結させる。二つ、衛星軌道上のアースラに搭載されている魔力砲、アルカンシエルで破壊する。これら以外にプランはあるか?」

「暴走プログラムの本体のサイズは?」

「子供の頭一つ分の大きさのコアです」

飛が基本的な質問をする。

「コアだけ転移させてそこをアルカンシエルで砲撃するのは?」

へいけるよ、どんな射角だろうと砲撃はできる」

「じゃ、そのように。転移の手伝いならできるから」

「こちらは物理破壊の準備だな」

「お、おい君たち!」

「他に手段を選んでられない事情が有つてな。悪いがそのプランで頼む」

「アルフレート?」

「葉山俊介、結界の改変を。力有るものだけ切り離せるか?」

「簡単だ。月匣展開」

「あ、皆傷ついてるやん……シヤマル」

「はい、クラールヴィント。『静かなる風よ、癒しの恵みを運んで』」

骨折が治ったか。

「湖の騎士」シヤマル」と風のリング」クラールヴィント」癒やしと補助が専門です」

では、

「始めよう。オーダーは救済だ」

「チエーンバインド!」

「ストラグルバインド!」

「縛れ、鋼の軛!」

「ア」

まずはバインド系と五行で道を造る。

「行け、脳筋ども!」

「行くぜ、合わせろよ、高町なのは」

「ヴィータちゃんこそ」

「いくぞ、テストロツサ」

「はい、シグナム」

ポンとすずかの頭を叩いて、

「良かったんだよ、これで」

震える声でそう告げた。

息が乱れるのを必死で堪える。

二層砕いた。

復活した外殻を再び破壊する。

まだだ

——すずか・草薙／剣術技能・対抗重複発動・草薙射撃・大成功！

足が崩れそうになる。必死にこらえた。

四層全部破壊した。攻撃される前にと襲いかかる外殻を草薙が薙

ぎはらった。

まだだ

「永久に遠き勝利の剣！」

「彼方より来たれ宿木の枝、銀月の槍となりて撃ち貫け！

石化の槍——ミストルティーン！」

「まだっ！ デュランダル！」

『eternal coffin』

はやてが石化させ、クロノが凍らせて外装を剥ぐ。

まだだ

「スターライト」

「雷光一閃プラズマザンバー」

「ごめんな、おやすみな——響け終焉の笛、ラグナロク」

「「ブレーカー!!」」

砕く潰す、砕け散る

「本体コア露出——捕まえた！」

「長距離転送」

「術式展開」

「目標、衛生軌道上！」
まだだ

一瞬、意識が途切れた。アリサがとんでもない顔をしている。すずかにもバレた。

外の連中には気づかれていない。特に、はやてには見られなくなかった。

足場が不安定になる。1分か2分か、或いはもっと短かったのか、それすらも分からないが

へやったよ皆、無事破壊できた。後は復活しないか監視しておくから。皆お疲れ様

はやてが緊張と疲労で倒れた。

もう、大丈夫だろう。俺の仕事も終わりだ。

「あんた、大丈夫なの!?! さつきから死にそうな顔してるじゃない!!」

「嘘でしょ、アル! ちょっと! ねえ!」

「お疲れさん、すまないが、後は任せた。」

忍に謝っておいてくれ。悪いな、迷惑かける」

崩れ落ち、海へと落下した。

31 Shinobu

「お姉ちゃん、アルが!」

朝に帰ってくるなり宙に固定したアルを連れて泣きながら縋ってきた。

どうやら厄介事らしい。

管理局の旗艦で状態を確認し、本局でも確認したところリンカーコアなる部位の縮小以外問題点はないらしい。すぐに目を覚ましますよ、なんて言われたのに半日経っても目を覚まさないとか。

(そりゃ起きないわよ、こんな死にかけの状態なんだから)

死にかけて人間を見たことがないのか、感受性が高いアリサちゃんですら気づいていない。

すずかはおもひかして、位には考えているだろう。

どうせ同期できないモノでも入れて暴走させたのだろう。

手荷物の中に”運命”の柄がなかった。解析に回されていないのなら、原因はそれだ。

睡眠不足だったのか、すずかもアリサちゃんも今は眠っている。

必要なのは遺伝詞交換だろう。とはいえ、アリサの年齢じゃそれをこなすのも困難か。

「ふむ、確か電話番号は……」

「おはよう、お姉ちゃん——あれ、アルは?」

「治療の一環で管理局に預けることにした。延命の生体ポッドが必要だろうから」

「そんなに重症なの?」

「重症つちや重症ね」

取り敢えず、朝食でも食べていらっしやいと言って追い返す。

へすみません、こちらの事情でアル君を……」

「いいのいいの、彼が決めたのなら止める権利は誰にもないから。」

それと、今の彼、状態としてはリンカーコアだっけ、そのある一

一般人と同じでしょ？」

「へはい。メデイカルチェックをした結果、リンカーコアが縮小しています」

まあ、あんな大容量な中身を入れた反動だろう。

「そんなもので済んで良かったわ。下手したら消滅してるところだし。」

「だけど、紋章師のアテもなくなったし、研究も一時頓挫かな。最短でも六年は間が空くし」

「六年、ですか？」

「アリサちゃんに遺伝詞交換して均等化イコライザか風水すれば治るわよ。」

問題は、それをするには年齢がねー。小学生に寝たきりの男を犯せとか言えないでしょ」

「うっ、うわあ」

「もつと言えばアルの方もまだ勃たないだろうし、早くて三年よね」
「へはい、終了！ この話題終了！ フェイトちゃんに聞こえたらどうするの!？」

「聞こえたら……頑張ってるって応援するけど？」

「何をー」

「ナニを」

ウガー！ と本格的にキレ始めたのでそこで話題を終わらせる。

「ところで、はやてちゃんはどう？」

「本当に唐突ですね、まあ、ただの疲労で倒れてただけなんで。」

問題は違法行為の裁判ですね。いくら知らなかったとはいえお咎めなしというわけにも」

「まあ、当然よね。保護者が責任を取るのよ。」

あ、はやてちゃんには言わないでね？ 多分、気に病むから」

「言えませんが、自分を救った男の子の一人が吸血鬼になって死にかけてる、なんて」

パタパタと部屋から遠ざかる音がした。

聞かれちゃったか。まあ、遅かれ早かれ知る事になるでしょうし、いつか。

「あの、何かあったんですか？」

「ああ、気にしないで。さすがにバレただけだから」

「それ、拙くありません？」

「言えないでしょうし、言いたくもないでしょ。」

友達に、あなたのせいで彼が死にかけてる、だなんて」

「それがまずいんじゃないかって……」

「まあ、其の辺は後で話し合っておくから。私も大学があるし、そろそろ」

「ああ、ああ、はい。頑張ってくださいね」

「さーて、どこから話したものかなー？」

閑話

32

微睡む。ここではない、かつて機甲都市ガンツァーポリスと呼ばれた場所。

嘗ての記憶、願い、思い、そして、罪悪感。

ユラユラと揺れる水面のように、かつての生涯を自分の視点で自分以外が見ているような感覚。

自分が生きている間に都市世界が崩壊することはなかったが、すべての文明に滅びがあるように、都市理力と呼ばれる力を持った都市世界も崩壊した。

原因は、流体量の急激な減少。理由はよくわからないがこの事象のせいで崩壊したらしい。

女の話をしよう

映像が塗り替わる。永遠と見ていた同じ光景から、誰か別の記憶へと。

生まれた時に、男じゃないと落胆された。

会社を継ぐのは男だと、親戚一同はそう信じてやまなかったらしい。

気に入らないから、実力をつけた。古武術、バイオリン、学習塾、ピアノ……。

それでも、女は男の付属品だと、政略結婚させるためにと薄らと自分の欲を満たそうとする顔を見て、ああ、こいつらはダメだと気づいてしまった。

ああ無情、誰も少女の嘆きに気づかない

幼稚園の間に、同年代が越えられないような成果を残した。

余計に柵に囚われるとも知らず。小学生になる前から、政略結婚の

申し出が湧くようになった。

そこで思い知ったのだ、人間とは斯も欲深い生き物だと、醜い生き物なのだ。

擦り寄ってくるのは醜い大人だけ

小学生の時、憂さ晴らしに紫髪の少女のカチューシャを奪った。

ドつき合いの喧嘩になったけど、あの視線に比べればマシだった。

なるほど、アリサの記憶か。

あの日、仲裁に入った俺となのはもそこそこ攻撃を食らったが、心の痛みに比べればマシだったのか。

大人になんてなりたくなかった、あの日までは

私は、あの子に■をした。

彼の全てに見h見るなバカ!!

視界が晴れるとともに、意識が遠のく。

「うっ」

目が覚めた。体が重い。頭も痛いし気分も悪い。

少しのどが渴く。視界の中に薄らと線が見える
起き上がろうとして、動けなかった。

筋肉が動かなかったわけじゃない。上に予想以上の重みを感じたからだ。

頭だけを動かして状況を把握する。

見覚えのないどこかで見たような

金髪のままなく蕾が開くような少女が体の上で寝ていた。

上からシーツをかけられているが、互いに裸。

あれ、俺何してたんだっけ？

「どうやら記憶も曖昧だ。なぜか眠気が来ない。外は夜だというのに。」

力を入れて、女を起こさぬように気を遣いつつ布団の外へと出る。

ああ、いい夜だ。

自分の着替えをして、少し丈が厳しい服を着て、屋敷を彷徨いてから家の外に出る。

「お寝坊さん、ようやく起きた？」

やっと見覚えのある人物と出会えた。

「恭也と忍か。お寝坊、つてどういうことだ？」

六年よ、六年。あなたが寝ていた時間。

そう言われても、ピンと来なかった。

「今は、平成——年の三月よ。先日中学校の卒業式が終わったわ」

本当に、どうやら本当に随分と眠っていたらしい。悪い冗談なら良かったんだが。

「なんでこうなったか覚えてる？」

「——いや、記憶にないな」

そっか、と言いつつワインを飲んで、

「運命の駕発動をして、一時体に神の力を入れた反動でぶっ倒れたんだとよ。」

よくもまあそんな無茶をしたな」

あー、そんな馬鹿なことしたのか。

「なるほどな、生命力の枯渇か」

「そうよ。診断したのは私、直したのは今年で十五歳になったアリサちゃん。」

後で礼を言っておきなさい。ついでに責任もとってあげると男らしいわよ？」

聞きたくないセリフが聞こえた。

「遺伝詞交換で放出量の増えたのを吸血鬼の血とアリサちゃんの遺伝詞で調律したから多少は頑丈になってるけど、その分代償は大きいから」

ああ、のどが渇くのはそういう……

「事情はわかった。いろいろ迷惑をかけたようだな」

「ほんとよ。管理局に預けてたら盗まれそうになっちゃうし、仕方がないから家で管理してたら二年間は毎日はやてちゃんとアリサちゃんに通ってくるし」

うわっ、重たいぞ？

「ああ、ついでだからこれを彫り込んでおいて。ファリンの分だから」
流体の紋章語と精霊石駆動炉だった。

「完成したのか、すごいな」

「去年にマルドリツクの倉庫に入らせてもらえたから」

両親も、なんだかんだでいい方向に進んだようだ。

「ノエルの分は？」

「俺が彫った。けど、綺麗じゃなくて何度も彫り直したから……」

「了解。腕が鈍ってなければいいんだがな」

机の上の鑿と鋸で紋章を彫っていく。

定期的にマッサージしていたのか、体は意外と動いた。

「こんなものか」

「寝起きの人間にも器用さで負けるのか……」

「阿呆、角度と深ささえ間違えなければいいんだから速さはいららないんだよ」

「恭也よりかなり遅いけど丁寧な仕上がりにね。」

石に彫ってあったのを工房で見るときは愕然としたわよ」

「まあ、ちゃんと固定してればあのサイズでも彫れる。パウ博士は置いてある石にだって彫ってたらしいがな」

「よしよし、これでファリンの方も自動化できるわね。」

あ、そうそう。私たち結婚したから」

「気づいてる。部屋が変わってたからな」

驚いてよーと文句を言われるが、そこまででもない。

意識があつた頃からハネムーンの計画を立ててた人間のセリフじゃない。

「後さ、俺の上で寝てた女誰？」

「自分で確かめなさい」

そう言われるとその通りとしか言えないのだが……。

「あー、面倒事が増えた」

「あはは、頑張りなさい」

取り敢えず、落ちた筋肉を取り戻さないとな。

「昨日で最後の仕事も終わった事だし、心残りもなくなった。来週から仕事はドイツだな」

「すまんな、卒業したらすぐ行くつもりだったんだろ？」

「だけどもあ、いろいろ貴重な体験できたし。」

人の縁は不思議なものよ。あ、世帯主はすずかになつてるから。家主は母のままだけど」

「ふむ、了解した。……もう朝か」

「私たちは今日の便でドイツ行だから、動力の組み換えはすずかの宿題にしようかしら？」

管理局のデバイス管理のアルバイトしているらしいし」

「ふーん。じゃあ、この家、最終的に潰すのか？」

「いや、休暇とかで帰ってくる場所がなくなるのも困るからノエルに管理してもらうことになつてる」

「そっか、ファリンの組み換えが終わったらノエルとファリンで管理するのか」

「そうなるわね。ああ、すずかは本局でしばらく仕事つて言つてたから、しばらくはこの家でトレーニングでもして体を作り直しなさい」

「そうする。あ、ちよつと待ってる。工房にプレゼント隠してたから」
「プレゼント？」

そう言つて、三人で工房に入る。随分と金属臭が薄れている。長い間使つてなかったらこんなものか。

「ここの金庫に裏番号を入れてつと」

「なにそれ、聞いてない」

裏番号のギミックはずつと内緒にしてたからな。

金庫自体も自作だ。

「そら、持っていけ。要らなくとも売れば多少の資金にはなるだろう」
「ダイヤモンドカッター……と設計図？」

「こつちはアクセサリーか。アメジスト？」

「中学校に入る頃に結婚するだろうと細々と溜めてあったんだ」

「ありがとう、大切にするわ」

「感謝する」

おう、と言つて笑つた。顔がなかなか動かなかつた。

「さーて、これをノエルに預けたら出ましようか」

「ああ、十時の便だしな」

「Gute Reise」

「……ダンケ」

笑いながら出て行つた二人を運ぶノエルの三人を見送り、屋敷を見て回ることにした。

俺の部屋のとりの空き部屋は、生体ポッドの固定地になつていた。

忍の部屋は内装はふたり分に、他は空っぽになつていた。

すずかの部屋は綺麗だが、それは使つてないがゆえの綺麗であつて。

ほかのメイドが動き出す前に調理場に入つて適当に朝を二人前作つた。

自分の部屋に入り、机の上に一人前を置いておいて、工房へと向かう。

作業場は随分と埃がたまつていた。一度掃除しないと使えないだろう。

朝食を中庭で取り、起きてきた古参のメイドに怒られ、食後の皿を

返した。

朝一で掃除を始め、昼前まで作業を続けた。

「さて、昼はどうしようか」

街に出て、久々に散策するのも面白そうだし、ここで新人メイドを困らせるのも面白そうだ。

ギィと音がして、工房に人が入ってきた。

「あんた、何してんのよ」

「……えつと？」

「ああ、そつか。六年も経ってたら判らないか。アリサよ、アリサ・バニングス」

幼くて平坦だった体は肉がついて大人びている。

「どうか、俺の上で寝てた女じゃん……。え、じゃああれ遺伝詞交換の後か？」

「あー、見違えたな。随分と成長してるじゃないか」

「ほんとよ、どんだけ眠ってるつもりだったの？」

「さて、な。下手をすれば死ぬかもしれないなかつた、位の認識か」

「バカ、本当に馬鹿あ、うっうわああああああん」

やれやれ、泣き出してしまった。

泣く子と女には勝てないと言うらしいが、これは地雷原のようなものだ。踏んだら終わり。

結局泣きやむまで傍にいたことになった。

自分の蒔いた種とは言え、面倒なことになった。

泣き止んだ第一声が、「責任とってね」である。頭が痛い。次に言つたセリフも頭を抱えたくなくなった。これは口にも出したくない。とうか、そんな状況になりたくない。

ともあれ、大きな貸しを作ってしまったらしい。

やれやれ、と思いつつ話を聞いていく。

あの後、無限修復の機能が切り離せなかったリインフォースと名付けられた夜天の魔道書の端末が消滅したりなのはが大怪我したりと面倒事がいろいろあったらしい。

一番大きな面倒事は俺の体が盗まれかけた、という辺りか。クロー

ン研究にも手を出してる広域系犯罪者がDNAを盗もうとして管理局とドンパチしたんだそうだ。

「はあ、面倒なことになってたんだな」

「他人事ね、あんたの体の話よ？」

「自分の意志が関与していない以上他人事だからな」

だから出来るだけ面倒なことには関わりたくない、と告げる。

「取り敢えず、あんたのデバイスの試作品が来てるわよ。私の分はまだ完成してないけど」

ああ、データを取り直したやつか。

「了解した。リハビリもしないといけないしな」

「リハビリは管理局の勝手際ってことでハラウオン提督の名目で使つて良いそうよ」

「それは助かる。あ、そうだ。均等化イコライザしたのか？」

「……忍のライブ以外は」

また頭が痛くなる案件が沸いた。

「……先に告げておこう。君は、随分と長生きすることになる」

「えっ、と？」

「欠片とは言え神の力を体に取り込んだんだ。傷は人以上に早く癒えるし、寿命も人より長くなる。」

オリジナルの神の力だと奇跡を起こせるくらいだしな。ともかく、かなりの高齢になることは覚悟しておけ」

それこそ、周りの子供を置いていくくらいには。

「な、何歳くらい？」

「二百は堅いだろう」

「にひゃっ!?!」

何も聞かずに均等化したのか。忍はあえて言わなかったな？

「そういうことだ。誰かに話してもいいし、胸の奥にしまっておいてもいい。」

取り敢えず、エイミイのところへ行くぞ。先に話をつけておきた
い」

とんでもないことしちゃった？ みたいな顔をしたアリサを連れ

て、歩いて街を散策しながら向かった。

ピンポーンとチャイムを鳴らす。

「どちら様ですかー?」

間抜けなエイミーの声だ。睡眠不足も混じっている。子育ての影響か。

「I a n g e Z e i t」

「は、え? あつと……ひ、人違いじゃないでしょうか?」

「M e i n N a m e i s t A l f r e d」

「アル、フレート?」

えっ……アル君!?!」

バタン、ビタン、ガタガタ

「なんだこの音」

「いや、アポなしで来たらこうなるでしょうよ」
態とだがな。

「い、いらつしやい。それとお久しぶり」

「やつほー、ついでに来たわよ」

「アリサちゃんいるなら電話で連絡くらいしてよ、機密文書の閲覧中
だったんだから」

「アルが体力落ちてて何時着くかわからなかったし」

「せめて連絡して後日来てよ……。まあいいや、どうぞ」

ブーたれながらも家に上げてくれた。

赤ん坊はすやすやと眠っている。

「さて、マジで久しぶりらしいな。生憎と実感はないが」

「そうよねー、六年も眠ってちゃねー」

あ、学力とか大丈夫? 管理局の学校通う?」

「はっはっは、ベルリン大学飛び級卒業の経歴はある」

「なんで小学校なんて通ってたの?」

「日本語がわからないから」

あららー、なんて言って笑っている。

「ともあれ、事件では大変お世話になりました。

リンディ提督からリハビリに協力するよう言われてるけど、どうする？」

「お義母様じゃないの？」

「まだ違うの」

からかわれてるし。

「トレーニング施設の利用許可とりハビリの援助を頼む。

本来ならあと二時間早くこれたはずなんだが、流石に落ちた体力まではな」

「それもそっか。了解。なのはちゃんが通ってたところでいい？」

「あのバカ入院でもしたのか？」

思わず呆れてしまう。

「……怪我したのよ。ご挨拶に私が忍とドイツへ行ってる間に」

「おかげで手術のほうが先になっちゃって。風水治療だっけ、それができなくてさー」

ふーん、と言いつつペットのお茶を飲む。

「ああ、それと。アリサちゃん、魔導師試験どうする？」

「受けてもいいんだけど、実家がうるさくてね。会社の社長夫人にしたいらしくて」

ニヤリと笑う気配がした。

「駆け落ちでもする？」

ネコのような悪い顔でニヤニヤしながら聞いてくる。

「ああ、それもいいかもしれませんが」

「……反応してよ」

逆にいじけた。いい大人が何してるんだか。

「数えて二十歳を超えた黒尽くめはどうした」

「クロノくんなら今日はアースラの点検日だから艦長として報告をね」

えらく出世してるな。顔に出てたのか、

「プレシア事件、闇の書事件の功績者だからね。グレアム提督からも推薦状が出てたくらいだし」

「なるほどな。ほどほどに出世する位がちょうどいいぞ。

権力を盾に雁字搦めに囚われるちよつと手前あたりが上々だ」

「さて、リハビリの登録はしておきました。

来週から通えるから……月曜日だね、そこから通っても大丈夫だから」

「助かるよ。ついでにデバイスの試作品がどうかいうのは？」

「あー、開発頓挫しちゃってね。どうしても強度が伸びないらしくて。

結局はブーストデバイスを持ってもらって、あとは神形具を登録する感じかな」

「え、私の方も？」

「すずかちゃん、アリサちゃん、アル君の分全部。

開発プロジェクトを凍結することになったのよ。予算がもつたいないからって」

特化型を作るより汎用型を作って汎用性の高い人間を育てたほうが組織は層ができる。

特化型が必要になるのは大きなプロジェクトで主軸になれるからだ。

「まあ、強度実験のいいサンプルになっただろうさ」

「らしいよ、耐久値の上昇プロジェクトは大きく推進したって」

なるほどなー、と言いつつハンドサインを出す。アリサも席を立った。

「えっえっえっ？」

「察しろ。この後リンディに挨拶しに行くんだぞ？」

面倒な連中に出くわした後逃げるために時間を余分に取っておくんだ」

「あー、修羅場なのかあ」

大きくため息をついた。

「知っているか、俺は世界で二番目に面倒臭がりなんだ」

「その心は」

「もう帰りたい」

ゴスつと蹴られて仕方なく本局の中を歩く。

会議が終わったあとらしく、多少遅れても大丈夫とのこと。

こちらの筋力が落ちているのを加味しているのかもしれない。

足が痛みを発しながら訴えてくるのを無視して扉まで歩いてドアをノックする。

「どうぞー」

間抜けした声だ。

「失礼する。久しぶりらしいな、リンディ」

「再び立ってる姿が見えて何よりだわ。」

元気そう、ではなさそうね。とりあえず座ってください」

そこからはただの世間話をして、裏側からの聞かせてもらっていい範囲の粗方の情報も聞く。

はやたと守護騎士は奉仕期間中で、俊介は闇の書の行動阻害をよしとされ敵対とは取られなかったとか。

フェイトと飛は奉仕期間を終えて、フェイトは執務官試験に向けて動いて、飛は同性の教導官としてなのはと切磋琢磨しているとかなんとか。

「なるほどな。各々元気そうだなによりだ」

「若干何名かあなたが倒れてから大変だったのよ？」

「知らん。自分のとった行動の責任は自分にしかない。気に病むのは

心の贅肉だ」

「誰もがそう割り切れるわけじゃないってこと。覚えておきなさい」

「思春期は大変だな。が、重大な意見だ、覚えておこう」

「そうしてくださいな。後は……他の皆さんに会って行きますか？」

ふむ、

「いや、やめておこう。体力が持たん」

「そうですか、ではお大事に」

「世話になる」

「いえいえ、無事に帰れるといいですね」

不吉なことを言われたが、特に何かあるわけではなかった。
すれ違いもしなかったし、忙しかったのだろう。

トレーニングルームに入ると同年代くらいの人間が案内してくれた。

特に事情を聴いていなかったのか、たいそう驚かれた。六年も眠ってりやそうか。

「えっと、体の方はどのくらい動きますか？」

「寝ている間にストレッチとかマッサージしてくれていたみたいだな、動くには動く、くらいだ」

「そうですか、じゃあ軽いメニューの筋トレとランニングからですね」
魔力スキャンとかいう装置で体の状態を確認された。

リンカーコアはともかく、ほかはまるっきりの不健康者だ。知っていた。

「それじゃあ、ちよつとずつ始めていきましようか」

筋トレしながら話しかけてくれる内容の中に、エースオブエースが来たことがある、というものがあつた。あいつそんな大げさな人間になつてたんだな、と思いつつ話を聞いていく。

「ところで、リアクションが薄いんですけど、知ってたんですか？」

「小学校の頃のあいつ知ってるからな、大して驚けない」

「幼馴染だったんですね」

そうだな、三人の無茶にはきんぎん巻き込まれたな。

「ついでに言えば、なのはには十戦十勝だったかな。何でもアリで」

「お強かつたんですね」

「これ証拠の写真な」

後ろから首を踵が仕留めている写真だった。アリサが見せてくれた当時の写真のコピーだ。

「……うわっ、合成じゃなくて？」

「合成にしても誰かを背後から仕留めていることには変わらんだろうに」

「それもそうですね。格闘技とかを？」

「少しな」

チエストプレスを終えて大きく息を吐く。

次はアブドミナルクランチだ。

四十kgしか動かせない、というあたり随分と筋力が落ちてる。

ランニングは20分しか走り続けられなかった。

「随分と体力が落ちてらっしゃいますね。どのくらいの頻度で通われますか？」

「一日おきで頼む。流石にこのままというのもまずい」

「確認しました。では、今日はここまでです。ストレッチを忘れずに」
「おう」

フリーコーナーでストレッチをする。可動域の限界あたりは随分と固まっていた。

体をほぐしたついでに逆立ちを試してみる、体幹も鈍っていることがわかった。

「はあ、前途多難だな」

なんか見覚えのあるピンクのポニーが教導している。

「あっちの武器振ってるの下手くそだなあ。体幹ぶれてんじゃねえか」

俊介からは復帰祝いにメガネを送られている。

意識しなければ変な線は見えないのだが、念の為にかけている。

「あー、あっちのは見所ありそうだな」

帰る前にダウンのついでに歩いていたのだが、暇つぶしに教導を見ることがしたのだった。

基礎訓練なのか、走ったり格闘術を習ったりと基本的なことしかしてないが、そこで差が出る。

才能は入るときの差でしかないが、劣等感は一生涯ついてくる病だ。

「あんた、目がいいのな。なにかしてたのか？」

職員の制服を着た青年に尋ねられた。

「怪我で意識不明になるまでは格闘技とか剣術を教える立場だったな」

「やるじゃんか、そんなに若いのに。武装局員にでもなるか？」
「とりあえずリハビリが先だな。随分と長いあいだ動いてないせいで全身が筋肉痛だ」

大変だな、頑張れよ。と言われて彼とは別れた。

こつちに向かつて意識を向け、突進してくる気配を感じたので歩法を使つて雑踏に紛れる。

「え？ うそ、さっきまでおつたような……おい、アールー」

はやてだった。面倒事になる前にそこから離れる。

20分しか走れないが、それだけあれば逃げるには十分だ。

許可敷地に入つて、地球へと帰る。

その間際、こちらをなのはに目撃された。

「ん？」

「げっ」

転移は始まつていたのでそれはそこまでだったのだが、サングラスもしていたしバレてないと思うのだがどうだろうか？

とはいえ、アリサ以外は多忙の身。そこまで気を使う必要はないだろう。

翌週――

「こんにちは、お久しぶりです」

「お久しぶりです、なのはさん。体調でも崩されましたか？」

どうやら情報を集めてきたらしい。幸いにして、これから俺は酸素カプセルだ。

「いえ、友達が来てるかもつて情報が入ってきたので」

ギープシュツ。

都合がいいことにバレることなくカプセルが閉じた。

ついでに言えばカプセルは使用者の姿が確認できないタイプだ。

「はい、アルフレートさん終わりましたよ。ついでにお客様です」

「やつほー、元気そうで良かった」

「ヤッホーじゃねえよ。トレーニングしながらでいいか？」

「ああうん。そこまで治ってるんだ」

ほほ健全者だ、と答える。

逆立ちしてそのまま肘を曲げ伸ばしする。体幹と腕の自重トレーニングだ。

「よくそんなのできるね」

「近接武術の範囲だと基本のレベルの一つだ。

これができないと背後からの不意打ちを躲せないことも、希にあるからな」

背後からの攻撃を避けるのは反応能力と体幹の高さを必要とする。

「みんなに内緒で来てるってことはバレたくないの？」

「こんな無様な姿なんて見せれる訳無いだろう。」

少なくとも、現役レベルに復帰してからだ」

戦闘狂が何人かいるからな、と言うと、あー、と困ったふうに笑われる。

赤とかピンクとか青い犬とかだ。

「だいぶ落ち着いてきてるんだけどね」

「どうだかな。少なくとも、俺の納得いくところまでは鍛え直したい」

トン、と腕を二気伸ばして空中に跳ね、足で着地する。

「お兄ちゃんのリハビリ見てるみたい」

苦笑されるが、

「ああ、メニュー組んだのは俺だ。忍経由で依頼が来たからな」

「えっ!？」

「年齢の割に仲が良すぎるとは思わなかったのか、高町なのは」

「……そういえば」

せめて目上として扱え位の注意しかしてなかったような、と呟いた。

「ふむ、ようやく四割か。恭也の時に知ってはいたが長いものだな」

「まるで肉体の限界に挑戦してるみたいだね。あ、さすがちゃんが今日暇だって」

「会いたくない理由がある。面倒事は御免だ」

「酸素カプセルに入ってるって言っちゃった♡」

「なるほど、状況は理解した。くたばれ、なのは」

すれ違いざまに”後ろから”頸動脈を抑えて意識を奪った。

「さて、なのは囷を餌にして逃げるか」

トレーニングルームから出たらドタバタと足音が聞こえてきた。なのはを地面に横たえて距離をとり、助走の間合いにする。

「アル！」

「アルフレートテメエ水臭えぞー！」

「アル君！」

すずか、ヴィータ、はやてが入口に殺到してきた。

「なのは!?!」

「なのはちゃん!?!」

ヴィータとはやての意識がそちらに向いたのを確認し、歩法で壁走をしてトンズラする。

「しまった、トラップ!?!」

すずかよ、正解だが判断が遅い。

タタンと軽い足音だけ残してそこから撤退した。

転移装置は今頃残りのヴォルケンリッターが待機していることだろう。

と、なると、だ。

——ドッグ

「クロノ、お客さんだつて」

「誰だ、ヴェロツサ」

「アルフレートだつて。こんな人、知り合い?」

「ああ、闇の書事件の関係者の一人だ。最近まで意識がなかったんだがな」

「入っていいってさ」

「よっ、背伸びたな。コンプレックスは治ったか?」

「お陰様でな。仕事で忙しくなったらいろいろ気になっている暇がなく

なっただ」

「そりゃ結構。そっちのワケアリの男は？」

「初めて会った人には軽薄そうって言われるんだけどね、そうは思わないのかい？」

「そいつらは人間観察が下手なだけだ。大方幼少期に面倒事があつたとかだろうか？」

「こんな奴だ。人の思考を読むのはうまいし、頭も悪くない」

「そのようだ。それで、今日は挨拶かい？」

「ついでに逃走中だ。はやてとすずかからな」

手元を動かそうとした緑髪に、

「そこまでだ。少なくとも挨拶くらいさせてくれ」

「えー」

「勘弁してやれ。六年も眠っていたんだ。」

本人と周りとのギャップが耐えれないんだろうさ」

「なるほど、それなら仕方ない。」

今回ははやてを見捨てることにしよう。恋愛はフェアじゃないとね」

「一先ず、提督就任おめでとう。これプレゼントな」

「ありがたい。蜂蜜？」

「無添加の高級品だ。長期保存できるし栄養価も高い。」

長期の任務の時にでも取っておくといい。喉にもいいけどな」

「で、なんで三瓶？」

「エイミイにでもくれてやれ。妊娠中は食事の調節が大変らしいからな」

「お気遣い真面目に助かるが、余計なお世話だ」

「一本はそっちの兄さんも持っていけ。睡眠不足が目元に出てるぞ」

「……気づいてた？」

「……若干テンションが低いくらいなら」

有り難くもらっておく、と言って瓶を受け取った。

「さて、どのくらい感覚は戻ってきた？」

「四割が精々だな。身長も変わってるから感覚をつかみなおすのが大

変だ」

「そんなに変わってない気もするが……」

「四センチ伸びてた。重心の位置が変わって転けそうになる」

お互いに大変だな、と言って笑われる。

「さて、この後会議なんだ。この後はどうする？」

「ここから転移して帰る」

「あっはっは、大胆だね。よし、男の友情だ、はやてには黙っておこう」

「じゃあ、仕事頑張ってくれ」

そう言つて、転移していった。

「隙とかなかったよね？」

「いや、あれでも十分に能力落ちてるぞ。六年前は身体能力だけで

フェイトと戦えてたらしいからな」

「いやはや、おっかない御仁だ」

「同感だ。よし、行こうか」

「あはっ、起きた」

寝室にすずかの声が響いた。もうやだ、逃げたい。体を動かそうとするが、手足をバインドで拘束されている。

「うふふ、なんで逃げたの？」

「面倒事が起きる気がしたからだ。案の定今面倒事が起きている」
どうしてこう、人生は面倒事ばかりなのか。

「うふふふ、取り敢えず——後の話は体に聞いてからね？」

「はっ!？」

夢か、なんて心臓に悪い夢なんだ。

「俺は世界で二番目に健康でいたいんだ……」

工房に朝の空気を入れて、食堂に向かう。

俺の分の朝食を昨日のうちに作ってあるのでそれを食い、工房に戻る。

アリサと均等化したせい、自分の詞階が増えていた。

とはいえ、豪皇は今の自分よりもさらに高い詞階で鍛えられているため手を出せない。

代わりにアリサの分の神形具を鍛え直すことになった。

ブーストデバイスを受け取るので刃を入れて欲しい、とのことだ。

神鉄の刀身を自信を持って叩いていく。

五時間ほどで刃をつける事に成功した。

朝食を取るために食堂に向かうため、工房から出ようとした、

——すずか・サブット脚術／ジムナテック体術技能・発動・回し蹴り・アウト失敗。

蹴り足を回す前に指で引っ掛けて留める。

「ふむ」

「おはよう、アル。昨日はご挨拶だったね」

ギリギリと、力の競り合いが始まる。

「昨日、か。昨日はクロノに挨拶しに行っただくらいのはずだが」

「……なのはちゃんと楽しそうにお話してたよね？」

「ああ、途中まではな」

「え？」

「ア」

自分と同じ姿を空中に投影する。

「この通り、多少の融通が利くようになったのでな」

「つまり、途中から逃げてたと」

「そういうことだな」

——すずか・腕術技能・発動・アッパー・成功！

「グフツツ？」

「中途半端にとぼけるから。で、どこまでいたの？」

「トレーニングが終わるまでだな」

「ふーん。違和感なく風水できるのは？」

「アリサが均等化したから」

「アルの変態」

「俺は意識なかったはずなんだがなあ」

「ところで、血は足りてるの？」

「——いや、足りてないな。アリサに言うわけにもいかないしな」

「飲む？」

そう言っつて首筋を差し出してくる。

妖艶になつてまあ。今後が思いやられてくる。

「取り敢えず、殺気出してるはやてをどうにかしたい」

「スズカチャン、状況次第デハ敵ト見ナスデ？」

「きゃっ★」

「死に晒せえ!!」

醜いキャットファイトが始まったので捨て置いて食堂に向かう。

「おう暗殺者、なのは伸して何してたんだ？」

「おう欠食児。クロノに挨拶しにな」

「あー、クロスケは後始末で大変だったらしいからなく。

んで、はやては？・襲って寝かせてる？」

「キヤットフアイトが始まったから捨て置いてきた」

「あー、はやても芸人に染まってきたからなあ」

やれやれ、と言いつつ冷蔵庫に入っている自分の分を取り出す。

「サンドウィッチに水出しコーヒーって、これだけで足りるのか？」

「ああ、五時に一度飯を食ってるからな」

「変な風習だな、コーヒー分けてくれ」

「コップ出せ」

「サンキュー」

豆は士郎に頼んで調合してもらっている。

それを買って、飲む一日前に水に漬けて冷蔵庫に置いておいて飲む、という形式だ。

「しっかし、一番乗りはアリサだったか。

忍から答え聞いてたからトトカルチョに勝てたけど危なかったな。

ユーノとザファイラには悪いことをした」

「この家で一番早起きするのは俺だからな。後、治療目的なのに賭けなんてしてたのか」

ズズと呆れながらコーヒーを飲む。

「まあ、気にすんな。ハゲるぞ」

「ハゲる前に死ぬから気にすんな。この先見た目六十歳で止まって年齢だけ進むからな」

「世の男性に聞かれたら殺されるな、それ」

「言わんよ、襲ってきても返り討ちだ」

「あー、分かる分かる。なのはを不意打てる時点でヤバイからなあ。

リハビリついでに兄ちゃんに鍛え直してもらって隙なんて潰してたはずなんだが」

「不意は打つもんじゃない、作るものだ」

「その年でよくもまあそんな思考が出るもんだ。お兄ちゃんおかわり」

「勝手に注げ、愚妹」

わーい、と言って水出しコーヒーのおかわりを強請るヴィータに許可を出す。

「女の子二人放置とかどうかと思うんやけど?」

「終わったのか。意外と早かったな」

「昨日の今日でリアクションが薄くないかな!」

「お、はやておかえりー。足止めはしといたぜー」

コーヒー牛乳でヒゲを作つてなければもつと威厳あつただろうにな、と思う。

「さて、無事に確保できたことだし血を飲ませてデバイスの調整に行こうか」

「血を飲ませて、つてどういうことなん?」

「……治す際に夜の一族、という所謂吸血鬼のようなものの血を混ぜられた。」

そのせいで体内でマトモにヘモグロビンを生成できなくなつている」

「で、原因が鉄分の吸収率が落ちてるからなんだけど、異性の血を吸つておけば多少ましになるの。」

というわけで、血をのますから見ないでくれると嬉しいかなつて」

「すずかちゃんその一族やんけ!」

「私の一族の特性は切り離してお姉ちゃん武器になつてるから今は一般人です」

「ふーん」

「あーあ。しーらね」

指先を切つたアリサが口を開けて飲ませてきた。

「あー!？」

「あー!!」

「フン、出遅れる方が悪いのよ」

後の先を取つたアリサが勝ち誇る。

「ヴィータ、つておらんし!？」

「アリサが来た瞬間に逃げたぞ」

「一番重要なところで……！」

コーヒーを飲み直して思う。

俺は世界で二番目に平穩が好きなんだ、と。

口に出すのは憚られた。

三人がキャットファイトに移行したところでヴェータと格ゲーをして時間を潰した。

あ、きつたね、Cワラキー使ってんじゃねー！ H秋葉使ってるお前が言うか!?

という一幕があったのは内緒。

「で、何のようだ」

「デバイスの使用感の確認と」

「武装局員の資格を取るっちゆう話やな」

なんか、エイミーがそんなこと言ってたな。

「取り敢えず、デバイスを作ったはいいけど戦闘で使うために登録せなあかんのや」

「ふむ、武装局員の試験は体が仕上がったらするとして、デバイスの確認からだな」

「あ、リンディ提督から武術大会出てみないかって」

「ふうん、条件は？」

「致死系攻撃禁止とバリアジャケットの着用、ランク3以上のデバイスの所持」

「あと、年齢的にU-18の大会になるから」

「まあ、七割ほどに仕上げたらちよつと出てみますか」

七割ってどのくらいだ？ とヴェータに聞かれたので、六年前の耐久があつて射撃が下手なフェイトくらい。なんて答えたら絶句された。解せぬ。重騎士にとって必要なのは速度や火力ではなく対応力。自分の武器をわきまえて最適な行動さえ取れば負けない。といってもはやてにはわからんか。

「こいつなあ、あの日で一番でおっかなかつたからなあ」

「なんや、ヴィータ知つとん?」

「映像見せたほうが早いな。アイゼン、六年前の十一月、海鳴町だ」

『Jawohl』

しばらく鑑賞したのはさすががまだお子様体型だった頃の映像。

「うわっ、強っ。」

忍さん動いてないけど全部の攻撃の援護に回ってるアル君はもつと頭おかしいんちゃう?」

「おかしいとは何だ。防御はこの中で一番うまかったし、さすがの射撃は連発すると腕を骨折する危険性があったからな。必然的に妥当なフォーメーションだ。後忍は伏兵と超長距離攻撃の対処だ」

「で、このあと確かシャマルが腕を斬られて」

「……忍さん何時移動したん?」

「ホントだ、この映像バグってないか?」

『e s i s t n o r m a l』

「認識から外れる、という行動を取れるからな。固定カメラじゃないと違和感を覚えられないぞ」

「ハア、お前ら舐めてんのか!」

こんな化け物たちとやってたのかよ、ふざけんな!!」

「ちなみに、なのはちゃんのお兄さんの恭也さんも二人に劣るとは言え真似できるから」

「アル、恭也さん、忍さんはチート三強だから」

「爆死級の間違いやで、コレ」

「リアル格ゲーごっこか見たことあるわよ」

「竜巻旋●脚と、閃走●兎がぶつかり合ってダブルノックダウンだったけ」

「何その面白珍劇場、見たかった。すごく見たかった!」

「今なら二●六兎できるぞ」

ますますバグってんじゃねえか! というヴィータの鋭いツツコミにああ、そうねと返して憤慨される。

「まあ、目的があったからな」

「目的?」

「過去の遺産をアレンジし直して修理する人とその護衛、そしてそれを知る者の三人でそれをやってたんだ」

「えっと、護衛が恭也さんで？」

「知る者がアルくんで、修理するのがお姉ちゃん」

なんか複雑な関係やねえとコーヒーを飲みつつ、感想を漏らした。

「さて、取り敢えずデバイスの調整に行こうか。」

あとはリハビリチームと交渉して大会のエントリーか」

はやてのデバイスで本局へと移動し、マリエルのデバイス工房に入ることになった。

「ここがあの子のハウスね!!」

ポカーンとしている部屋の主を放置し、ふざけたアリサも悪びれず入室してくる。

こいつらどんどんネタに染まっていくな。

「えっと、ウチはシュベルトクロイツのメンテナンスとリインフォースⅡの状況確認を」

「あ、はい。はやてちゃんのは取り敢えず預かっておきます。」

リインはあとプログラム更新だけですわね」

「あ、私たちは実験型ブーストデバイスのテストターです」

「ああ、すずかちゃんのお友達の。じゃあ準備しますわね」

パタパタとデバイスを取りに行く。

あれで大丈夫なのか、と不安になる。

腕があるのなら自信を持つべきだし、不安なら隠しておくべきだ。

中途半端というのが一番困る。とはいえ、すずかが文句を言わないのなら口を挟むべきではない。

「えっと、こちらマジックグローブタイプとナツクルガードタイプです」

「私のがマジックグローブね」

「俺のがナツクルガードか」

取り敢えず装着して手の感覚を確かめる。

「……及第点だ。格闘戦をするタイプのグローブの生成は初めてか？」

「は、はい」

「なら武器を持つかどうかも確認するといい。

格闘戦をするなら厚く丈夫にするべきだが、武器を持って戦う場合ひらの方は薄くするべきだ」

「は、はあ」

「例えば、こんな武器を使う場合がある。

流派を訪ねたことはあったが、教えてもらうことはなかったな」

そう言っただけに記憶にも残らなかった刺突用の錐のようなものを見た。

「細い、ですね。ああ、グローブが厚いと感覚が掴めないんですか」

「そういうことだ。

要望を言える立場じゃなかったから仕方がないが其の辺は気にするといけない」

「今回はあまり気にしなくても良かったんだけどねー」

「はあ、複雑ですね……。」

クロノ執……提督から使用する術式は聞いてインストールしていただきます。確認なさいますか?」

「追加で魔力平面構築の多重発動と足場強化の術式を紙面コード込みで頼む」

「えっ!?」

「ああ、飛行術式が苦手だから足場を作って飛び跳ねて移動するんですけど、彼の場合かなり特殊で、飛び跳ねながら加速するんですよ。そのため強力な足場を作るより足場を強化する方が便利な場合があるのと、乱雑に加速するための平面を多重に作る術式が欲しい、という事です」

「なるほど、確かに聞いていませんでしたね。お預かりします」

そう言っただけに搭載していなかったフランクスシフトの術式と、足場強化の術式のコードを見せてもらう。

「このコードじゃない」

「えっ!?!」

「足場強化は足場を強化するよりベクトル変換の術式が効率がいい」

「でも、結界強化の術式を利用したほうが簡単ですよ?」

「クロスレンジのファイターの場合、砲撃よりも斬撃や格闘戦の方が増える傾向にある。

ベクトルを変動させて受け流すことができたほうが後々楽になる」「う、受け流す、ですか。使いこなせますか?」

「元々魔法なしで戦ってたから正面防御の方が苦手だ」

「あ、はい。じゃあ術式を変更します。えっと、この話新規訓練担当に回しても?」

「構わん。利点はどんどん取り入れ、問題点を排除すべきだ。

前衛が使うというより、むしろ後衛が好んで使うと思うがな」

アリサとすずかが頷き、ヴィータとはやてが首をかしげる。

「演算力が高く、不意な近接戦で困る後衛が持つておいたほうがいい盾よ、これ」

「あー、うちは使えんな。演算苦手やし」

「アームドデバイスつかってるなら技術で受け流せるもんな。有用だと思わなかった」

は、はあと言いつつ腕は止めていないが、プログラミングが遅い。フレーム形成が得意なのか、術式を入れるのは個人であるべきなのか、と言ったところか。

生憎と月村亭にはそんな設備がないため本局で依頼するしかないのだが。

「えっと、術式入れ終わりました。体験してみますか?」

「軽くやってみるか。ヴィータ、遊ぶか?」

「おう、けちよんけちよんにしてやる。」

取り敢えず喧嘩売るのは体が治ってからだと思いつてもらわねえとな!

「じゃあ戦闘レコーダーも回しましょう」

「は、はい」

空いてる演習場に移動し、互いに準備を始める。

袋から神形具を抜き出し、握る。そのまま握っては放しというのを繰り返す。

握り具合を確認し終えたら、トトンと足場を作って宙に立つ。平面構築の実践も兼ねて平地での演習だ。

「しかし、こいつら暇人か？」

「ベルカの騎士の戦闘がレアだからな。近接対策でも考えてんだろ。うぜ」

「じゃ、やるか」

『レコーダー回し始めます』

カウント終了とともに先ずは落下する。

「チツ、距離をとりやがったか。」

だが、お前の射撃は直線って知ってんだよ！ そらそら！

金属球の弧を描くホーミングが四発、直進の牽制が四発飛んでくる。

足場を作って動いてみればそれがよくわかった。一発でも防御に回ったらハンマーが飛んでくる。

なら、

「こんなもんでどうよ」

「チツ、足場と同時に遮蔽物かよ！」

ホーミングをベクトル変換で相殺して、直進の牽制を乱雑に弾き飛ばす。

そのまま踏み込んで加速を開始する。三步目からは歩法も用いて十二分に加速する。

「汚ねえぞ！ それマジでどうしようもないチートじゃねえか！ どわっ！」

加速ついでに放った五行はデバイスにバレて避けられた。

ならばとカートリッジを消費して足場を破壊しに回ったが、こちらが発生させるほうが早い。

「チツ、演算速度がパネエな。不意打ちを警戒するしか……」

『ヴィータ、逃げな死ぬで？』

「はっ？ ちよっ!？」

はやての一言で膝蹴りがバレた。

プロテクションを張って不意打ちを防ぐが、発動した術式はバリア

ブレイク。

多少速度が減衰したものの、すぐさま体を捌いて足場を蹴って追撃する。

「おまー。えは！ どののっ！ 忍者だ!!」

「ただの重騎士だ」

「どこら辺が騎士だア!!」

キンキキンと得物をぶつけ合い、ヒットアンドアウェイを心がけて足場構築で逃げ道を塞ぎ、攪乱しつつ削っていく。

「あー!! もう!! アイゼン!!」

『cartridge load』

「ギガント！ シュラーク!!」

足場というか、攪乱壁ごと潰す気か。

「ほう?」

「ヨッシ！ 捉えた!」

背後から、神形具を逆手に持って、

「蹴り穿つ」

「ぐふっ」

背骨を捉え、そのままナツクルガードでエアリアルコンボを叩き込む。

「セイ、ハツ、トウ、ヤツ、悪いね」

「く、くっそ！ なんで、なんで——こんなエセ騎士にイ」

「はい、お疲れさん。いい経験になったろ」

足場にぶつかって跳ね上がった顎を、寝てなど言ってバリアブレイクで蹴り飛ばす。

「映像は?」

『固定カメラでバツチリ。全く参考にならないけど参考資料として残しておくね。感想は?』

感想か、ふむ。

「油断してるヴィータ相手だったからベクトル変換は防御に一度しか使えなかったな。

後は——。そうだな、身体技能が落ちてて泣ける。あと少し加速で

きると思つてたんだけどな」

『あー、寝てるヴィータちゃん運び出してな。』

油断してたほうが悪いんやけど、正直人間ドッキリ箱にびっくりや』

はよせんとシグナム来るでー、と間抜けな声を出しつつ通信が切れた。

「あー、はあ。これは筋肉痛だろうな。明日のトレーニングは軽めだな」

ヴィータを担いでアイゼンと豪皇を片手に持つて部屋から出る。

そのあとはアリサが術式の確認をしながら入ってない有用な術式をいくつか挙げて入れておいてと頼んでいた。最終チェックの際に小太刀と神形具をインストールしてもらつておいた。アリサは神形具だけだが、すずかはとづくに終わつていたらしい。

その後ヴィータをシグナムに預け、四人で買い物をして月村家に帰つてきた。

「疲れた、もう寝る」

「お疲れ様。アリサちゃんは今も泊まつていくの？」

「家出中で帰れないの。幸い管理局のバイトで資金難にはなつてないけど」

「じゃ、」

と言つて工房のベッドに向かい、ダイブした。

翌朝、夢が現実化するとも知らずに。

ぐー丁寧に猿轡まで噛ませて。

1st Days

「さて、と」

体を解し終えたので会場へと向かう。

『3, 2, 1, Duel』

「ハアッ！」

「ふむ」

薙ぎ払いを鞘で跳ね上げ、踏み込んで膝で顎を射貫き、逆足でしっかりと鳩尾を貫く。

吹き飛びもせずとその場で崩れ落ちた。

「おいおい、”通し”も使っていないぞ?」

『ダウン! 離れて離れて』

復帰は無理だと思っただけどなあ。

『6, 7, 8, 9, 10 — K. O. アルフレートwin』

「アル君、どうだった?」

「あの程度なら刀もいらん。今後は様子見しながらだな」

付き添いのすずかに返答し、ガツカリした。

ちよつとここ数年優勝が絞られてて大会が盛り上がらないから暴れてきてね、なんて言われて優勝候補とあたって意気揚々と来たら大して強くない。

「クロノくんにも言われてたよね。安心しろ、ガツカリするからって」
クスクスとすずかが笑っているが、こちらは全く笑えない。

このままこの大会をお遊びのままクリアしないといけないのかと思うと何故あの日の自分はある甘言に乗ったのかと悔やむほどだ。大会報酬の賞金とリンディが確保している空き地の値段が良くなければこんなことにはならなかったんだ、とさえ思う。

2nd Days

昨日の試合のありえない(らしい)勝ち方のせいで一度全部検査が

入ることになった。

小太刀型のアームデバイスで中身はバリアジャケットの登録だけ。

しかも外装強化型プランの成れの果てという恐ろしくも自分たちのせいで生まれたこいつに日の目を浴びせてやろう、なんていうそれだけの思惑。

昨日の今日で秒殺。今度は蹴り三発だけで終了。

体格はいいスピードも年齢の割に悪くなかったが如何せん打たれ弱すぎる。

3rd Days

ついにいろいろ考えて攻めて来るようになった。

攻撃を弾かれるのなら広域魔法で攻めればいいじゃない、なんていう魔法型の坊やと当たった。

悪くはないのだが、一撃食らっても構わず突っ込んでくると思わなかったのだろうか？

正面から一撃を『通し』てワンパンK.O.

ただし、クラッシュエミュレートではなくマジのクラッシュ。顎が折れていたらしい。

もう一度術式の確認をされ、仕方がないので実演してやった。

三十センチ間隔の板を吊るして狙った場所を当てる遠当てと呼ばれる鎧抜き技術の一つ。

バリアジャケットなんて意味がなく、直接攻撃ができるので本来なら有用なのだが、今大会では使用禁止とのこと。まあ、別にいいんだが。

二人目は隙を見せないための待ちの構えだったので、遠慮なく急加速からの背後から一撃で仕留めた。

4th Days

「何か、警戒されてるね」

「あー、怪我させたしな。手を抜いてもアレなんだから本腰も入れられないし……」

実際は刀型デバイスなのに攻撃方法が打撃のみ、というあたりに腹を立ててるらしいという話を運営から聞いていた。使わせる相手がいないだけだ。

「俺と闘いたいなら最低限ザフィーラクラスの腕じゃないとなあ」

「はつきりと遊びに来てる人間じゃ無理って言ったら？」

さて、な。本気になれるような腕の相手ならいいんだが……。

槍使い、か。開始と共に突っ込む。

背後からの不意打ちを防いだので実力者かあるいは対策をたててきたのか。

高速移動からの側面蹴り……対応が遅れた。

「なるほど」

「くっ」

背後からの急襲に訓練を割いてきたか。悪くはない判断だ。数日の対策にしては十分だ。

「刀を抜いてやる。それだけの実力は見せてもらった」

「やっ和本気ですか？」

「いや、」

正面から歩法を用いて急接近し、

「本調子には程遠い」

すれ違いチン、と鏢を鳴らした。

『ダウン！ 離れて、1, 2, 3……』

そのままK・O。これまで全試合ノックダウン勝ちというのが本当につまらない。

今日の残り二試合は刀を抜くこともなく終わった。

決勝トーナメントが始まった。とはいえ今年はダークホースばかりだという。

少し期待してもいいだろうか？

そう思っていた時期が自分にもあり、

そんなことはこれっぽっちもなかったのだが。

「四日目の一発目が一番マシだった。名刺も渡しておいた」

「助かる。眼鏡に適ったのなら陸士として立派に育つだろう」

「で、レジアス中將の依頼は終わりか？」

「聞いている限りではな。取り敢えず優勝おめでとう。」

賞金と手持ちの資本で家を建てるんだったか。さて、書類はつと

右手は書類を、左手はフレームをいじっている。

「何をしている」

「もう終わった。丁度休憩中の二人を呼び出しておいたんだ」

嫌な予感がする。

通神——通信欄には異常な程メッセージが殺到し始めた。

「なあ、後日ってことでいいか？」

「なに、もう遅い」

許可を出していたのかノックもなく扉が開いて三人が駆け込んできた。

「家建てるんだって？」

「うちらも資金出すからおつきい家にしよか」

「お庭も欲しいかな」

……。恨めしい目でクロノを見ている。

半笑いの同情の視線が飛んできた。

ものすごく細い魔力の針を作って首に打ち込んで気絶させた。

とはいえ、敷地面積が狭すぎる。工房を立てればいいサイズだったからだ。

「というか、敷地狭いわね。大所帯になるんだしもつと広いところじゃないと」

「あのさ、俺の工房を作るための敷地なんだけど」

「二へっ?」

「工房。メンテナンスとか強化に一々地球に帰るのが面倒なんだ」

後頭部をガシガシと掻きつつ事情を話す。

「あー、なるほどなあ。

「……ん? お金は余つとんやろ?」

「一応な。全財産突っ込んだり、工房の運営ができなくなるようなヘマはしない」

「後どのくらい残ってるん?」

「地球のは三十万ほど、こっちの金銭は運営費以外で二十万ほどだ」

「別々に?」

「別々に」

はやてがパンと手を叩いて、

「よっしゃ、とりあえず金策や。アルくんは今年の大会総ナメしてきて」

「おい」

「すぐかちゃんとアリサちゃんはもう就職していいんちゃう?」

「私はその予定なんだけど」

「アルがウエディングドレス着せてくれるなら……キヤツ★」

「あ?」

「うん?」

「おい」

そして俺の意思とは関係なくキヤツトファイトが始まった。

一番強いアリサにクロノをぶつけて止める。

「そこまでしておけお前ら。人様のスペースだぞ」

「その人様を一番蔑ろにしておいてよく言ったわね」

どうやら投げられたショックでクロノが目を覚ましたようだ。

「……ああ、なるほど。で、次の要望は広い敷地と賞金の率のいい大会の情報と見た」

「ASAP」

「えっと、次は来月だね。土地の方はクラナガンにかなり古びたそこそこ広い家があったはずだ」

「取り壊しは使えるところだけ取って五行で風に流しちやえばいいから――」

勝手に盛り上がりだしたのもう知らん。

権利書だけ執筆して小切手を残してその場を去った。

仮拠点ができた。金属を打つ施設は珍しいらしい。
今や包丁も型抜き型が主流なんだそうだ。

そんな話を聞きながら施設に工具と家具を運んでいった。

「やっ」

取り敢えず、剣のデバイス用に刀身を作って欲しいなんて依頼が来ていたので取り掛かる。

依頼人は聖王教会らしい。ベルカ式、という武装デバイスを主流とする傾向がある所からだとか。

シグナムに憧れて剣型を使ってみたい、なんていう若い衆がヴィー
タに勧められて、といった経緯だとか。

動機はともかく、扱える人材ならそれでいい。

剣や刀を作るだけなら簡単だ。五行師に限れば、だが。

金属の形をある程度整え、歪みや反りを直し、刃を入れていく。

この作業も久しぶりだと思いき引き締め直した。

指輪型の神形具で形を取った金属を弾いて五行していく。

キン

「ふむ、一回休憩入れるか」

そして、飯を買いに行こうと工房を出たところで大通りを待ち伏せ
しているはやてを見つけた。

そういえば紙面上でしかこの場所知らないよな、と思いつく。

声を掛けようとして、背後から「許せ」という声が聞こえた。それ
に反応し、振り返ることも声を出すこともなく感じたのは、心臓への
激痛。ハートブレイクショックか？　そこで意識が途切れた。

錆びた匂いがした

匂いにつられ、目を覚ませば口に指先を切つて血を、ついでに謎の液体も口に注いでいる少女の姿。

ゴクリ、と飲み込んだ。飲み込んでしまった。

「……飲んでから聞くが、なんだこれ？」

「そのうちわかるから気にせんでええよ」

そう言つて半分位残つた小瓶の中身を自分でも飲んでる。

「ところで、ここはどこだ」

「ここ？ 地球ベコボコのわたしの家！」

なるほど、送らずとも仕留めてくるネコ科の類だったか。後そのネタは古い。

「取り敢えず、二日間ぶっ続けて作業してたアル君にご飯やな」

「ほかの四人は？」

「フェイトちゃんがお家買ったつて言うてたからそこでお世話になるつて」

「俺たちも行ったほうが良かったんじゃないか？」

「そんな怖い形相で？」

「……貫徹だから目元にクマくらいはできているか。」

「やれやれ、ちよつとした小遣い稼ぎなんだがな」

「後どれくらいで終わるん？」

「後半日もあれば終わるだろう。俺の腕だとそこまでしかできない、というべきだがな」

流石にマルドリツクの歴代の五行師に比べれば飯事にしか見えな
いだろう。

「それであるの出来なら十分ちゃうの？ 取り敢えず冷めないうちに食
べよ」

出てきたのは魚の味噌焼きとお浸しに野菜炒め。実にアジア系
だった。

だからといって文句をつける気にもならない。簡単な料理はとも
かく手の込んだものを作る気にはなれないし、作った人間に文句を言
う気もない。

「いただきます」

「日々の糧に感謝を」

「クリスチャン？」

「一応な」

そうやって食べ始める。

食べ終わりに差し掛かって違和感に気がついた。

何かおかしい。酒を体に入れたわけでもないのに体が熱を帯びている。

はやての方も徐々に衣服を脱いで無防備な姿になっていく。

——もしかして、盛られたか？

食事の方に変な味のものはない。

……あの小瓶の中身？

「ごちそうさまでした」

「さて、俺はこの辺で……」

パシッとバインドが手足に巻き付いた。

逃がす気ないぞコイツ!?

「わたしは初めてだからできるだけ優しく傷つけてくれると嬉しいなって」

「俺の心が傷ついているんだが」

「知らへんよ」

ズボンを下ろされ、なすがままにしゃぶられる。

ネチヨリ、ネプツ、ジュルリと水音がする。他人事のように考えていた。

反応が悪かったためか、二本目の小瓶を無理矢理飲まされた。

「よしよし、立派なもの持つとるやないか」

「おい、これはどんな悪夢だ」

「現実やで。んむっ」

ねつとりと、しかし的確に舐られ、そろそろやばくなってきた。軽

く腰が浮く。

「アハッ、ピクピクしてるやん。出したい？」

「けどダメやで。出すのは、こつち」

「そういつて糸を引いているショーツに手をかける。」

「ヤバイ、とは思いつつ薬とバインドの影響で体は自由に動かない。」

「頭がぼうつとして、高温の熱にでもかかったようだ。」

「ひんやりと冷たい手が頬に触れ、ねつとりと舌が絡み合う。」

「いただきます」

ズプリ、といきり勃つそれが飲み込まれた。

彼女の記憶が流れ込んできた。

「早くに両親と死に別れ、自分の未来に諦観した。明日死ぬかも知れない。いつか孤独に死ぬのだろう。」

「ああけど、ちよつとくらい夢を見させて欲しい。」

「だから、神に祈ったのか。少しくらいは、と。」

「悲しげな少女は、今、何を抱えているのだろうか？」

「バインド外した瞬間狼になるのはどうかと思うんやけど」

「野犬に生肉を与えたら味をしめるだろうが」

「おかげで腰が抜けたんやけど」

「寝ろ」

「シャワーくらい浴びたいなって」

「……寝ろ」

「お風呂でもう一回くらいスル？」

「お胸もっといじってええよ？」

「……頼むから寝ろ。薬の影響とかで頭痛いんだ」

あと、シヤマル殺す。」

しい。

「やあ、今日はどうしたんだい？」

「ヴェロツサだったか。試作用剣型アームドデバイスの納品」

「ふーん、なるほど。見せてもらっていいかな？」

「倉庫にあるって言ってたけど、倉庫の場所知らないぞ？」

「ニヤリ、と笑って」

「倉庫の位置なら僕が知ってるから大丈夫さ」

デバイスの管理倉庫に着き、ヴェロツサの顔パスで中に入った。

「でと、見たことないのは……コレかな？」

「それだ」

ふむ、と言って手に取り、展開した。

「比率は6：4、多少重いけど武器として考えるなら正解か。

強度は、人くらいなら軽く切り裂けるな。なるほど、使い手が扱いきれなかったか」

「武器に詳しいんだな」

「家系的に純ベルカ寄りだからね。

稀少技能がわかるまでは騎士に育てようって親が張り切っちゃって」

「なるほどな。いろいろ大変だったわけか」

「まあね。で、稀少技能の事が分かると今度は教会に保護されてと
いった感じだ」

「そっか。まあ、まだましなほうだろ」

そう言っって備品のデバイスなどを確認していく。

「もつとひどい人生の人が？」

「膝の靭帯損傷、教えられてきたのは護衛を兼ねた殺人術、そして、殺した人数は覚えていないってさ。」

なのはの兄貴の歩んだ道だ。ああ、オフレコで頼むぞ」

「誰に言えっっていうのさ。それで、なんで殺したの？」

「護衛の仕事で、相手を殺さないのと守るべき人が死ぬから」

考えうる限りの最悪の状況。管理局員からしてみれば魔法で、と言いたいのだろう。

「その人、一般人？」

「ああ。リンカーコアもないってさ」

「そっか、そういう人もいるよね」

しみりりとしてしまった。

「俺も大概だけだな」

「何人が殺したことが？」

「ある。とはいえ、記憶の中……前世の話だ」

「そんなものまで背負いたくないなあ」

「有ることに満足するしかないさ。」

生命とはよりよい未来を願って次へと託すための礎にしか過ぎない」

「それは……」

「だれかの願いも、自分の祈りも、次へと繋ぐバトンに過ぎない」

そう言つて、弓を取ろうとして槍で指を切ってしまった。

「早く解毒をしないと、ついでに止血！」

「大丈夫だ」

え、という間に血は止まっていた。

「俺とアリサは、寿命以外で死なないんだ」

「それは、どういう……」

「前世でさ、俺は神の血を引いていたんだ」

「……それで？」

疑われないんだな、と思いつつ

「はやてを救う際に、同規格の魂を触媒に前世で切り離して捨てた神の力を取り込んだんだよ。」

その結果が流体放出量の過剰化、所謂生命力の枯渇。それが六年間の昏睡の真実。

で、その調律のついでに神の力をアリサが取り込んだみたいだな」

「同期した、ということか。」

それと寿命以外で死なないということに関する繋がりは？」

「神は、死因が無かったんだ。とはいえ、今はその力が半分になっている」

「力を均等に、か。つまり、ほぼ死なないということかな」

「そういうことになる。化物だろ、と呟くと、精神は人間らしくて好ましいけどね、と返してきた。」

「いい性格してるな、クロスケもいい友人を持ったものだ。」

「因みに、その槍は出血毒系の猛毒を持つ生物の殻から作られてたんだけど?」

「そんなチンケな毒なんて効かんよ。心臓を潰されても生き返るのに」

「それはまた、……ん? それって、最終的に魔女裁判みたいな発生しない?」

「よく知ってるな。発生すると思うぞ」

「自分と聖王教会は関わないから、といった。」

「言い換えれば巻き込まれて被害が増えるのを避けたとも言おう。」

「さて、このあとシグナムと遊ぶか」

「え、シグナムとサシで?」

「一勝二敗で負け越してるからな。ブランク長いとは言え負けっぱなしってものな」

「ふむ、と何か考える仕草をして」

「デモンストレーションしてもらえるかな?」

「条件による」

「取り敢えず、一番偉い人のところで話そうかなんて誘われてついていく。」

「偉い人は義姉なんだとか。へえ。」

「ちよつと邪魔するよ、カリム」

「あら、サボリ魔をシャツハが探してましたよ」

「ああ、大丈夫。今回は仕事のプレゼンで来てるから」

「取り敢えず聞くだけ聞こう、という流れでソファァーに座らせられ」

た。

そして、理解した。これプレゼン終わったらシャツハという女性に連行されるやつだ、と。

さて、という始まりの元、電子ケトルで湯を沸かして簡単な紅茶を入れ

「プレゼンの内容を聞きましたようか、愚弟」

「一先ず、聖王教会の質が下がってるってのが悩みだったね」
「続けて」

この時点でわかる上下関係。義姉がいる、とは言っていたが、ここまで上下関係がひどいとは。

「最近はおオルケソリッターの人たちに時々訓練してもらってるけど憧れはしても伸びが悪いとか」

「そうですね、自分もあれがしたいこれが見たいとは思っても辛い訓練を超えて、とまでは行っていません。」

ですがそれが？」

「ここにいる彼、シグナムと模擬戦する程度には実力があるらしいよ」
「へえ、それはまた。」

あなた、ミッド系？ それともベルカ？」

「どっちでもあるし、どっちでもない。」

競技用はベルカ式になってるが、メインデバイスはブーストだからミッド系だ」

ふうん、と行って考え始めた。

「因みに、どんな術式を使うんだい？」

聞いてなかったの、みたいな視線が飛んでくるが大丈夫だろうか？
「共通はベクトル変換と多重の障壁構築、後は転移に魔力平面構築だ

な」

「飛行術式は使わないのか？」

「加速が物足りないから——ああ、累積加速が、な」

「フラッシュムーブとかの術式なら十分な加速になると思うんだけど……」

「相手の目の前で足を止めるとか正気か？」

「まあ、見てみないとわからないものもあるでしょう」

そう言ってチリンチリンとベルを鳴らした。

「お呼びですか、騎士カリム」

先ほど謝罪をしてきた女性だった。

「シヤツハ、お客様の腕を確かめて頂戴」

「かしこまりました。ではお客様、どうぞこちらへ」

訓練後の自主トレーニング中なのか、先程に比べると人はバラバラで散っている。

比較的空いている空間に案内され、周りに近寄り過ぎないように指示を出していた。

位置としては先ほどの応接室からぎりぎり見える範囲だろうか。多分モニターを介して見るのだろう。

「勝負の形式は？」

「致命傷を与えられる状況、及びK.O.でどうでしょうか？」

「ああ、了解しました。」

では、提督クラスの許可がないとメインデバイスが使えないので、競技用でお相手します」

「ヴィンデルシャフト」

「ポラーナクト」

白鞘の直刀型デバイス、ポラーナクトを構えバリアジャケットを展開する。

向こうもバリアジャケットを着た。機動性重視か。

「いつでもどうぞ」

「……参ります」

ガシヤンとカートリッジを食った。高速移動系術式で接近して斬撃、かな。

「ふむ」

すつと親指を滑らせて鞘から刀を抜き、真空波を飛ばす。

「っー」

それに対し片手の剣で対処し、もう片方の剣でこちらを切り裂きに
来た。

それをバックステップで避け、着地と同時にベクトル変換を起動
し、加速を開始する。

手、脚、背中、腹と加速しながら傷を増やしていく。

仕留めるため、少し速度を落として背後を通り抜けながら斬り付
け、振り返る瞬間に側面に回って蹴りを叩き込む。自ら飛んでダメー
ジを減らしたのを確認してから再加速し回り込んで蹴り上げ、足場を
作って到達点に先回りし、

「鶯砕き」

両手を極めてプロレスのように背中から加減して落とす。

「ガハッ」

「まだやりますか?」

加速用に足場を襪ぎ祓い、再度の戦闘に備える。

「いえ、実力は把握できました。それに、あの速度を維持されると私で
は対処できません」

「そうですね。では、お疲れ様でした」

互いにバリアジャケットを解除し、デバイスも待機状態に戻した。
へお疲れ様でした。元の部屋に戻ってきてください」

やっぱり遠くから見てたか。

「ありがとうございます。スピード系で武術一本なんて珍しいです
ね」

「元々魔法なんて使わずに生きてたからな。射撃魔法を使うほうが難
しい」

やれやれ、と言いつつダウンストレッチをして部屋に戻った。

「では、一連の情報と技量を加味し、ヴォルケンリッターの皆さんとウ
チの代表騎士との演舞、及び交流会に参加していただけますか?」

「仕事の次第によるが、多分大丈夫だろう」

「演舞はカートリッジなしアームドデバイスのみで行い、技量を競い
合ってもらいます。」

その他条件はこの後決めますので、決まり次第はやてに連絡を回し

ます」

「若くて芽がありそうなのも入れておけ。伸びるか枯れるかは本人次第だがいい経験になるだろう」

「ええ、考慮しておきます」

悩むふりをしなかった。

才能があつて増長してゐる連中と伸び悩んでゐる連中をこちらにぶつける気か。

義弟も義弟なら義姉も義姉か。真つ黒姉弟め。

「さて、話は付いたことですし」

「ヴェロツサ、仕事をサボったそうですね」

「しまっ」

シヤツハと呼ばれた女性に連行されていった。

白いハンカチを振っておく。ソファアの向こうで同じことをしているカリムと目があつた。

「では、よろしくお願ひします」

腹黒め。

「同一規格型限定大会か、カリムも面白いこと考えたな」

「どうする、一緒に見に行く？」

「残念、丁度出航日なんだ」

「あらら、映像は残しておくよ」

「よろしく」

——ドッグ内での記録。

「げっ、逃げたくはねえけどキツイな」

「技量勝負、ということだろう。射撃も効率的ではないな」

「俺とシャマル、はやては参加できないな」

「がんばってなー。身内が勝ったら賞金でお家建てるでー」

——八神家家族会議。

「仕事が来たのはいいが、数が多すぎるだろうが……」

俺は世界で二番目に面倒臭がりなんだ。ほどほどの仕事量でいいんだほどほどで」

「はいはい、文句言う間があったら手を動かす。後十五口ぶりでしょ。

さっさとすずかの所に送って完成させないといけないんだから」

——マルドリック工房内にて。

「ふふふ、優秀な人材が育つ、いい武器が手に入る。一石二鳥ですね」

「騎士カリム、当日に休みが取れるように仕事を張り切るのはいいいですが……」

「大丈夫、無理はしません」

——腹黒執務室より。

「聖王教会は武術大会と評してスキルアップを図るか。

ゼストがいれば参加させたのだが、生憎とまともな人材が足りん」

「見送りですか？」

「そう伝えておけ」

「かしこまりました」

——地上本部。

「今度武術競技会があるんだってね、二人共参加しに行ったら？」

「いいんですか？」

「有給は余ってますけど……」

「使わないと損だし行っておいで。

僕も溜まった有給を消化して見に行くから。

……ホワイトな職場と公表しないといけないし」

（絶対それが本音だ!!）

——無限書庫の噂話。

せーの

★ flick CHANNEL ★

どうも、おはようございます。

一日の間に初めてあつたらおはようございますで通す人間です。連チャンの人はお憑かれ様、初めての人ははじめまして。

大丈夫、こんなの読む人間はカワカミン中毒にかかつて鈍器症候群に憑かれてるから間違つてない。

……はい、お前が言うな、ありがとうございます。こんなの書いてる時点で私もかかっております。

では、こんな場所を開いた理由とかその辺の話をしましょうか。

羅列すると

1. 面倒なのでこの後すぐにストライカーズに繋がります
2. 登場した転生者特典の公開
3. 主人公の状況
4. soundstageの話
5. 川上作品について

1. 正直、GOD編がなければなのはが怪我するシーンもないのでカットカットカットカットカットオ！です。

2. では、登場した愛すべき転生者たちの話ですね。

トップバッター、礼装レコードホルダーの容姿に近い男ワカメ。

えっと、水無月慎二（みなづき・しんじ）？ うん、そんな感じのやつ。

俺様万歳系。前世は生活保護を申請してパチンコでスル人生を歩んだ。

転生特典は容姿の変化と王の財宝。

推定魔力ランク：D

乖離剣？ 撃てませんよ？

なのはの世界で期待していたのに裏切られて自殺。ただし二度目の転生はない

次、プレシアに衣食を世話になった人。

飛・青（フェイ・ラン）

容姿は趙・晴。——知らない？ なら終わクロを読み、分厚いから。

中華系のアオタ、性別は女。

転生特典は不完全神聖機関のコピー及び永久に遠き勝利の剣。

推定魔力ランク：ニアA

不完全神聖機関は永遠に遠き勝利の剣の反動に耐え、量産がきくから。

見事に年上彼氏を捕まえて一緒に職場で楽しんでる。機動六課は行ってもいいかなくらい。

三番、はやてに振られた男。

葉山・俊介（はやま・しゅんすけ）

容姿は矛盾都市の先輩。わからないならニコニコで伏眼吸血鬼先輩と検索。

転生特典は自分が使っていたTRPG“ナイトウィザード”のキャラクターとその装備。

推定魔力ランク：ニアA

一番堅実な転生特典を選んだスポーツ系。前世は中年の外科医でアニメは余り。

はやてに振られ、精神的に揺らいだところを背後から忍び寄ってきた女性にキヤツチされ、一緒に職場に。機動六課に誘われるもの自分の能力は非殺傷とかできないのでお悩み中。

3. 主人公について。

容姿は”ハピメア”の内藤透（メガネなし）。決して透ちゃんモードではない。

現在は異族（夜の一族、神）であり、五行師。

推定魔力ランクは不明。そもそも魔力をそこまで使わない。一

応A A

前世はベルガーであり、その魂を触媒にマルシェが作った運命を起動し、共鳴させた。その結果昏睡状態になり、いつの間にか女性に襲われ続けるハメに。アリサとは完全な均等化をしたわけではないので、アリサに繁殖期はないということだけが彼の救いか。

機動六課には囑託局員（Bライセンス）及びデバイス整備士として呼ばれている。

4. 書きません。面倒だし、アリサが家出中のため最小限のメンバ―しか地球に向かえないので。

5. 本棚に置けなくなつてまいりました。いよいよピンチです。それはそれとしてニコ動に都市シリーズの静止画動画が上がつてて舞い上がっております。

特に機甲都市の動画ついででテンションが上がりますね。

さて、感想等お待ちしております。特に絵とか。以上flickでした、ニャンコ。

「ふむ」

アームドデバイスの軸が反れている。自動修復の範囲だが、訓練中の違和感はそれだろう。

部品交換で直すこともできるが、自動修復の範囲内だ。

「原因はわかった。フレームが歪んでいる。自動修復の範囲だ」

「あー、じゃあ自動修復を待ってみます。有難うございました」

「純騎士系相手に普通のプロテクションとデバイスだけで対処しようとするな」

「き、気をつけます」

バレないとも思っているのだろうか？

「はあ、バカどもめ」

至急の仕事も終え、通常の仕事も終わった。

今日で一先ずこの職場とはお別れだ。クロノの斡旋だけあって有意義だった。

「じゃ、お疲れさん。これから頑張ってくれ」

「ああ、そういえばそうですね。明日から機動六課でデバイス整備士でしたか」

「おう。デバイスブレイカーとかエース・オブ・エースと同じ職場だ。

デバイス整備士としては最悪の職場だな」

「あっはっはっは。高町一等空尉の悪口を言ってるのは貴方たち三人だけですよ」

そりやそうか。誰もが認めるエース様だもんな。

「私生活とか見たら卒倒すんぞ？」

同性の執務官とイチヤイチヤしてるし、部屋は効率悪いし朝弱いし」

「作業場は整ってないと落ち着かないって言ってるアルさんの前じゃ全員部屋汚いっすよ」

うんうん、と頷いている。

自分の部屋は荷物が少ないために綺麗だし、週二で使ってる工房は

キツチリとしている。

居候生活とか旅する生活に慣れすぎて荷物を広げる気になれないとも言う。

「お前ら、一職員として作業場の利便性くらいは考えるだろうが」

「まあ」

「確かに」

「なのはの家は女しか泊まらないから不意打ちで遊びに行くと大変な目に遭う」

「ああ、これのこと？」

そう言つて半空きのカッターシャツと脱ぎかけのスカートの写真を、呼びに来たアリサが暴露した。

「ビューー！」

「ブラボー！」

「グツジョブ」

男どもが歓喜し、女が蔑んだ目で見つめる。

「で、何してんの？」

「新しい職場の愚痴。」

予定通りなら新人に専用デバイスを作らないといけないから今のうちに吐いとこうと」

「ふーん」

「あ、さっきの写真ください」

「バレたら焼かれるわよ？」

「……遠慮しておきます」

部屋を出て、移動を知ってる女性からは羨ましそうに見られる。

しかし、だ。

「なのはのやつ女性に人気だな」

「そういえばそうね。あんな鍍金のお姫様なのに」

マリエルの部屋の近くの休憩所でコーヒーを飲みつつすすずかを待つ。

待たないと後でみっちり絞られる、と言い換えてもいい。

「さて、新人勧誘はうまくいくのかね？」

「さあ？」

「おまたせー」

「そっちも上がりか」

飛びつこうとジャンプして、アリサにキャッチされ不満そうな顔をする。

「じゃ、荷物を移しますか」

「工房はどうするの？」

「一旦閉じる。鍵は家に置いてきた」

「しかし、あなたの荷物少ないわね」

「旅に慣れすぎてて最小限の荷物しか持ち歩かないから」

「まあ、正式稼働日までにはいろいろ持ち込むけどな」

だが、よくもまあこんな喧嘩売るような場所に基地を建てたものだ。

レジラスのおっさんはさぞお冠なことだろう。

「さて、とりあえず飯だ飯」

生活のルーチンは変えたくない。

「リイン曹兵、下見は完了、これより帰投する」

「了解ですう、というかいいい加減”兵”呼ばわりはやめてほしいのですが」

「あ？ 曹兵は曹兵だろうが。はやては中佐でなのはは大尉だろうに」

「なんで軍人扱いなのかと聞いているんですう！」

「出身が軍国だから」

諦めろ、ついでに頑張れとだけ言い残して終了地点の崖から飛び降りる。

全弾回避且つノーアタックでぐり抜けるのは至難の業だった。どうせ三人はどっかから観察してたのだろう。

「あー、もういいや、かえって仮眠室で寝よ」

RTAした後だ、酒飲んで寝てもいいだろう。

「アール、仕事が入ったから早く戻ってきてねー」

F●CKこれだから仕事大好きな人種は。今日はこれで仕事終わりのはずなのに。

まあ、いい。運転手を止めてる場所までは歩いて帰ろう。

「お疲れ様です。すごい腕ですね、本局入りしないんですか？」

「本職はデバイス製造の下請けだ。たまに全部つくるが管理局で必死に働く気はない」

「まあ、部署によってはブラックですからね。

っと、いけない。すずか三尉に早く連れ戻せって言われてるんですけど」

「とりあえず、ハツカキセルくらい吸わせろ。帰ってからも仕事だと思っただけで面倒だ」

「第97管理外世界出身って皆勤勉な人だと思ってたんですけどね」

「そりやそこに住んでる勤勉な社会の人間がたまたま勤勉だったただだ。」

フランスは女を見たらデートに誘うしバカンスが大好き、イタリヤは女を見たら愛を囁いてバカンスが大好き、といった風にな。日本はとりわけ働くのが大好きな連中の国だ」

「結局地域しだい、と。で、アルさんの出身の国は？」

「規律が大好きで政治の話も大好き。んでいつの間にかレディーファーストを学ぶ国だ。後散歩が大好き」

まあ、レディーファーストって元々女性を先に歩かせて危険を探知するカナリヤ扱ひなんだが。

「変な国っすね。ああ、だから仕事が終わったのに急に入ってくるのが嫌いなのか」

「そういうことだ。働いて働いて働くの、なんて言ってるのは日本とアメリカだけだ」

ゴミをポケットに放り込んでヘルメットをかぶる。

「ゆっくりでいいぞ、本来仕事は終わってるんだから」

「そういうわけにも行きませんって。じゃ、出しますよ」

結局、仕事の内容は大したことなかった。

単にプログラミングエラーで止まってるからどうしたらいいのかわからなかっただけ。

……管理権限が俺のデバイスにしかないからといって勝手に使うのもどうかと思うが、よく知らない言語でエラーを吐かれて困って呼び出すのはもつとどうかと思う。仕事自体は急ぎだったのでますます頭が痛い。せめて日程くらい考えていろいろ仕事を割り振れよ、と逆に上に叱るのであった。

カタカタと気儘にプログラムを組んでいく。

休憩時間だし何をしようと勝手の筈だ。しかもあと十二分はある。

「ふむ」

プロトコルをもう少しいいじろうか。

「ふむ、じゃなくて働きなさいよ」

「休憩時間だ。多少自由にしてもいいはずだが？」

「遊ぶくらいならこっちの仕事を手伝えて言ってるのよ」

「遊ぶだなんて失礼な。これでも術式演算の計算中だ」

えっ、と変な声が周りから漏れる。

こいつら本当に失礼な奴らだな。一日中遊んでばかりいるわけはないのだが。

「どこが術式演算の計算中なのよ」

「具体的に言うとはやての個人処理可能限界を計算してる」

——通信——

はやてちゃんははやてちゃん、アルがはやてちゃんの限界を知りたいって言ってるよ？

ほほう、失礼な奴やな。後でねっとり締めてやらんと。

具体的には個人演算可能限界だつて！

そや、私仕事があるんやつた。

逃げたな。

逃げた。

間違いない。

今度から弄るならこの方向だな。

最後の奴誰や!!

コードは——

やめい!!

——通信終了——

「なんか今別の端末開いてなかった？」

「気のせいだ。ついでに、演算量次第でどんどん難易度が上がるようにもしている最中だ」

「へえ、出来栄えは隊長副隊長にでも確認してもらおうかしら」

「で、上限をどこにするかで迷っていてな。」

具体的にはメモリ使用量を8Tか12Tかで。それによってインストールする筐体も変わるからな」

棒付き飴をカラカラと舐めながらプログラムを更に更新していく。

ついでにコピペして部隊長のコンソールへとデータを送信しておいた。

「まあ、折角だしコンソール使用でいいんじゃない」

「了解した、12TBにしておく」

後に誰もが苦戦するゲームをここで開発することになる。

種類はシューティング。ボムに無敵はなく、無敵にはシールドと呼ばれるコマンドを必要とし、三種類のバレットを切り替えて挑むある程度まではお遊びのゲーム。無論立体ゲーであり普通に難しい。一部に安置も用意している優しさまで見せたのだからクリアして欲しいとさえ思う。

やれるものならな。

「……さて、ゲームのヴィータあたりは喜んでやることだろう。」

アップデートパッチも用意しておかないとな」

「はいはい、後二分で休憩終わるんだから処理を保存して仕事に戻りなさい」

「……これだから日本人は」

「この場では規則正しすぎる独逸人がおかしいのよ」

自分のファイルに途中のプログラムもしまい仕事のファイルを開く。

「で、次の仕事は？」

「ぴったり二分とか……まあいいけど。」

次はガジェットの実験ね。一応技術班のデータを読み取ってから

感想とかそういうの上げていって」

「了解した。確認してない事象が多そうで助かる」

物理耐久限界と温熱耐久限界が抜けて報告されているのはどうい
うことだ、と簡単に質問すると禁断兵器に相当するそれらの耐久を検
証する価値はない、とのこと。アームドデバイスと炎熱変換資質の魔
導師のための情報が足りてないだろう、と説明すると嫌々ながらに検
証しておきますとのこと。

頭が固いこと、融通が利かないこと、さらに仕事に不備が有ること
は全て別の話だ。

この後タイプごとに検証しないと価値がないだろう、と追求すると
泣いていた。

「で、なんで俺まで連れ出してきてるんだ？」

「一番戦闘に詳しいのアルだからじゃない？」

「いや、多分ガジェットの予想向上化プログラムが原因と見ました」
「どっちにしたって後で講評すればいいだろ」

ガムを噛みつつ文句を垂れる。

「一応、ぶつちぎりで相性のいい人間をぶついたらどうなるかってのを見てもらおうと思ってるね。」

後は基本の出来具合を是非見てもらおうかと」

「マジでどうでもいい理由で呼び出しやがったのな」

「どうでもいいって……新部隊の新人訓練なんですけど……」

グツと背を伸ばしたあと目を閉じて座禅を組む。

暫くするとシミュレーター前にデバイスを準備した新人がやってきた。

「あの、なのはさん、その式にいなかったふたりは？」

「一応技術班の人で、私たちの幼馴染。ついでに囑託の警備員……かなあ？」

「管理局法が著しく固有技能と相性が悪いので入局する気がないだけだ」

「は？」

「具体的に言うとな物理変化を伴う改変が得意だな。わかりやすく言うなら、非殺傷設定とやらが著しく苦手だ。」

もうひとり非殺傷が苦手な奴もいるんだが、そっちはデバイス管理が主な仕事だからあまり関係はないな」

「こんな人呼んで何か役に立つんですか？」

言いたいことはわかるが、非殺傷である必要がない場合に限り運用が楽になる。

「まあ、特殊な部隊で特殊な相手がメインだからいろいろあってね。」

相手の実力は初訓練で体感してもらえばいいかなって思ってるんだ。

早速第一段階を始めようか。とりあえず軽く八体かな」

「動作レベルC、攻撃精度Dってどこですかね」

「うん、よろしく」

旧市街、いわゆる廃墟街を再現した立体投影システムを起動させ、仮想敵を配置する。

「私たちの探してる搜索指定ロストログニアは主に魔導機械の敵が追ってるんだ。」

だから、回収任務には当然のようにこの戦闘用の呼称名”ガジエツト”が敵として出てくるの。

と、いうわけで第一段階はこれを全部壊しちゃって」

「「はい」」

「俺は？」

「このまま上で見てて。判断力と経験を一緒に確認して欲しいかな」

「了解した。どうせ危なっかしい行動が多いんだろうけどな」

クスクス、と笑って誤魔化された。

「減点1、魔力が消されるのに消されやすい魔力の足場を使っていること」

「まあ、それは体験してもらわないとわからないだろうし……」

「減点2、アームドデバイスを所持しているくせに物理衝撃の耐久を確認できていない。」

ついでに言えばあれ魔力変換資質だろ、機械に電気を流すだけで壊せるだろうに」

「あー、魔力が通らないって聞いてそこで諦めたってことですか」

「最後の減点は力尽きて倒れるところだな。戦場を舐めすぎだ」

「最後のは本当の現場でそんなことされると困るからそこだけ注意だね」

へみんな、とりあえず最初の場所に戻ってもらえるかな」

ぞろぞろと帰ってきた。疲労困憊、といったところか。

「あれ、次はないんですか？」

「ぶっ続けで走れるほど後衛に余裕がないだろうが。」

前衛は前衛で後ろを見てないし、後衛は後衛で指示が甘いし」
「うぐっ」

「とりあえず上行って見てろ、遊びにしかならんが手本を見せてやる」
「出来るんですか？ 非殺傷設定も苦手なのには？」

「射撃魔法を使わなければ殺傷も非殺傷も関係ないからな」
「えっと、物理攻撃に魔力を乗せないんですか？」

「物理で殴るだけなのに魔法なんて必要あるのか？」
物理攻撃に不思議な力なんて必要ないだろうに。

それともあれか、魔法が便利すぎて肉体を鍛える意味を理解してないのか？

へとりあえず、危険だから上がってきてね。シャーリー、両方ともAの10機で。

スコア上だともう少しいけるんだけどこれ以上は参考にならないから」

「準備だ、ハイランダー」

《Angfang》

服は制服のまま待機状態だけを解除する。

へじゃあ、スタート」

なるべく参考になる動きを心がけたほうがいいのだろう。

逃げ出したのを確認し、急加速して追いかける。

「相変わらず遅い」

突きで貫^ぬき、切り捨てる。

一つ、

「射撃は結構正確だな」

蹴りを叩き込んで二つ目を破壊。

続けて神形具で本体を叩いて五行、これで三体。

「ア」

自分の遺伝詞を増幅して大気を五行する。

二つまとめて叩き割ってこれで五か。

「さて、遊んでいきますか」

それから五分程度で全滅させ終了。久しぶりの戦闘にしては動けたほうだろう。下で待っていれば全員が降りてきた。

「お疲れ様、できれば五行はしないで欲しかったんだけどね」

「そういうのは先に言え。とはいえ殆ど叩つ斬っただろうが」

デバイスを待機状態のリストバンドへと戻す。

「蹴りだけでぶち壊してませんでした?」

そう茶髪オペレーターが尋ねてきた。

「ああ、古武術の中に通し、という技法があつてな。

鎧とか盾を無視して内部破壊ダメージを与える技なんだが……どうした?」

新人を見れば呆れているのか呆けているのかわからない顔をしている。

「先程は失礼しました。強かったですね」

「ん? ああ、元々武術を学んでいたからな。なのはのクロスレンジの訓練も手伝ったし副隊長と技術交流もしてた。最近では頭脳労働ばかりで腕が少し鈍ってるのが難点か」

「あれで鈍ってるんですか、Bランク試験なんて余裕じゃないですか?」

「一応持つてるわよ?」

「へっ?」

「二人ともBランク陸士の資格なら持つてるの。」

ちよつと必要になった事案があつてね」

コネはカリムから貰ってきた。一応教会の仮想敵に資格もない人間が、とかいう意見があつたからだとか。

「あの、ブリッツァクシヨンのコツを教えて欲しいんですけど」

「体幹を崩すな、必要以上に魔法に頼るな」

「えっと」

えっと、名簿の……ライトニングの赤髪……

「エリオだったか。魔法を使いこなそうとするのなら俺たち異常者の

真似はしないことだ。二度は言わない、忘れるな」
「え？」

ポケットから水を取り出して飲み、告げる言葉を考え、

「俺とアリサは体術による加速累積と呼称されている古代技法を利用して
している。もうひとりテックは技能と呼ばれるこれまた魔法に程遠い技術
で似たようなことをしている」

「もうちよつと噛み砕いて説明してもらえますか？」

「結構、勉強熱心で何よりだ。」

エネルギー保存の法則を知っているか？」

「エネルギーの総量は変化しない、ですね」

「そうだ。ついでに言えば人間は加速する際に力を上下に分散させ、
さらに体幹のブレで左右に分散させる上に摩擦で分散させる。ここ
で、分散を肉体で可能な限り抑え余った力を加速に用いることができ
れば、等と考えて実践した連中がいる。その技術を拡大解釈し現代で
手直したものが俺とアリサの今用いている加速だ」

「できるんですか、そんなこと？」

「可能か不可能かで言えば可能よ」

ただし、

「多少のセンスと頭のおかしい訓練量が必要とするわ」

「まあ、少し見ている。アリサ、頼んだ」

「はいはい」

歩いてそこそこ高いビルに足をかけ、トンと軽く踏み出して重心を
意識しつつ、バランスを崩さずに素早く足を運んでいく。

”壁走り”と呼ばれる技術だ。

屋上にたどり着き、今度は壁を走って降りてきた。

「とまあこんなもんだ。重力を振りきれれるほど加速したにすぎない。
AMFがなければ飛べばいい。その程度だ」

過ぎないって……などと言っているが、加速できれば同じだろう
に。

「とりあえずエリオの加速術式はフェイトちゃんに任せるとして、な
にか聞きたいことはある？」

「は、はい！　なんで訓練の必要のない二人を呼んだんでしょーか!？」
「なんでって、連携訓練のための仮想敵だけど？」

新人の顔が青ざめた。先ほど手加減が苦手だと自分で言っていた筈、なんて顔をしている。

「旗とり？」

「そうそう。ほぼ遠距離のないアルくと全レンジのアリサちゃん好きな方を選んで、そっちと旗とり合戦。」

勝利条件は過半数以上の旗の確保中の時間切れかアグレッサの撃墜、もしくは旗の全確保の三つ。

一応ハンデとしてアグレッサの使用傾向の高い魔法を選ばなかった方に聞いていいことにします」

「時間と旗の情報は？」

「時間は30分、旗の数は5本、旗の位置はアグレッサのみ知らないこととします。じゃあ、考えてみてね」

いつもの場合、俺をチョイスしてくることが多い。

使ってくる魔法とある程度のスペックが判明するからだ。

が、今回の場合正解はアリサをチョイスすることである。

特化型と汎用型、どちらを相手にするのが楽かは本人たちのスペックしだい、という面が大きいが今回の場合メインアタッカーが近接に寄り過ぎている。

それに、アリサと俺だと攻撃速度の差がある。

「アリサさん、助言お願いします」

「了解、作戦までは考えないからね」

この後一人ずつ暗殺していった。最後に震えるキャロの姿を見てやりすぎたと反省はする。

一先ず旗を見つけ、拠点とする。

オプデックハイドで接近し、フェイク・シルエツトで近づいたように見せて油断したティアナから不意打ちで仕留め、倒したあとはオプデックハイドで連行し、拠点の旗の前で吊るした。

あとは建物に入った瞬間を狙って前衛を各個撃破、拠点に吊るしてを繰り返し、魔力感知で三人を救出しに来たキャロを背後から強襲した。

なのはに叱られる途中に後ろ手で寝起きドツキリの写真をフォワード陣の方へ流し中断させた。

後日（一緒に写っていた）フェイトにも怒られたが、ドツキリの主犯ははやてだったりする。

しかもネガの持ち主はさすがだ。

「さて、言いたいことはいろいろあるんだけど、どうだった？」

「無防備ですわね！」

スツと超低温の視線を浴びせられスバルは黙りこんだ。

「来るのが女性ばかりだからって下着も着ないで玄関に来るとか何考えてんだらうな」

「アル君うるさい！ 脳天にデイベインバスターブチ込むよ！」

「その程度で最上位級の異族にダウンを取れるつもりか？」

「はいはい、そこまでにしないと小学校の頃の赤裸々なエピソードを語ることになるわよ。」

なのはの

「なんで私だけ!？」

だって、小学校の頃アルは……ねえ。

あーそういうええ。というひどい納得を受けた。

「まあ、小学校なんてまともに通ったことないな」

「あの八ヶ月だけじゃないの？」

「だなあ。飛び級で早々に大学も卒業したし」

最終学歴はベルリン大卒だ。

「えっと、話を戻そうか。」

闘ってみてどうだった？」

「やけに手馴れてるな、と感じました」

「間合いの取り方がうますぎて訳がわからなかったです」

「幻影魔法の使い方が上手かったとしか」

「正面から腹を殴られたはずなのに全然気づきませんでした!」

うんうん、となのはが頷いている。

「基本スペックでゴリ押されて負けるから戦術を考えないといけない目標だね。」

ティアナを倒したあとは魔法すら使ってなかったし……いろいろ反省しないとね」

「えっと、オプティックハイド使って攻撃してきたんじゃないんですか?」

「あー、あれは歩法って言って」

すつと体を動かし、フォワードの背後に回る。

「そのように認識を逸らして行動するっていう反則よ」^{チート}

「えっと、アルさんいつの間に関後ろに?」

「歩法、と言っていたあたりだね」

「魔力反応で感知するかあからさまに違和感に対応するしかないからね」

で、やってみてどう思った? などと尋ねられたので、

「そう、だな。接敵して急に逃げたら陽動の可能性を考慮しないと。声に出す前に司令官は仕留めさせてもらったが、脳筋はいかんよ。」

で、建物に入る時くらいハンドサイン使えとまでは言わないからクリア確認しろ」

「そうね、安全確認は大事よ。みんな揃ってはいドーン! みたいな入り方するから急に味方が消えても気づかないんだから。ねえなのは」

「うん、お兄ちゃんとアリサちゃんに散々叩き込まれたもんね。」

「演習中に部屋に入った瞬間刀でフルスイングしてから」 どうして安全確認もせずに入った!なんて怒られるのはひどいと思います」

「ああ、今でも覚えてるわよ、そのシーン。」

プロテクションで防いでカウンター狙いのなのは顎に一撃食らって吹き飛んだのは笑えたわ」

新人が恐怖する。ついでにシャーリーも変な顔になった。

「すずかさんの部屋に痺れ薬が仕掛けてあったのもその教訓ですか？」

「それは盗難対策でしょ。重要機密の書類の入った部屋に仕込んであることが多いわね」

もう新人はお腹いっぱいという顔だ。

「まあ、広所や閉所への侵入ってのは一番危険な行為だ。

罠は仕掛けやすいし、対策もしやすい。優秀な司令塔がいるならそこを狙うのは当然だ。

後は場数だな。優先度の高い行動を把握しろ。以上だ。後は教官に聞きつつ自分たちで頑張れ」

「無理言っでごめんね」

「ああ、俺がいないせいで俺のデスクが荒らされても俺のせいじゃないからな」

「……待って、すごく嫌な予感がするんだけど」

「写真を受け取ったのが今日だったんだ。さっき蒔いたのはサンプル」

じゃ、と言って去る。

待って、止めないでシャーリー！ アルの机の中を点検しないと！

はいはい、訓練の続きのあとでやってくださいねー！

強かだな、通信担当。

「シャーリー、こっちは二ミリパー秒上方修正」

「えっ、これ以上ですか!？」

「で、そっちは一ミリパー秒下方修正」

「ふええ、休ませてくださいよ〜」

自分から点検を依頼しておいて何を言っているのだろうか。

せっかく情報とデータを見て修正点を羅列してやっているのに。

「というか、なんで出力限定もあるのに調整し直してるんですか?」

「スバルは行動が思考と直結してるから多少下げて判断力を養うため、ティアナは逆にデバイスの方が追いついてないから上方修正の必要がある」

「えっ、あれで追いついてないんですか!？」

「オリジナルデバイスに頼ってた弊害で演算量が釣り合っていないんだ。

……モンディアルとルシエのはそのまま使ってもらって遠隔修正だな」

「おっわったあ! で、そっちの薙刀は?」

「アリサの主武装のメンテ後だ。フレームがマイクロ単位で歪んでないか調整した後だ」

普段ならそんなに気にしないのだが、時々ジャリどもと訓練することになってから益々歪みを気にするようになってきたらしい。特にスバルがバカ力で殴ってくるから訓練前は必ずと言っていいほど回してくる。

「そんな細かく調整するんですね」

「それが自分の武器だからな。ミリグラム単位で自分の武器の異常を察知する奴がいたくらいだ。」

そこまで、とは言わんが多少自分のものに愛着を持って欲しいものだ」

長物なら特に比重などを気にすることが多いらしい。

自分は二、三回振って調整するのだが、それでも誤差は少ないほう

がいい。

「アルー、受け取りに来たわよー」

「そこに置いてある。前より比重が251／1000ずれてるから気をつけろ」

「了解、後で慣らしておく。で、シャーリーは？」

「今さっきメンテナンスの確認に来たんですよ。」

思考演算ならリイン曹長かアルさんが優秀だからって」

「データの羅列で解読できる人材は少ないらしいね」

「そうなんですよ！」

「ついでなんで入局してくれば嬉しいんですけど……ねえ」

「俺は世界で二番目に面倒臭がりなんだ、態々仕事を増やす気はない」
管理局に入ってしまったえば面倒事しか待っていない。

特に自分の肉体関係だ。誰と持った、ではなく純粹に肉体のデータが、だ。

異族という時点で既に人間とかけ離れている。自分と比べればスバルなんてまだまだ人間の括りに入れていいレベルだ。当然、均等化したアリサも既に人間という括りに入れることは難しいだろう。

かつての、それこそ自分たちの生きていた時代なら動物、幻獣、人間、植物、無機物というわかりやすい区分だったから人間扱いだが、現代では違うだろう。言像化すれば背中から数の減った翼が出ることだろう。ナイン・アングル 匪 天なんて比じゃない真っ白で透き通った白の翼が。

アリサにはそのことは告げていない。自分の子供には教えずなくてはならないだろう。そう思うだけで面倒だ。

さて、

「じゃあ、仕事もひと段落したし飯を食ってくる」

「ああ、私も軽く食べておこうかな。シャーリーは？」

「この後デバイスの受け渡しなんですよ。だから先に食べておいたんでお二人でどうぞ。」

「ついでに言えば受け渡しのアとは訓練の様子を見ながら調整もしないといけないですから」

そう言っ自分の仕事部屋から出て行ったシャーリーを見送って

から食堂に向かった。

食ってる最中にアラートが鳴ったが、自分たちに要請がなかったから遠慮なく続けた。

食事中にさすががやって来て抱きついてきてそのまま首筋に噛みつかされた。

後はいつも通りキャットファイト、ただし何故か勝ち誇ったさすがと帰ってきてすぐのはやてが。

「悪くはないといったところか。良くもないがな」

「全員が全員回避も防御もうまいわけじゃないんやで」

「仕事はどうした」

「休憩中や。で、どの辺が良くないん？」

そう聞いてくるはやてに、

「まず、自分のスタイルがよくわかっていないあたりだな。

ガード盾役のスバル、回避盾のエリオ、一般射撃型のティアナ、特殊バツファアのキャロ。

この中で自分の練度を最も重点的に上げないといけない奴が一番焦っている。

上げるべきは思考速度であつて、戦闘スキルじゃないんだがなあ」

「うー、ちよつと妬けるなあ。んで、ほかは？」

「お疲れ様です、主はやて」

「ちよつと気になる話つすね。聞いても？」

暇人どもめ。

「あとはそうだな、自分の最終地点を決めてないのが悪いだろ」

「ん？」

「なるほど」

「ん？？」

やれやれ、

「適正云々で決まることが多いが、基本と応用が違うという話だ。

おいこら、首にキスマークつけんな！」

「やー、つまらない話なんて聞きたくないんや」

というか、

「はやて、お前今日外回りだろうに」

「うっ、せやな。行ってきますー。ギンガと俊くんにかかある？」

「さっさと嫁ぎ先見つけろとギンガに行っておけ」

もつと構えという視線で睨んできたが手を振って送り出す。
で、

「さて、何の話だったか」

「最終地点がどうかという話ですね」

「ああ、それか。」

まず、あいつらはミッド式か近代ベルカ式だ。当然全員が遠距離手段を持っている。

が、ティアナとキャロは近づかれたらどうするか、というところまで進んでいない。

逆にエリオとスバルは遠距離からハメ殺しにあつた際どうするか、というのもだ」

「私の場合はハメ殺しに遭う前に接近して、という流れだな」

「なるほど、基本と応用は違うってそういう……」

よくある話で、

「相性がいいもの同士をぶつけるのが戦術の基本だ。逆に言えば一方的に相性が良ければその時点で勝利を掴みやすい。当たり前の話だ。スナイパーの敵はジャミングと超長距離射撃だろうか？」

「らしいっすね。同期が悩んでました」

流星に面の皮が厚いか。だが、

「とぼけるんなら指についたタコを消してから言うんだな」

「あつはつは、経歴を知ってるんじゃないんすね」

「パンピーが知ってる訳無いだろうが」

何度も何度も引き金を引く際についたコブ、それが右手にある。その時点で察せる。

後は、そうだな。

「空き缶あるだろ」

「は、はあ」

「あれに連続で六発打ち込んで同じ穴を通す、なんて訓練があるらしいぞ」

「へえ」

まあ、ホーミングを切って手動照準だからラグが生まれるんだが。「格闘術を学びたかったら暇なときに俺の研究室を尋ねるといい。

多分、素手やライフルを使った応用格闘はなのはよりも詳しいから

な」

「おっかないんで結構です」

「まあ、気が向いたら訪ねてみるといい。六課で一番格闘に詳しいのはコイツだからな」

スタイルが似通ってるってだけで教えるのもアレだな。

「問題はティアナだな」

「やはり、そう思うか」

「あー、どうということっすか？」

有体に言ってしまうえば、

「劣等感で悩んでいる。それは成長を阻害する病だ」

「劣等感、ね。あんなに優秀なのに？」

「隣の芝は青いのだろう。どんな技術があっても悩みは消えないということだ」

「シグナム姐さん？」

「かつて、主はやても悩んでいたことだ。それを見ていた身としてはわからんでもない。」

何か一つ、突出したものがあれば違うのだろうか……な」

「俺やアリサの身体スペック、すずかの絶対切断、隊長陣のランクと経験値とかか」

「あるものに満足するしかねえんだけどなあ」

そう呟いたヴァイスの一言は、実感がこもっていた。

「全くだ」

「身体スペックが高い人のセリフじゃねえですよ、それ」

「代わりに非殺傷設定なんてものが使えないんだがな、これが」

ヴァイスがシグナムのほうを向く。

「事実だ。素のスペックが高すぎて魔法を使わなくても高威力が出せる。言い換えれば魔法を使わずとも殺しかねないということでもある。また、射撃魔法の適性もほとんどない。結果として一撃で殺すかもしれない状態で戦っている」

「だから武装局員入りしてないんすか。」

それなら二種キャリアならワンチャンあるかも、といったところで

すね」

「まあ、入る気もないんだがな。ハイランダー、コード2043表示」
《Ja》

開かれた情報は次元犯罪者に管理局が情報を流している、というものの。

殆どが最高評議会、となつているところもミソだ。

「げっ、どこからこんなもん拾ってきたんですか」

「ハッキングしてサルベージしてみた。」

ついでにレジアス中将はスカリエツティと情報交換してるぞ」

そう言つてその項目を拡大する。

「あー、知りたくなかつたつすわ。これ公表したらどうなるんすかね」

「良くて管理局への不信、悪くて秩序の崩壊だな。どうでもいいけど」

「この情報、ほかに誰が知っている」

静かで、冷たい声だ。

「アリサじゃないか？ 俺の部屋によくやってきてこのプロテクトを抜ける人物は」

「なら、そちらの口止めはこちらでしておこう。くれぐれも」

「はいはい、黙っておきますよ。面倒だ」

「わかつてますって」

そう言つて仕事に戻つていった。

まあ、自分から面倒なことを起こす気はさらさらないのだが。

面倒事がやってきた際の手札として手に入れただけだし。

自分が狙われるのが一番面倒だ。次点でアリサ。

アリサはまだ神としての力の使い方を知らない。それが救いで欠点だ。

そのままでも寿命は長い。スカリエツティに攫われても不死兵として扱われることはないだろう。

「はあ、この事件さつきと終わらねえかな」

「心配事つすか？」

「ちよつと、俺たちの肉体の問題がなー」

「高すぎるスペックがです？」

「いや、まあ異族としてみればそこまでおかしな運動能力じゃないんだが……」

「グラゾリアン？ ああ、特秘事項なら詳しく聞きませんが」

「ヒトではあるが、人間ではない。別の種族の力が混じってる人間のことだ」

「はあ、使い魔ってわけじゃないですよね？」

「もつと質が悪いな。わかり易いので第97管理外世界、地球の神話に登場する神魔妖怪の仲間だ」

「妖怪、って怪物の？」

「そんな認識でいい。ともかく、俺とアリサはかなり死にくくい。

今の俺でもミンチから今の状態に復活できるくらいにはな」

「知りたくなかったんで、聞かなかったことにしていっすか？」

「其の辺は個人の自由だろ。」

問題は、寿命の方もバカにならなくてな」

「……もしかして、非常にやばい案件抱えてます？」

「変なところで攫われるより監視できる場所においておきたい、つてのが上層部への言い分だな」

「だから囑託なんて名義で置いてるんですね。」

一般人は勝手に魔法とか使ったら犯罪者になりますし——もしかして軟禁？」

「そういうことだ。」

変に犯罪者に捕まるくらいなら自分たちの場所に置いておこう、つて算段だ。

上層部的にはいざとなったら便利に働いてもらおう。位には考えてるだろう。強欲な連中は管理局入りさせて便利にこき使おうとか思ってるんじゃないか」

室内に戻ってコーヒーを奢ってやった。話し相手の対価だ。

「ところで、隊長陣と仲いいですけどいつから知り合いなんすか？」

「すずかは五歳の頃から、アリサとなのは六歳、フェイト、はやて、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラが九歳だな。九歳の時の話は機密事項だから個人的に話すわけにはいかないがな」

「我ががエース・オブ・エースってどんな人だったんですか？」

ふむ、

「ん〜」

「説明しにくいですか？」

「いや、話していいものかと。」

取り敢えず、運動音痴で学力平均はそこそこ。流体感応力は大凡二万詞階。

特筆すべきは空間認識能力の高さによる運動系授業の立ち回りだな。走るのが遅いからほとんどわからなかっただろうが」

「へえ、なんでもできる無敵のヒーローってイメージが強いですけどね」

「比較対象が悪すぎる。同じクラスに中学生と同じ速度で走るすずかがいたからな。」

運動は体幹は出来てないし体の使い方がわかってないしで見ても無残だったな。

ただ、小学三年生……こつちの言葉で初等三年目だったか？　そこで人生は大きく変わる。空間認識の高さは空戦での立ち回りに生かされ、おまけに収束魔法のレアスキルとやらがあつて火力には困らなかった」

「そんな幼い時から収束魔法つてことは」

「無理を積み重ねてたらしいな。生憎と俺も重症でその時のことを知らないんだが」

飲みきった缶をゴミ箱に放り込んで、

「そこからリハビリのついでに体を鍛えて無理をしない立ち回りを学んだらしいぞ。」

近距離とクロスレンジはまだまだお粗末だが」

「近距離とクロスレンジつて違うんですか？」

「詳しく言えば違う。とはいえこれは格闘技の話だな。」

射撃にしては近く、打撃戦が始まっている間合いではないのがクロスレンジ、打撃戦が行われる間合いが近距離、通称ショートレンジだ。クロスカウンターを狙える間合いだからクロスレンジと呼ばれるな」

説明ついでに、基本的に魔法なしでザツファイヤーがショートレンジ、シグナムがクロスレンジだというと納得した。

「因みに、得意レンジはどこなんです？」

「ショートかクロス。ミドルレンジも出来ないわけじゃないんだが、非殺傷がどうかあるからな」

「はっはっは、マジで模擬戦相手として優秀ってわけですね」

「そういうことだ。仕事に戻るよ。話し相手になってもらって悪かったな」

「いえいえ、退屈はしませんでしたから。次は機密事項を話さないでくださいよ」

善処はする。反省はしないが、というとやれやれと言ってあっちも仕事に戻った。

「ホテルアグスタ？」

面倒だからパス。人手が欲しいならすすかでも連れていけ」

「すすかちゃんは武装局員の資格を持ってないから連れて行っても意味がないの。」

アリサちゃんでも良かったんだけど、条件がアルくんを連れて行くことだから」

ニコニコと笑いながらもジリジリと間合いを詰めてくる。

二つほど笑えない点がある。

一つは今日からの仕事が多くて余計なことをしたくないこと。

二つ目はフェイトの手にワイヤーが握られていること。

ぶつちやけ身の危険を感じている。

後ろに一步下がる。それに食いつき前に飛び出た瞬間前進し、音で意識を逸らして鳩尾に一撃、顎に二撃入れて昏倒させる。ニヘラつと笑っているナマモノを部屋の外に捨てて作業に戻る。明日してもいい作業だが、世界で二番目に真面目な性格としては今日中に終わらせたいところだ。

念の為に入口一步分の場所にある床の支えを解除しておく。

「アル君往生際がベブシ」

案の定穴に引つ掛かったなのはを一部始終映像に収め、外部ハードに保存して外部ハードを切り離す。

「全身で奉仕を表現するとはなかなかアクティブだな、高町なのは」

「うっ」

「ん？」

「うるっさーい!! こんなどころにトラップなんて仕掛けた上にフェイトちゃんを縛って廊下に寝かせるなんてどういうつもり!？」

「いくつか訂正しよう。あのワイヤーは俺の持ち物ではない。俺なら炭素繊維のロープを使う」

「それ、暴れたら体が切れる奴だよね？」

「あと、それはトラップではなく土を掃き溜めるゴミ箱だ」

「……」

「最後に、煩いのは君の方だぞ高町なのは」

「……もうやだああああああああああ」

うわああああん、と悲鳴を上げて出て行った。

毎回多彩な仕掛けを披露して遊んであげているのだ、感謝して欲しい。

「さて、仕事が残っていたな」

自分の仕事の案件だけ振り分け、違う部署の仕事はそれぞれに割り振っていく。

仮想モニターなんてまるでDTのようだ。まあ、あそこは軽い牢獄だったが。

「あとは送信して自分の分の報告書だな」

そして、ゴン太ビームで貫かれ、数秒スタンする。

(不意打ちか!?)

その間にバリアジャケットを着た金髪が復讐とばかりに顎を殴り脳震盪させてきた。

意識を失う前に、一言告げておかなくては

「暴力に頼りすぎると婚期を逃すぞ」

「……」

ゴスつと、バルディッシュで脳天を殴りつけてきた。

\$ &

「なのはさん、さっきの砲撃は？」

「復讐、かな」

エリオが気になったのか尋ねていた。

その一言に戦慄する。何考えてるんだろうこの人、という恐怖だ。

「……あの、フェイトさん。その簀巻きは？」

「運搬する荷物かな」

続いて違和感にキャロが尋ねて、

「……さっきの魔力反応は？」

呆れて私が何してるのか、という牽制も込める。

「ちよつと、女性の敵を仕留めただけだから」

「その、そこに転がってる缶はなんですか？」

スバルがのほほんと質問して……そんなものさっきまでなかったような

「……へっ？」

ドン！

「メガっ、目がー!？」

「ミミガー!？」

阿鼻叫喚の地獄絵図、というのだろうか？

スタングレネード、だったか。術式で使えばいいのに実物を用意した。

つまり、魔力で感知されないための手段……。

耳鳴りと目の痛みが治まる頃にはフェイト隊長となのは隊長が倒れていた。

簀巻きが腕と足を出している。

「……いつからここは魔境になったのやら」

そして簀巻きを外した瞬間バインドでまたミノムシにされている。

何が彼らをネタに走らせるのだろうか？

もしかして、第97管理外世界出身のなせる血の濃さなのだろうか？

ザファイラがミノムシを引きずり、アリサ治療補佐（最近知った）がなのは隊長を、シグナム副隊長がフェイト隊長を運ぶ。ヴィータ副隊長がミノムシを蹴り、八神部隊長とシヤマル医務官がクスクスと笑って搭乗していく。

私たちフォワードはお腹いっぱいな表情で後に続いた。

「えつと、今回機動六課はホテルアグスタで管理許可ロストロギア

オークションの護衛を請け負うことになりました。ぶっちゃけるとレリックとは関係ないんやけどロストログリア反応に釣られてガジェットが来た時の対応班ってわけやな。副隊長とフォワード陣は周辺警備になる。指揮はシヤマルにとってもらうから。

囑託のふたりはシヤマルの指揮下に置くけど、状況がまずかったら自由に動いてもらうで。

質問あつたら今のうちにな」

「んゝー！ んゝー!?!」

「あの、さつきから足蹴にされてるのは放置なんですか？」

「アルくんがうちをお嫁さんにもらってくれるんなら止めるで」

また戦慄する。この人たちマジで怖い。そしてペースを上げた隊長二人も怖い。

「えつと、シヤマル先生の足元にあるケースはなんですか？」

「ああ、これは三人のお仕事着ですよ」

この仕事、大丈夫なんだろうか？

「ふむ、この間取りだと……」

「やっぱりここよね」

「ふたりとも、見回りに参加して欲しいんだけど」

「ちよーつと怪しい場所に潜入しようかなって」

「密売品がありそうな場所に潜り込めるの俺たちくらいだしな」

そう言つて通信を割る。

目的地へと近づいてみれば案の定警戒が厳しい。

スツと通り抜けて奥の保管庫へとはいる。警報器をすべて消して、慎重にトラックを開ける。

中に人はいない。じゃ、遠慮なく……ガサ入れた。

「野犬からロングアーチへ。密貿易品らしきものを発見した。

違法ロストログアなら回収したい、鑑定を求む」

「ロングアーチ確認しました。一つずつ見せてください」

計12個全て違法品。シャマルに繋ぎ直して本にしまい全部へりに飛ばす。

栞にして挟んでしまえば後は楽だ。ヴァイスには先に六課に戻るように指示が出たらしい。アリサは護衛で行った。

「さて、次の隠し部屋にでも……」

「アルくん、敵襲です。外に出て」

「はいよ、どこ受け持てばいい」

「フオワードと一緒に周辺警備を」

まあ、民間協力者を前線に置くと体裁が悪いか。

「ハイランダー、仕事だ。武器は豪皇で」

《Angfang》

さて、玩具か本命の人造人間か。俺ならデータを取るために玩具だな。

「あー、こりやテコ入れが入るな。次回からは面倒なことになりそうだ」

フロントの屋根の上で一人戦場を俯瞰する。爆発が起きてるといふことは撃墜できているということ。

自分ならパターンを把握して自律行動の変化。パターンを組み込む。
〈召喚反応、各員警戒体制〉

テコ入れは今回からか。となれば半分位こちらに流れてくるか？

「Tes. Tes. こっちは受け持つからちよつと余裕持て。」

シグナム、関節部や表面の隙間を抜け。ヴィータはホーミングに切り替え。ザツファイアはシグナムと合流して回避後隙を晒すように攻撃。出来なかつたら無理すんな」

〈うっせー、そのくらいできるわ！〉

〈承知した〉

〈心得た〉

〈あ、あら？〉

「はいはい、シャマルは指揮管制を続ける。俺も出るから指揮は預けるぞ」

トン、と屋根を蹴って着地する。ここまで戦場が荒れたら次の手は、強襲だろう。

召喚士ということは転移もやってくるはずだ。

「転移来ますー！」

「詞変！ 五百万詞階の遺伝詞よ！」

ア、と言う遺伝詞を響かせて真紅の詞色、巨大な朱雀を生む。

「ムム、均等化してこのぎまつてのがまたなあ」

圧縮の具合がイマイチだ。アリサならもう一回り小さな朱雀を作れるだろう。

「フォーメーションに変化はない。俺がティアナの防御だ、行け！」

大きく羽撃き、三型のアームごと貫いて更に奥のガジェットも撃ち抜く。

見とれていたエリオとスバルも慌てて前線を維持しに走る。

機械的な反応とは異なり、防御ではなく回避を選んだ。

「操作されてるな。となると、面倒なところもあるが楽なところもあるな、つと」

ティアナの死角から飛んできた魔力弾を五行して砕く。

アリサがいれば攻撃に回ってくれるんだが……。

味方の攻撃を避け、死角に回り込んで攻撃してくるのは厄介だ。

「全弾撃ち落せ、回避なんてする暇はない」

だが、それならそれでやりようはある。

「つ、言ってくれますね!」

「口より手を動かせ。反応出来ない分は叩き落としてやる。」

ルシエ、エリオにブースト! エリオは近づいて一機ずつ確実に仕

留める! スバルは大型!」

〈アルフレートさん!〉

「黙ってる、バックスの仕事は安心して前が戦える状態を作ることだ!」

詞変! 二百万詞階の遺伝詞よ! アア!」

レッサードラゴン
小 龍、

と呼称される龍族の端くれ。

紅い鱗に角と牙のある姿はいかにも、といったところか。

三型に向かって突っ込み、避けてもその爪で切り裂いていく。

〈皆、召喚は無限でもガジェットは有限よ、ヴィータちゃんが戻るまで
凌いで!〉

シャマルが残数と状況を管理しながら励ます。

「気張れシャバ憎ども! あと十数分だ!」

エリオ、チビ竜かティアナの攻撃を避けた後を狙え! スバルは突

出しすぎだ!」

〈ハードル上げんな!!〉

そう言いながらも手は休めない。

とはいえ、ティアナの集中力はそろそろ限界か。

「各員、射線に入るなよ!」

飛んできた魔力弾を鉄の槍に風水して打ち返す。

三型を一体貫き止まった。威力は足りてるのか。

……！ ああ、ダメだ。手を出したら俺はともかくこいつらは殺られる。

「ティアナ、魔力の残量は!?」

「後三割!」

カツカツか。魔力量に難有りだな。

敵は後13程、おかわりがなければなんとかなるはずだが……

「残り二割になったら攻撃は控えろ、状況が悪化したら攻撃再開だ」

「頼れるヴィータ副隊長様だぞつと!」

ズドン、とハンマーで砕いて現れた。

「ヴィータは中衛、んでポジションチェンジだ」

「部品は残せよ!」

「善処する!」

ヴィータと入れ替わり前に出る。

豪皇で叩いて駆動系を五行するだけで破壊できるのだからこちらの方が早い。

※※※

「よっしゃ終わり! シグナム、そっちはどうだ?」

〈こちらも片付いた〉

「ヴィータ副隊長、アルフレートさんが消えました!」

「あーほっとけ、被害確認だろ」

中を気にしてたつてことと、一瞬敵を見てなかったつてところを加味すれば、

「ロングアーチへ、魔力反応の解析を頼む。見えない敵がいるかもしんねえ」

後はあいつの報告しだいだな。

「彼の街は天地に通ず」

「朝に地へ堕ちて雲を仰ぎ」

「夜に空へ昇りて月を謳う」

「惟再び君と笑うことを望む」

「なにそれ、初めて聞くんやけど」

「後ろから抱きつくな。衣装が台無しになるだろう、八神はやて」

「もう、”陽阪はやて”でええんやで？ キヤツ……ん？」

面倒だから放置する。ラフな格好だったから肩のところにある二つの噛み跡を見られてしまった。

「アル君、なんやこれ。新手的キスマーク？」

「忍に噛まれた後だ。話によると俺が昏睡したあとだな。」

そこから血を入れられたんだそう。お陰でデイ・ライト・ウォーカーの仲間入りだ」

「ふーん……ところでさっきの歌は何？」

猫ならばゴロゴロという声を出しそうなほど甘えてくる。

「飛翔歌、と呼ばれる風水街都香港の歌だ。」

何のために作られ、何のために存在していたのかを知る人間は、俺が訪ねた時にはもういなかったけどな」

將軍、と名乗った男なら知っていそうだったが、あれは死んでも喋らなかつただろう。

「で、いいのか？」

「油売っててもええんよ。アコース査察官は仕事に戻ったし、警備の仕事も終わったし」

なるほど、俺を呼びに来たということか。

「何黄昏てるん？ それとも自分かつこいいとか？」

「別に。無駄に焦らせたかと思うとな」

あと、胸当たってるぞ。

「当ててるんや。すずかちゃんほどのモネモネやないけどアリサちゃんほどペタンでもないつもりやで？」

「トランジスタターゲットグラマー」

ゴスつと一発頭に叩き込まれた。大した痛みではないが、墓穴だったらしい。

「個人的にはもう少し胸があってもいいと思うがパッドは」

もう一発おかわりを食らった。

「んで、焦らせたってなんや?」

そこまで戻るんだ、というつぶやきは無視され。

「体術に優れて指揮もできる。そんな人間を見てさらに焦らないかと思っ
てな。」

今回は全弾撃ち落とさせたが、そんな技術なのはだってできないの
にな」

「才能がない、と焦るんじゃないかってことやな。」

まあ、アル君は積み重ねた人生が重すぎるでー。

ヴァイスくんを働かせてみよか。前は狙撃手だったしな」

「後は指揮経験だな。こればかりは積み重ねた実績だ。」

頭おかしい集団でさえなければ俺でも務まるくらいだし」

「どのくらいまでが頭おかしいライン?」

ふむ……。

「前世の俺だな。」

あの頃は運命もあつたし周りも魔弾フライシユツツエの射手とかの強臓式機械があ
りふれてたしな」

「フライシユツツ?」

「魔弾の射手、必中の魔弾だ。自動小銃で正確に狙撃しやがって」

「は? 拳銃で狙撃!?!」

「全く。あの一発がなければもう少し動きやすかったんだが」

あいつのせいで運命を使う羽目になったこともある。痛い出費
だった。

「さて、スターズとライトニングは現場検証だな。」

カフェでランチでも食うか?」

「わーい、行く行く」

頬を綻ばせて腕を引っ張ってくる。卑しん坊め。

〈アルくん、今不穏な〉
フレームを割って危険を回避する。

「皆、今日はお疲れ様。夜の訓練はないから今日の疲れをしつかり落として、明日からまた頑張っていこう」

「それと警告ね」

「今日のアルフレート外部協力陸尉相当は真似しちやダメな部類だから。彼は類い希な戦闘資質もある上に、過酷な戦場経験で培ったモノを下地にしてるから、”死ななければいい”っていう感性で現場に挑んでるの。」

それは、真似しちゃうとこれからの人生を損なう可能性だつてある。片腕をなくしてでも生き残るっていう覚悟は必要かもしれないけど、不要なところで傷を負ってしまうのはよくない傾向だから」
〈真似するなよ、一秒単位で状況を把握して戦う高等技術だ。やりたければ稽古をつけてやるから直接談判しに來い。勇気と無謀は違うのだと教えてやる〉

見下しながら忠告と譲歩を見せる。

「ど、どこから!?!」

〈なのはちゃん!〉

「すずかちゃん? どうしたの?」

〈アルくん見なかった? 自白を強要したくて……〉

『約全員：それ尋問だ!』

「見てないよ、ヘリから降りたら一目散に逃げたし」

〈そっかあ、ありがとう。あー〉

無言のプレッシャー。謎の重圧がすごい。

「さて、アルくんを生け贄に……」

〈なのはちゃんにフェイトちゃん!〉

簀巻となにもないところで転ぶシーンがデータバンクに登録されたってグリフィス君から!!!〉

「ふえっ!？」

「にゃー!？」

「へすずかの仕業ですネー。プロテクト解除の失敗によるランダム公開のデータデスヨ〜」

「アルくん!？ 今すぐ削除して!!」

「へはやての権限が要るから俺に頼るな。」

「ついでに、次の失敗ですずかの失態がアップされる」

「へあ、グリフィス君からすずかちゃん映像が出たって報告も来たわ。アルくんの部屋で布団にダイブして蹲って震えてるらしいわ」

『約全員：うわあ』

『鉄槌：どうにかしろよ、お前の嫁だろ?』

『野犬：知らん、あいつが狂ったのはあいつの姉が悪い』

『紫鬼：アルくんどこお?』

『野犬：なのはとフェイトの間』

「各員散開!!」

「反応が遅れたスバルが吹き飛んだ。かわいそうに。」

「ちっ、ブラフか!」

「なんですか、アレ」

「「テュポーン」」

「テュポーンってのはギリシヤ神話の災厄を司る巨人、現代解釈における台風だ。」

「通り過ぎればなんてことはない、という意味だろうな」

『なのは：はやてちゃん、動画消してほしいな!』

『祝福：はやてちゃんは動画を見て笑い転げてるのでしばらく応答不能ですう』

『約全員：なんか、ごめん』

『アリサ：なんで私のマッサージシーンなんて上がってるのよ!?!』

『約全員：なんか、ごめん』

『アリサ：謝るなあああああ!!』

「ところでアルフレートさん、いつからそこに?」

「すずかが走り去った後。」

「というわけでお前ら、特別講習を受けるのなら早いうちにな」

「すずかちゃんここにいろよ!!」

「Holy Sit!!」

逃走劇は終わらない。

そう、正妻戦争は続くのだ。

ズドン、とお仕置きビームが飛んで行った。
たーまやー!

「馬鹿だなあ、安全マージンも取らずに突っ込むなんて何考えてんだ？」

コーヒーを飲みながら観察する。

すりすりぺたぺたクンクン。

「で、何をしている。はやて、八神はやて。はつきり言っつて今の君は痴女だぞ」

「えへへへへへ、アル君の匂い」

『野犬：おい、部隊長の精神が崩壊してるぞ』

『烈火：そのままもらつてくれると助かる』

『鉄槌：責任取れよなあ?』

『賢嫁：私を愛してくれるなら何人困つてもいいけど、程々にね』
度量が広い分、面倒ごとが起きるのだと察してほしい。

『野犬：あ、今なのはが私刑終わらせた。ティアナが運ばれるぞ』

『賢嫁：はいはい、シャマル先生にも伝えておくわ』

「構えにやく！ このこの！ 寂しくて死んじやうぞお?」

トストスと背骨をつついてくる。休憩時間長いな。

ひよい、と持ち上げて胡坐をかいてる前に持つてきてかわいいがる。
猫のように。

「わふわふ……クウーン」

ニヤーニヤー言ったりワフワフ言ったりと、
兔ラビットなのか犬ドッグなのか猫キャットなのかはつきりしろよ。

人差し指に指輪がはまっていることを確認し、右手を前に出して、
「ア」

と、正面から飛んできたビームを風水する。結構な詞階を積んでいたのか、鳳が生まれた。

「わっ、大きいなあ」

興味がそつちに移ってしまったのか鳳にちよつかいをかけに行つ

た。

過剰にべたついては嘴で折檻されている。何をやっているのだろうか？

ついでだし動画を撮って流しておこう。

『野犬：http：／／／／／／』

『鉄槌：ブハツ!』

『魔王：二人して何してるの?』

『烈火：アルフレート、不意打ちとは卑怯だぞ……!!』

『閃光：真面目なところだったはずんだけど……あ、エリオ見ちゃダメ!』

大人のいけないチャット通神棒にエリオが気付いたらしい。

痴態が結構上がってるから見せられないだろう。

南無南無

「はやて、そろそろ時間だ。仕事に戻らないとグリフィスが説教することになるぞ」

「うっ、了解。大人しくしておきます。んっちゅ」

大人しく、とか言っておきながら平然と俺の唇を奪って去っていった。

右手を口元に添えながら。

『紫鬼：アルく、おやつ一緒に食べない?』

『約全員：空気読め!!』

『襟男：こっ、かな?』

『野犬：ようこそ、溜まり場へ。とりあえずこれでも眺めてろ#35269.gif』

『閃光：あー! ダメ! ダメだつてばあ!! ってなのはも巻き添え!?!』

さて、痴態を流したところで——仕事に戻るか。

最後のデータを確認し、問題点、疑問点、改良点をまとめ入力し、上に提出する。

これはあとでさすがに検閲し報告書として仕上げるのを待つばかりだ。

「飯にするか」

何人かに声を掛けられ、やりすぎはやめておけと忠告される。

食堂へ向かい、列に並んでいる時に通神が鳴った。

『夜天：隊長とアル君集合。ちよつと意見頂戴』

『鉄槌：あたしはいいのか？』

『夜天：出撃待機だけしておいてなあ』

『野犬：今から飯にするから後でな』

『約全員：今すぐだよ！ 仕事しろ!!』

ため息を一つつき、列から離れる。どうした、と後ろに聞かれ、仕事が入った。と告げるとポンポンと肩をたたかれる。それを聞いていた周りの人間からはサムズアップを食らう。

最近、扱いが軽くなってきた気がする。

「うーっす、呼ばれたから来たわけだが……邪魔だったようなら出直すが」

胸に顔を埋めてる高町と、なすがままのテストタロツサ。テストタロツサは若干顔が赤い。

「ふえ!? あ、だ、大丈夫だから！なのは、とりあえず離れて？ね？」

「うう、もうちよつと……」

何があったか知らないが、疲れているらしい。

ここは優しくしてやるのが優しさだろう。

「何があったか知らないが、疲れてるときはペットを撫でて癒される」といふ

「私はペットじゃないよ!」

「というか、アル君のせいだからね!! エリオがこっちをまともに見

てくれなくなったの!!」

はて？

「寝ぼけたなのはが私のベッドにもぐりこんだ時の映像をエリオに流すなんて!!」

……あー、gifのリンクを張った気がするな。

ちよつとエッチイやつ。寝ぼけたなのはがフェイトを襲う系の。

はやてが暇つぶしにこっちに流してきたから持ってたんだっただか。

Amen.

それはともかく、

「一体何用だ、それなりの事情だと思っているわけだが」

「あーうん、これなんやけど」

そういつて、モニターに沖で飛び回っているガジェットの群れを映す。

スルー!? という突込みが飛んでくる。俺は世界で二番目に忙しい。遊んでいる暇はない。

「……いつもどおりに処理すればいいんじゃないか？」

「アルくんも同意見かあ。手の内を晒さないってこと？」

「それだけじゃないが、わざわざ晒す意味もないだろうに」

リスクを回避する、という意味だけではないが

「だが、バリエーションは増やしておいたほうがいいだろう。

これしか手段がない、なんてなめられるのも癪だ」

「ふむ、ならヴィータをシグナムに変えてみよか」

「いいんじゃないでしょうか？ シグナム副隊長も一応空戦型ですから」

トントンと話が進んで出撃、なのだが……

「私が言うことを聞かないから連れて行かないって言うんですか!？」

「そりやそうだろう」

「なっ!」

「命令違反の末に味方を巻き添え、拳銃訓練で無価値な危険行為。」

頭を冷やせと言われても仕方ないだろうな。

腕のいいアグレッサで良かったな。下手をしていたら半身不随だぞ?」

「……何が分かるんですか!」

「知らないな。何に焦ろうと個人の自由だし、何に悩もうと個人の自由だ。」

だが、怪我をするのが自分ひとりなら自業自得だが——相方ごと怪我をさせるのは指揮官として役立たずだろうか?」

「ア、アルくん……」

当たり前で、当然の意見をぶつける。

「アルフレートの言うとおりだろ。」

やっていいことやつちやいけねえことくらいは分別つけるよな「だけど……だけど!!」

殴ってでも止めようとして、先に打撃音が鳴った。

「すまん、手間を掛けさせた。俺の仕事だったんだがな」

ガシガシと頭を搔く。

「あまりにも見苦しかったのでつい、な。」

ヴァイス、出られるか?」

「乗り込んでいただけりやいつでも」

パン、と柏手を鳴らし

「取り敢えず、三人はガジェット潰してこい」

そう言って搭乗口を指す。

「了解した。行くぞ、高町。アレコレするのはあとだ」

「ティアナ! あとで話し合おう!」

「アホタレ、下手に付き合うからつけあがるんだよ! さっさと行け」
副隊長と隊長のショートコントらしきものもおかしな話だ。

「あの!」

「どうした、スバル二等兵」

「二等陸士です!」

あの、努力することが間違いなんですか?」
なるほど、納得いつていないらしい。

「続けろ」

「命令違反は悪いことだし、さっきのティアのことを止められなかったのも悪いとは思うんですけど……。」

でも、強くなろうと努力することは悪いことじゃないと思うんです！」

「青いな」

「なっ！」

「はいはい、話が進まないからそこまでね。」

ちよつと、昔話しようか」

シャーリーが仲裁した。少し落ち着けということらしい。

「まあ、構わんがね。あとで謝っておけよ」

「うっ、はい……」

待機場所であるロビーにぞろぞろと入り、柱に背を預ける。

ほかの連中はソファに座った。

「さて、どこから話そうかな。やっぱり初めから、か。」

私は比較的長くなのはさんたちと付き合ってるから、色々聞いたりしてるんだよね。

勿論、なのはさんの教導の意味も。

じゃあ、少し長い話だけど、ね」

いつ入手したのか、初めての海鳴市の道路破壊事件の映像すら残っていた。

「まあ、この時点で無事に闇の書事件は解決できたの。」

犠牲の元に」

いやはや、少し懐かしい話だ。随分寝ていたから実感は薄いかな。

「え、アルフレートさん？」

「犠牲者のアルフレート・マルドリック・陽阪。」

当時小学三年生で、肉体状況は中学校入学程度。

今そこに立っているんだけど、当時からしてみれば一番被害を背負った人かな。

数年に渡る昏睡、このまま植物人間として生を終えるんじゃないか、なんて診断されていたの」

「そんな……」

「ふざけているイメージしかなかった……でも、今は平気なんですよね?」

「そうやって、笑って聞いてくるが——」

「それでもねえぞ、これでも全盛期より遠い。んで、一生元に戻らない」

「お前が謝ることじゃない。すべての責任はあの選択を取った自分にある」

またロビーに沈黙が降りる。

「そして、そのことに責任を感じてたなのはちゃんは、中学校入学とともに入局。」

入局二年目にして、重症を負って撃墜される」

あつ、と声が漏れる。

自分としてはそんなことがあったのか、くらいだが。

「ずっと無茶してた代償に自分の限界を超えてしまった。その結果——何気ない、普段なら余裕を持って対処できた一撃を回避できずに、数カ月入院生活が始まることになったの。」

もう二度と、空をとぶこともできないかもしれないという恐怖と戦いながら」

「笑って、へましちやった、なんて言ってるがな。」

周りに同情を抱かせないようにしてたみたいだ。リハビリでは随分苦しんでたそうだな」

ああ、不屈のエース・オブ・エースってそういう……皮肉だな。

「で、当時最高の治療技術を持ってたアリサちゃんは、自分の星、第9管理外世界の事件で動けなかったの。」

でね、結局右腕に違和感を背負ったまま今も戦ってる」

「アリサさんでも治せないんですか?」

「アリサの治療には条件があつてな。体が異常を認識していないと治せないんだ。」

風水治療、といって今では廃れた遺伝詞干涉能力による副次効果だからな。脳が異常を覚えていても、腕が異常を覚えていなければ治せ

ない。もつと言うと傷があっても傷自体が異常を覚えていなければ治せない」

「そんなわけだね、なのはさんの教導は自分と同じように後悔しないためについて大事に大事に育ててくれてるんだよ？」

「で、お前のあの特攻に、そうしなければならぬ事情はあったのか？」

アレは、どうしても引くことが許されない死地だったのか？」

「……」

沈黙、か。

「もつと言うと普段のオーバーワークにも価値が無いけどな」

「アルフレートさん？」

「判断力が鈍った状態で高速処理なんてする意味がない。

そういう時にするのは平時と同じ状態を作ることだ」

後は知らん。俺は銃士じゃないからな、そう言つて沈黙を保つた。

ポロポロと涙を流し、俯いて、何も言うことができなかつたのか、そ

のまましばらく続いた。

『各員へ、状況終了。繰り返す、状況終了』

「後は自分で考えろよ」

「ヴィータ、奢つてやろうか？」

「マジで？ ステーキステーキ！」

『鉄槌：あー、なのは？ 後でシャーリー絞めておけよな』

『魔王：何があったの!?!』